本庄市埋蔵文化財調査報告　第31集

市内遺跡発掘調査報告書

四方田(II・III・IV次調査)・久下東(II次調査)

2005

本庄市教育委員会

本庄市埋蔵文化財調査報告　第31集

市内遺跡発掘調査報告書

四方田(II・III・IV 次調査)・久下東(II 次調査)

2005

本庄市教育委員会

序

本庄市においては、昨春、新幹線本庄早稲田駅が開業し、今後ますますの飛躍が期待されていますが、交通の要衝としての当市の歴史は古く、江戸時代には中山道の中心的な宿場町として大いに繁栄したことがよく知られています。また、中世においては山内上杉氏による「五十子陣」の設営に見られるように、上野・武蔵間の連絡路確保のための重要な軍事拠点となり、また、古代においては渡来人がつくったとされる公卿塚古墳出土の埴輪が示すように、遥か朝鮮半島との交渉もあったことが想定されています。そうした歴史的背景をもつ本庄市は多くの貴重な埋蔵文化財にめぐまれ、本庄台地を中心に旧石器時代から近世まで多様な遺跡が分布しています。

本書に報告した四方田遺跡・久下東遺跡の調査は、ともに小規模な範囲にとどまっていますが、出土遺物も豊富で多くの重要な資料をえることができました。また、付近ではこれまでにも住居跡が発見されていることから、周辺には相当に大きな集落跡が展開していることが窺えます。

とくに四方田遺跡は、５世紀の拠点的な集落跡であったと考えられますが、この時代は児玉地域一帯で低地部の集落遺跡が急増する時期であり、同時に低地部の開発が著しく進展した期間でもありました。現在、大久保山北麓に広がる集落とそれを取り巻く水田地帯の景観は、おおよそこの頃に形づくられたものであり、５世紀の水田開発は現代的景観にもつながる歴史的事業でもあったと評価できます。一方、久下東遺跡は律令時代の集落跡で、最近まで市内各地に残っていた条里水田が整備された頃の主要な村落のひとつと考えられます。これらふたつの遺跡は、現在の四方田地区や北堀地区の村落形成が、千年以上前にさかのぼることを証明する郷土の貴重な文化財といえましょう。

今後は、本書が学術研究の発展に資するとともに、一般にも広く活用されることによって郷土史への関心や埋蔵文化財への理解が一層深められることを願ってやみません。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導、ご教示を賜りました方々、現地調査にご協力いただいた関係諸機関、各位に心よりの御礼を申し上げます。

平成17年３月

本庄市教育委員会
教育長　福　島　　巖

例　言

1．本書は、個人専用住宅建設に伴い、国庫補助事業「市内遺跡発掘調査等事業」として実施した発掘調査および試掘調査の報告書である。

2．調査は、本庄市教育委員会が調査主体となり実施した。

3．各調査地点の所在地および調査対象面積は以下のとおりである。

四方田遺跡II次調査地点	埼玉県本庄市大字四方田字屋敷前258番地	90m²
四方田遺跡III次調査地点	埼玉県本庄市大字四方田字屋敷前239-3番地	244m²
四方田遺跡IV次調査地点	埼玉県本庄市大字四方田字屋敷前257-1番地	118m²
久下東遺跡II次調査地点	埼玉県本庄市大字北堀字久下東1308番地	187m²

3．各調査地点の調査期間は以下のとおりである。

・現地調査

四方田遺跡II次調査地点	自	平成4年11月16日	至	平成5年1月20日
四方田遺跡III次調査地点	自	平成5年1月21日	至	平成5年1月22日
四方田遺跡IV次調査地点	自	平成6年10月12日	至	平成6年12月22日
久下東遺跡II次調査地点	自	平成5年6月24日	至	平成5年8月11日
・整理調査	自	平成16年4月1日	至	平成17年3月20日

4．現地調査は本庄市教育委員会社会教育課太田博之が担当した。

5．整理調査は太田が担当した。

6．調査記録・出土遺物の整理、図版の作成は太田ならびに本庄市教育委員会社会教育課松本完が行った。

7　遺物の写真撮影は松本が担当した。

8．本書の編集は太田が担当した。

9．本書の執筆はII-C-3-i、IVを松本が担当し、その他を太田が担当した。

10．本書に掲載した出土遺物観察表の作成は松本が担当した。

11．本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関係する資料は本庄市教育委員会において保管している。

12．石器・石製品の石材鑑定は埼玉県立本庄高等学校教諭中村正芳先生にお世話になった。

13．発掘調査から整理調査、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重な御助言、御指導、御協力を賜った。ご芳名を記し謝意を表する次第である。(順不同・敬称略)

荒川正夫　大熊季広　岡本幸男　金子彰男　恋河内昭彦　昆　彰生　佐々木幹雄
鈴木徳雄　外尾常人　田村　誠　徳山寿樹　鳥羽政之　長瀧歳康　松澤浩一
丸山　修　丸山陽一　矢内　勲

14．本報告に関係する各遺跡の発掘調査、整理調査及び報告書刊行にかかる本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

・平成４年度（四方田遺跡II・III次調査）

教育長	塩原　暁
事務局長	金井善一
社会教育課長	坂上英夫
課長補佐	吉田敬一
文化財保護係長	長谷川　勇
文化財保護係	増田一裕
	太田博之
	佐藤好司
	遠藤優子
調査担当者	太田博之

・平成５年度（久下東遺跡II次調査）

教育長	塩原　暁
事務局長	金井善一
社会教育課長	中島正和
課長補佐	吉田敬一
文化財保護係長	長谷川　勇
文化財保護係	増田一裕
	太田博之
	佐藤好司
	遠藤優子
調査担当者	太田博之

・平成６年度（四方田遺跡IV次調査）

教育長	塩原　暁
事務局長	荒井正夫
社会教育課長	中島正和
課長補佐	吉田敬一
文化財保護係長	長谷川　勇
文化財保護係	増田一裕
	太田博之
	佐藤好司
	遠藤優子
調査担当者	太田博之

・平成16年度（整理調査・報告書刊行）

教育長	福島　巌
事務局長	揖斐龍一
社会教育課長	吉田敬一
課長補佐	桜場幸男
同	上野良一
文化財保護係長	吉田　稔
	太田博之
	斉藤みゆき
臨時職員	松本　完
同	逆井洋美
調査担当者	太田博之

凡　例

1．本書所収の遺跡全体図におけるＸ・Ｙ座標値は国土標準座標第IX系に基づく。

2．各遺構における方位針は座標北を示す。

3．本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則的に以下のとおりである。

［遺　構　図］

遺構平面図…１/30・１/60

土層・遺構断面図…１/30・１/60

［遺物実測図・拓影図］

弥生土器（拓影図）…１/３

Ｓ　字　甕（拓影図）…１/３

土　師　器…１/４

石　　器…１/１・１/２

石　製　品…１/２

その他のものについては、個別にスケールを示した。

4．遺構断面図の水準数値は海抜を示す。単位はｍである。

5．遺構断面図のスクリーントーンのうちストライプは地山のローム層を示し、アミは貼床層を示す。

6．観察表中の遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所色票監修の新版『標準土色帖』2000年版によった。

7．本書で使用した地形図は国土地理院発行　１/25,000「本庄」に加筆したものを用いた。

8．本書で使用した位置図は本庄市発行「本庄市都市計画図」１/2,500に加筆したものを用いた。

9．本書の引用・参考文献は巻末に一括して記載した。

目　次

序
例言
凡例
目次

Ⅰ　遺跡の環境……1
Ⅱ　四方田遺跡の調査……4
　A　四方田遺跡Ⅱ次調査……6
　　1　調査に至る経過……6
　　2　調査の方法と経過……7
　　a　調査の方法……7
　　b　調査の経過……7
　　3　調査の成果……9
　B　四方田遺跡Ⅲ次調査……38
　　1　調査に至る経過……38
　　2　調査の方法と経過……38
　　3　調査の成果……38
　C　四方田遺跡Ⅳ次調査……40
　　1　調査に至る経過……40
　　2　調査の方法と経過……41
　　a　調査の方法……41
　　b　調査の経過……41
　　3　調査の成果……44
Ⅲ　久下東遺跡Ⅱ次調査……72
　　1　調査に至る経過……73
　　2　調査の方法と経過……74
　　a　調査の方法……74
　　b　調査の経過……74
　　3　調査の成果……76
Ⅳ　ま と め……85

引用・参考文献
写真

挿図目次

図１　周辺の主要遺跡分布図…… 3
図２　四方田遺跡調査区位置図…… 4
図３　四方田遺跡遺構全体図…… 5
図４　四方田遺跡Ⅱ次調査区全測図…… 9
図５　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-01 床面　……10
図６　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-01 掘り方　……10
図７　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-01 出土遺物　…10
図８　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02 床面　……11
図９　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02 掘り方　……12
図10　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02 カマド
　高坏転用支脚出土状況……13
図11　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02 カマド　……13
図12　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02 貯蔵穴　……13
図13　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02 出土遺物　…14
図14　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-03 床面　……15
図15　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-03 掘り方　……16
図16　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-03 出土遺物　…16
図17　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-04 床面　……17
図18　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-04 カマド　……18
図19　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-04 出土遺物　…18
図20　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-04・05 掘り方(1) …20
図21　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-04・05 掘り方(2) …21
図22　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-04・05 掘り方(3) …22
図23　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-05
　貯蔵穴遺物出土状況……23
図24　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-05 貯蔵穴　……23
図25　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-05 出土遺物　…23
図26　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06 床面　……25
図27　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06 掘り方　……25
図28　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06
　カマド遺物出土状況……26
図29　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06 カマド　……26
図30　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06
　貯蔵穴遺物出土状況……26
図31　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06 貯蔵穴　……26
図32　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06 出土遺物(1) …27
図33　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06 出土遺物(2) …28
図34　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-07・08・09 床面 …31
図35　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-07・08・09 掘り方…32
図36　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-07 出土遺物　…33
図37　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-09
　貯蔵穴遺物出土状況……34
図38　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-09 貯蔵穴　……34
図39　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-09 出土遺物　…36
図40　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-10 ……36
図41　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-10 出土遺物　…37
図42　四方田遺跡Ⅲ次調査出土遺物……39
図43　四方田遺跡Ⅳ次調査地点全測図……43
図44　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-11 ……44
図45　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-11 出土遺物　…45
図46　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-12・13　……46
図47　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-13 出土遺物　…46
図48　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-14 床面　……47
図49　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-14 掘り方　……48
図50　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-14
　カマド遺物出土状況……49
図51　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-14 カマド　……49
図52　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-14 出土遺物(1) …50
図53　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-14 出土遺物(2) …51
図54　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-15 ……52
図55　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-15 出土遺物(1) …53
図56　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-15 出土遺物(2) …54
図57　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-16 ……57
図58　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-16 出土遺物　…58
図59　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-17 床面　……59
図60　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-17 掘り方　……60
図61　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-17
　カマド遺物出土状況……60
図62　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-17 カマド　……60
図63　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-17 出土遺物　…61
図64　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-18 ……62
図65　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-18 出土遺物　…63

図66　四方田遺跡Ⅳ次調査　遺構外出土遺物(1)…64
図67　四方田遺跡Ⅳ次調査　遺構外出土遺物(2)
［Ａ区］ ……65
図68　四方田遺跡Ⅳ次調査　遺構外出土遺物(3)
［Ｂ区］ ……66
図69　四方田遺跡Ⅳ次調査　遺構外出土遺物(4)…68
図70　四方田遺跡Ⅳ次調査　遺構外出土遺物(5)…71
図71　久下東遺跡調査区位置図……72
図72　久下東遺跡Ⅱ次調査区全測図……76
図73　久下東遺跡Ⅱ次調査　SI-01 ……77
図74　久下東遺跡Ⅱ次調査　SI-01 出土遺物　…78
図75　久下東遺跡Ⅱ次調査　SI-02 ……78
図76　久下東遺跡Ⅱ次調査　SI-02 出土遺物　…79
図77　久下東遺跡Ⅱ次調査　SI-03 ……80
図78　久下東遺跡Ⅱ次調査　SI-03 出土遺物　…81
図79　久下東遺跡Ⅱ次調査　SI-04 ……81
図80　久下東遺跡Ⅱ次調査　SI-04 出土遺物　…82
図81　久下東遺跡Ⅱ次調査　SK-01……82
図82　久下東遺跡Ⅱ次調査　SW-01・02 ……83
図83　久下東遺跡Ⅱ次調査　遺構外出土遺物……84

写真目次

写真１　四方田遺跡Ⅱ次調査　調査前全景［南から］
四方田遺跡Ⅱ次調査　調査区全景［南から］
四方田遺跡Ⅱ次調査　調査区全景［北から］
写真２　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-01床面検出状況［南から］
四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02遺物検出状況［西から］
四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02床面検出状況［西から］
写真３　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02掘り方検出状況［西から］
四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02カマド遺物検出状況
四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02カマド検出状況
写真４　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02貯蔵穴遺物検出状況
四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-03遺物検出状況［南西から］
四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-03床面検出状況［南西から］
写真５　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-04・05遺物検出状況［西から］
四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-04・05掘り方検出状況［南西から］
四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-04・05掘り方検出状況［南東から］
写真６　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-05貯蔵穴遺物検出状況
四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06遺物検出状況［南から］
四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06掘り方検出状況［南から］
写真７　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06カマド遺物検出状況
四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06カマド検出状況
四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06貯蔵穴遺物検出状況
写真８　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-07～09遺物検出状況［東から］
四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-07～09床面検出状況［東から］
四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-07～09掘り方検出状況［東から］
写真９　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-07～09掘り方検出状況［東から］
四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-09 貯蔵穴遺物

検出状況
四方田遺跡II次調査　SI-09 貯蔵穴検出状況
写真10　四方田遺跡IV次調査　調査前全景[南から]
四方田遺跡IV次調査　B区全景［東から］
四方田遺跡IV次調査　B区全景［西から］
写真11　四方田遺跡IV次調査　SI-11遺物検出状況［西から］
四方田遺跡IV次調査　SI-11遺物検出状況［北から］
四方田遺跡IV次調査　SI-11床面検出状況［北から］
写真12　四方田遺跡IV次調査　SI-11掘り方検出状況［北から］
四方田遺跡IV次調査　SI-12・13掘り方検出状況［南東から］
四方田遺跡IV次調査　SI-12・13掘り方検出状況［南から］
写真13　四方田遺跡IV次調査　A区全景［北から］
四方田遺跡IV次調査　A区全景［南から］
四方田遺跡IV次調査　A区全景[南西から]
写真14　四方田遺跡IV次調査　SI-14床面検出状況［西から］
四方田遺跡IV次調査　SI-14床面検出状況［南西から］
四方田遺跡IV次調査　SI-14床面検出状況［南東から］
写真15　四方田遺跡IV次調査　SI-14掘り方検出状況［西から］
四方田遺跡IV次調査　SI-14掘り方検出状況［南から］
四方田遺跡IV次調査　SI-14掘り方検出状況［南東から］
写真16　四方田遺跡IV次調査　SI-14カマド遺物検出状況
四方田遺跡IV次調査　SI-14カマド遺物検出状況
四方田遺跡IV次調査　SI-14カマド遺物検出状況
写真17　四方田遺跡IV次調査　SI-15床面検出状況［北西から］
四方田遺跡IV次調査　SI-15掘り方検出状況［北から］
四方田遺跡IV次調査　SI-15掘り方検出状況［南西から］
写真18　四方田遺跡IV次調査　SI-15貯蔵穴検出状況
四方田遺跡IV次調査　SI-15貯蔵穴遺物検出状況
四方田遺跡IV次調査　SI-15貯蔵穴検出状況
写真19　四方田遺跡IV次調査　SI-16遺物検出状況［東から］
四方田遺跡IV次調査　SI-16遺物検出状況［西から］
四方田遺跡IV次調査　SI-16掘り方検出状況［西から］
写真20　四方田遺跡IV次調査　SI-17床面検出状況［南東から］
四方田遺跡IV次調査　SI-17掘り方検出状況［南東から］
四方田遺跡IV次調査　SI-17カマド遺物検出状況
写真21　四方田遺跡IV次調査　SI-18遺物検出状況［北から］
四方田遺跡IV次調査　SI-18遺物検出状況［東から］
四方田遺跡IV次調査　SI-18床面検出状況［北から］
写真22　四方田遺跡IV次調査　SI-18床面検出状況［東から］
四方田遺跡IV次調査　SI-18掘り方検出状況［北から］
四方田遺跡IV次調査　SI-18掘り方検出状況［東から］
写真23　四方田遺跡II次調査　SI-01出土遺物

	四方田遺跡II次調査	SI-02出土遺物
	四方田遺跡II次調査	SI-03出土遺物
写真24	四方田遺跡II次調査	SI-04出土遺物
	四方田遺跡II次調査	SI-05出土遺物
写真25	四方田遺跡II次調査	SI-06出土遺物(1)
写真26	四方田遺跡II次調査	SI-06出土遺物(2)
写真27	四方田遺跡II次調査	SI-07出土遺物
	四方田遺跡II次調査	SI-09出土遺物
	四方田遺跡II次調査	SI-10出土遺物
写真28	四方田遺跡IV次調査	SI-11出土遺物
	四方田遺跡IV次調査	SI-13出土遺物
	四方田遺跡IV次調査	SI-14出土遺物(1)
写真29	四方田遺跡IV次調査	SI-14出土遺物(2)
	四方田遺跡IV次調査	SI-15出土遺物(1)
写真30	四方田遺跡IV次調査	SI-15出土遺物(2)
写真31	四方田遺跡IV次調査	SI-15出土遺物(3)
	四方田遺跡IV次調査	SI-16出土遺物
	四方田遺跡IV次調査	SI-17出土遺物(1)
写真32	四方田遺跡IV次調査	SI-17出土遺物(2)
	四方田遺跡IV次調査	SI-18出土遺物
写真33	四方田遺跡IV次調査	遺構外出土遺物（弥生土器）
	四方田遺跡IV次調査	遺構外出土遺物（石製品・石器）
写真34	四方田遺跡IV次調査	遺構外出土遺物（土師器［A区］）
	四方田遺跡IV次調査	遺構外出土遺物（土師器［B区］）
	四方田遺跡III次調査	出土遺物
写真35	久下東遺跡II次調査	調査前全景［北西から］
	久下東遺跡II次調査	調査区全景［西から］
	久下東遺跡II次調査	調査区全景［東から］
写真36	久下東遺跡II次調査	SI-01掘り方検出状況［南から］
	久下東遺跡II次調査	SI-01掘り方検出状況［東から］
	久下東遺跡II次調査	SI-02遺物検出状況［南東から］
写真37	久下東遺跡II次調査	SI-03・SK-01 検出状況［北東から］
	久下東遺跡II次調査	SI-04検出状況［北東から］
	久下東遺跡II次調査	SW-01・02検出状況［南から］
写真38	久下東遺跡II次調査	SI-01出土遺物
	久下東遺跡II次調査	SI-02出土遺物
	久下東遺跡II次調査	遺構外出土遺物

Ⅰ　遺跡の環境

1　地理的環境

本庄市の地形は利根川右岸に広がる低地と、市街地をのせる台地とに区分される。低地部には利根川の氾濫による自然堤防が発達し、同川沿いに妻沼低地、加須低地へと連続している。いっぽう、台地部は身馴川扇状地と神流川扇状地との複合地形からなり、本庄台地と呼称され、立川期に対応するものとされる。身馴川扇状地は西側を第三系の残丘である生野山、大久保山といった児玉丘陵に、東側を松久丘陵、櫛引台地によって画され、身馴川、志戸川などが北東方向へ流れている。河川の周辺は沖積化が著しく、自然堤防状の微高地が発達し、遺跡の多くはこの上に立地している。神流川扇状地は群馬県鬼石町浄法寺付近を扇頂部とし、扇端部は児玉郡上里町大字金久保から本庄市大字鵜森にかけて広がっている。この扇状地を開析して流れる中小河川には女堀川、男堀川などがあり、周辺には沖積地の形成が顕著である。本書に報告する四方田遺跡および久下東遺跡は、沖積地化の進行した大久保山北方の平地部に所在している。

四方田遺跡は本庄台地上を北東に流れる女堀川と男堀川に挟まれた微高地上に位置する。周辺の低地帯は現在水田として利用され、微高地上は畑地および現集落としての土地利用がなされている。四方田遺跡はこの微高地の南半を占め、本書に報告するⅡ・Ⅳ次調査地点は遺跡のほぼ中央に位置する。

いっぽう、久下東遺跡は、四方田遺跡の東方約2.5kmの地点にあり、女堀川と男堀川に挟まれ、東西に細長くのびた微高地上に所在する。この微高地上には、大字東富田から大字北堀にかけて東西約２kmにわたって集落遺跡と古墳群が断続的に連なり、久下東遺跡はこの東西に連続する遺跡群のほぼ中間点に位置する。

2　歴史的環境

四方田遺跡および久下東遺跡周辺における縄文時代以降の遺跡について略述する。なお、(　)内の番号は、図１の遺跡番号に一致する。

縄文～弥生時代の遺構を残す遺跡はきわめて少ない。四方田遺跡の北東の位置にある西富田前田遺跡（３）は、縄文時代中期後半の小規模な集落跡で、女堀川右岸の微高地に占地する。弥生時代の遺跡は宥勝寺北裏遺跡（22)、大久保山遺跡（27)、山根遺跡（25)、雷電下遺跡（26）など大久保山丘陵とその周辺の緩傾斜地にやや散漫な分布を見せているにとどまる。ただし古墳時代以後の遺構の覆土中に、縄文・弥生土器片や石器類を検出する事例がしばしばあり、かつて存在した縄文・弥生の遺跡が古墳時代以降の諸開発に伴う攪乱を受け、その後地表面の風化等の浸食作用により浅い遺構が消滅していったというような事情も考えられよう。

古墳時代前期の集落としては、女堀川流域の低地帯に西富田・四方田条里遺跡（４）、後張遺跡（６）、飯玉東遺跡（７）、今井条里遺跡（８）、地神遺跡（９）、塔頭遺跡（10)、川越田遺跡（13)、雷電下遺跡（26)、大久保山丘陵北麓側の男堀川流域に下田遺跡（17)、七色塚遺跡（18)、久下東遺跡（２）、久下前遺跡（21）などが分布している。この段階の集落は後張遺跡を除き比較的小規模である。

上記の集落は、古墳時代中期へと連続する事例も見られるが、中期に至って新たに展開する集落も

多い。九反田遺跡（５）、笠ヶ谷戸遺跡（29）、雌濠遺跡（30）、夏目遺跡（36）を中心とする西富田遺跡群などの遺跡が代表的なもので、四方田遺跡（１）もそうした遺跡のひとつである。古墳時代中期は四方田・久下東遺跡周辺に限らず女堀川流域の全域で集落遺跡の数が急増し、集落規模も大きくなり、さらに住居跡の密集度も高くなる。これらの遺跡の増加現象は、広域的な灌漑施工を伴う大規模な耕地の開発と連動するもので、縄文時代以降、地域的景観のもっとも大きく変容した時代であろう。

古墳時代後期は中期の集落から連続あるいは隣接するものが多く、顕著な移動を伴わず耕地と集落立地の関係が比較的安定していた時代と見られる。集落の規模も大きなものが目立ち、さらに古墳時代終末期へと継続的な居住が認められる。古墳時代中期の大規模集落のひとつである後張遺跡も、西南方の今井川越田遺跡へと移動したことが想定されているが、中心的集落としての位置にこの時期にも変化はないようである。

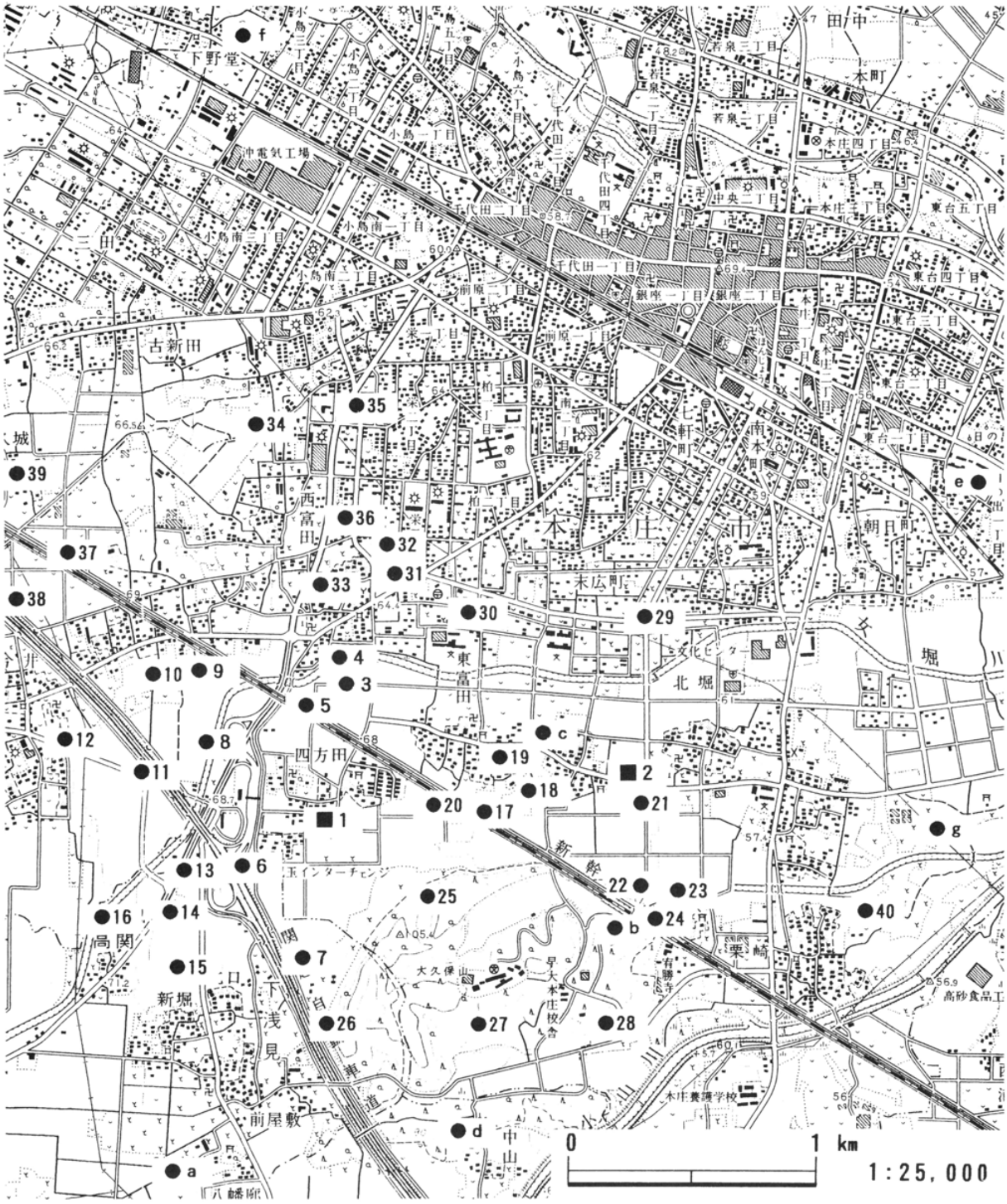
律令期は集落の再編が施行された時期と思われ、四方田・久下東遺跡周辺の遺跡はやや不明瞭である。しかし、9 世紀以降は再び活発な集落の展開が認められるようになる。久下東遺跡は貧弱ながら、女堀川・男堀川沿いの微高地に立地するこの段階の主要な遺跡のひとつである。同時期の遺跡としては、ほかに、観音塚遺跡（20）や久下東遺跡に連続する久下前遺跡（21）などがある。

10世紀後半以降になると集落遺跡は著しく減少し、東本庄遺跡（40）などで少数の住居が確認されているのみである。

ところで、古墳時代前期以降、低地帯への着実な展開を見せる集落遺跡の動向を反映して、墳墓の造営も活発に行われている。。方形周溝墓は飯玉東遺跡（７）、諏訪遺跡（37）、大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区（27）、塚本山古墳群（ｄ）になどにおいて知られ、一定の墓域を設定しつつ群在する傾向を示す。古墳は方形周溝墓に並行して造営が開始され、早くも前期のうちに、鷺山古墳（ａ）が女堀川中流の小丘陵上に出現する。全長60mを測る前方後方墳で、県内最古とされる有力な前期古墳のひとつである。また、大久保山丘陵の尾根状に占地する前山１号墳（ｂ）も、前期の前方後円墳の可能性が考えられている。

古墳時代中期には久下東遺跡の至近に公卿塚古墳（ｃ）が築造される。径60mの大型円墳で格子タタキ技法による埴輪をもち、石製模造品の出土が知られている。格子タタキ技法による埴輪についてはこれまでにも初期須恵器、半島系軟質土器などとの系譜的な関係が論じられ、製作に渡来系工人の関与があった可能性は高い。古墳時代中期後葉には古式群集墳も形成を開始する。塚本山古墳群（ｄ）の塚本山73・77号墳、塚合古墳群（ｅ）の本庄東小学校１・２号墳（径12m）、旭・小島古墳群（ｆ）の三杢山２号墳、同上前原５号墳など10～20m前半台の小型円墳で、Ⅳ式の２条突帯３段構成の円筒埴輪を樹立し、TK208段階並行の土器を伴う。西五十子古墳群（ｇ）、東五十子古墳群などはやや遅れて成立し、Ⅴ式の円筒埴輪と TK23・47段階並行の土器を出土する群集墳である。

後期に入ると、塚本山古墳群、旭・小島古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群などにも横穴式石室を埋葬施設とする小型円墳が認められ、古式群集墳中に混在もしくは隣接するように群在する。また、首長墓として塚合古墳群の大林二子山古墳、旭・小島古墳群の下野堂二子塚古墳などの60m級の大型前方後円墳も見られるようになる。



1．四方田遺跡　2．久下東遺跡　3．西富田前田遺跡　4．西富田・四方田条里遺跡　5．九反田遺跡　6．後張遺跡　7．飯玉東遺跡　8．今井条里遺跡　9．地神遺跡　10．塔頭遺跡　11．一丁田遺跡　12．今井北廓遺跡　13．川越田遺跡　14．梅沢遺跡　15．東牧西分遺跡　16．今井川越田遺跡　17．下田遺跡　18．七色塚遺跡　19．元富遺跡　20．観音塚遺跡　21．久下前遺跡　22．宥勝寺北裏遺跡　23．宥勝寺裏埴輪窯遺跡　24．東谷遺跡　25．山根遺跡　26．雷電下遺跡　27．大久保山遺跡　28．大久保山寺院跡　29．笠ヶ谷戸遺跡　30．雌濠遺跡　31．南大通り線内遺跡　32．薬師元屋舗遺跡　33．社具路遺跡　34．西富田新田遺跡　35．二本松遺跡　36．夏目遺跡　37．諏訪遺跡　38．久城前遺跡　39．下廓遺跡　40．東本庄遺跡　a．鷺山古墳　b．前山１号墳　c．公卿塚古墳　d．塚本山古墳群　e．塚合古墳群　f．旭・小島古墳群　g．西五十子古墳群

図１　周辺の主要遺跡分布図

II　四方田遺跡の調査

四方田遺跡は古墳時代の集落と古墳によって構成される遺跡である。集落の存続期間は古墳時代前期から後期にまで及ぶが、住居跡の数は中期にもっとも多く、前・後期はこれに比べて少ない。今回報告のII～IV次調査地点とこれに先行するＩ次調査地点で検出している遺構の総計は、住居跡34軒、古墳１基、溝５条、河川跡１条である。住居跡はIII次調査を除く各地点で認められ、比較的規模の大きな集落となることが予測される。住居跡相互の重複も顕著である。古墳はＩ次調査地点の調査区西方で確認されている。出土した埴輪から古墳時代後期に該当し、集落の盛期に遅れて築造されている。周辺ではほかにも埴輪の採集される地点があり、小規模な古墳群を形成すると考えられる。

図２　四方田遺跡調査区位置図

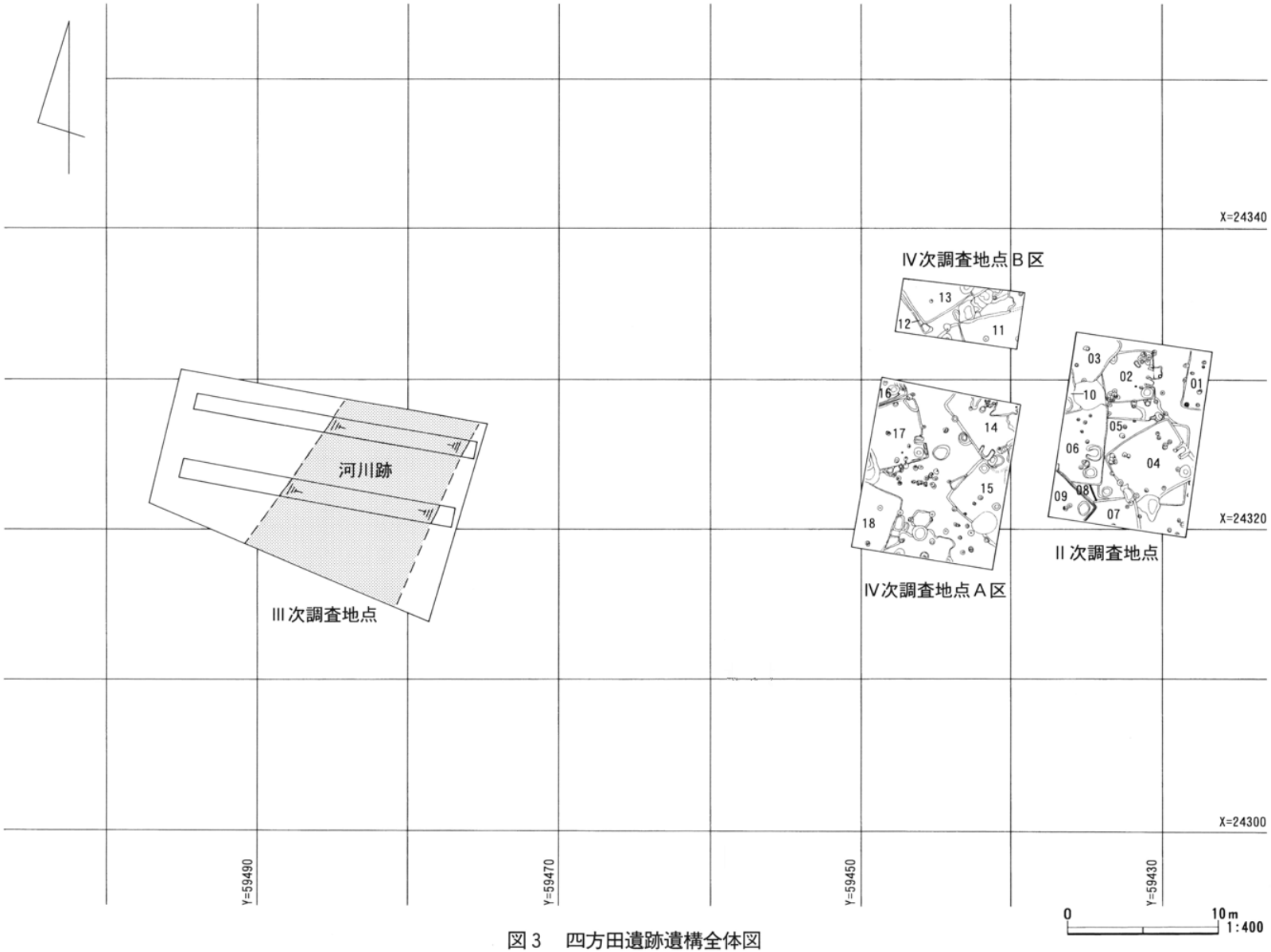


図3　四方田遺跡遺構全体図

A　四方田遺跡Ⅱ次調査

1　調査に至る経過

平成４年11月６日、本庄市大字四方田字屋敷前365番地の土地365㎡において個人専用住宅建設の開発計画があり、この土地にかかる『埋蔵文化財所在および取扱いについて』の照会が本庄市教育委員会あて提出された。当教育委員会において埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに埋蔵文化財の有無を確認したところ、同地は四方田遺跡（53-077）の範囲に含まれることが明らかとなった。同地はまた昭和61年度に、県営ほ場整備事業児玉南部地区の実施に伴い、本庄市教育委員会が調査を行った四方田遺跡Ⅰ次調査地点の北側に隣接し、遺構の存在する可能性がきわめて高いと判断された。

本庄市教育委員会では以上の状況をふまえ、平成４年11月６日付け本教社発第309号にて事業主体者あて『埋蔵文化財の所在について』の回答を送付し、

１．照会のあった土地については四方田遺跡（53-077）の範囲内に所在することから現状保存が望ましいこと

２．やむを得ず現状変更を実施する場合は、文化財保護法第57条の２の規定により、文化庁長官あて『埋蔵文化財発掘届』を提出し、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること

３．本回答後は関係機関との協議を徹底すること

の旨を伝達した。

しかしその後、他に住宅建設の適地がなく、やむをえず記録保存のための発掘調査を前提として、住宅建設部分にかかる90㎡について、遺跡の範囲確認を目的とする試掘調査を実施することとなった。試掘調査は平成４年11月16日から11月20日までの期間で行われた。その結果、現地表から約0.6mの深さで古墳時代の住居跡と考えられる遺構が全体に分布していることが明らかになり、遺物も土師器・須恵器片を中心に各所でまんべんなく検出された。このため、本庄市教育委員会では直ちに試掘調査から発掘調査に切り替え、住宅建設部分について、記録保存を目的とした全面発掘調査を行うこととした。

発掘調査のための手続きについては平成４年11月25日付けで事業主体者から文化財保護法第57条の２第１項の規定による埋蔵文化財発掘の届出が提出され、本庄市教育委員会ではこれを受けて、平成４年11月27日付け本教社発第334号にて同届出を埼玉県教育委員会あて進達するとともに、文化財保護法第98条第１項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を埼玉県教育委員会を経由して文化庁長官あて提出した。

これに対し、平成４年12月18日付け教文第３-396号にて埼玉県教育委員会から『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知があり、平成５年２月12日付け本教社発第41号にて事業主体者あて伝達した。

現地での発掘調査は、本庄市教育委員会が調査主体となり、平成４年11月24日から平成５年１月20日までの期間で実施した。

2　調査の方法と経過

a．調査の方法

今回調査の対象としたのは開発申請地のうち住宅建設にかかる約90㎡である。当該部分には事前の試掘調査によって住居跡が重複して検出されており、現地表から遺構確認面までは約50～80㎝を測ることが知られていた。また、遺構確認面の上層には分厚く遺物包含層が発達し、さらに、耕作によって、表土中にも多量の遺物の混入が認められた。このため、当初から人力によって遺物を検出しつつ、表土除去、遺構確認の作業を行なった。記録については国土座標系により遺構平面図･遺物分布図１/20、遺物出土状況１/10で行なったほか、必要な写真の撮影を実施した。

b．調査の経過

調査は平成４年11月24日から平成５年１月20日にかけて実施した。以下、日付をおって調査の経過を記すこととする。なおこの間、土・日曜日、祭日、年末年始は休日とし、雨天の場合も作業を中止した。

11月24日(火)～11月27日(金)　人力により調査区の表土除去作業とともに遺構確認作業を開始。表土中から土師器の小片多数と須恵器片若干を検出。並行してSI-01～03の覆土の調査を開始。

11月30日(月)　前週に続き表土の除去、遺構確認作業を継続。夕方までに終了。最終的に住居跡10軒を確認。SI-01～03の覆土の調査を終了。SI-02･03では床面で多量の土師器を出土。SI-02でカマド、貯蔵穴を検出。SI-04～06の調査を開始。

12月１日(火)　SI-02のカマド精査。カマド中央で逆位の高坏を検出。SI-04～06の覆土の調査を継続。

12月２日(水)　SI-01･02号覆土土層分割。SI-04～06の覆土の調査を継続。SI-07の覆土の調査を開始。

12月３日(木)　SI-04～07の調査を継続。SI-08の覆土の調査を開始。SI-04でカマドを検出。SI-06の覆土調査を終了、カマド、床面を検出。

午前中、基準点基本杭打ち作業を実施。午後は、３ｍピッチで細部グリッド杭打ちを行い夕方までに終了。

12月４日(金)　SI-04・05・07・08の覆土の調査を継続。SI-09の覆土の調査を開始。SI-02のカマド精査。

12月７日(月)　SI-02の覆土・カマド土層断面実測、土層注記、土層観察ベルト撤去。SI-01～03床面遺物出土状況写真撮影。SI-04・05・07～09の覆土の調査を継続。SI-08の覆土の調査を終了。

12月８日(火)　雨天のため作業中止。

12月９日(水)　SI-02カマド遺物出土状況写真撮影および微細実測。SI-04・05・07・09の覆土の調査を継続。SI-09の覆土の調査を終了。

12月10日(木)　SI-01床面検出状況写真撮影および貼床の調査。SI-02遺物出土状況微細実測。SI-04･05の覆土の調査を継続。SI-05の覆土の調査を終了、床面、貯蔵穴、柱穴を検出。SI-06カマド精査。

12月11日(金)　SI-03遺物出土状況微細実測。SI-04～06・08・09覆土土層分割、土層断面実測。SI

-04・07号住居跡覆土の調査を終了。SI-04で床面・貯蔵穴を検出。SI-07の床面を検出。

12月14日(月)　SI-06・09覆土土層断面実測、土層注記、土層観察ベルト撤去。

12月15日(火)　SI-04・05・08覆土土層注記、土層観察ベルト撤去。SI-07覆土土層断面実測、土層注記、土層観察ベルト撤去。

12月16日(水)　SI-02遺物取上げ。SI-04・05遺物出土状況写真撮影。SI-04遺物分布実測。

12月17日(木)　SI-03～05遺物分布実測。SI-04・05床面遺物取上げ。

12月18日(金)　SI-03～05遺物分布実測を継続、夕方までに終了。SI-04・05遺物取上げを継続、夕方までに終了。SI-05貯蔵穴覆土の調査。

12月21日(月)　SI-03遺物取上げ。SI-02掘り方の調査を開始。

12月22日(火)　SI-02掘り方の調査を終了。SI-03掘り方の調査を開始、同日中に終了。SI-05貯蔵穴の遺物出土状況写真撮影、微細実測、遺物取上げ。SI-06床面遺物出土状況写真撮影。

12月24日(木)　SI-05掘り方の調査を開始、同日中に終了。SI-04カマド・貯蔵穴精査。SI-06・09遺物出土状況写真撮影、遺物分布実測。SI-06遺物分布実測。遺物取上げ。SI-09遺物分布実測を開始。

12月25日(金)　SI-02カマド、貯蔵穴完掘状況微細実測、遺物取上げ、完掘状況写真撮影、カマド撤去。SI-04カマド・貯蔵穴完掘状況微細実測。SI-06カマド・貯蔵穴精査。SI-07遺物分布実測を開始、終了。SI-09遺物分布実測を終了。SI-07・09遺物取上げ。年末年始休暇に入るため、午後、調査区囲柵の補修、出土遺物の搬出作業。

12月26日(土)～１月４日(月)　年末年始休暇。

１月５日(火)　SI-04カマド完掘状況写真撮影、カマド撤去。SI-06カマド・貯蔵穴遺物出土状況写真撮影、微細実測、遺物取上げ。SI-04・05掘り方の調査を開始、同日中に終了。

１月６日(水)　SI-01・02遺構平面実測、SI-01を終了。SI-07・08掘り方の調査を開始、同日中に終了。

１月７日(木)　雨天のため作業中止

１月８日(金)　SI-02・03遺構平面実測、SI-02住居跡を終了。SI-04・05掘り方の調査開始。

１月11日(月)　SI-03遺構平面実測を終了。SI-04・05掘り方の調査を終了。

１月12日(火)　SI-07～09遺構平面実測を開始、同日中に終了。SI-10覆土調査、掘り方調査を開始。

１月13日(水)　SI-06カマド完掘状況写真撮影、微細実測、カマド撤去。SI-10掘り方調査を終了。調査区の全面清掃を開始。

１月14日(木)　雨天のため作業中止。

１月18日(月)　調査区の全面清掃を終了。調査区の全景写真撮影。SI-10掘り方完掘状況写真撮影。SI-04・05遺構平面実測。

１月19日(火)　SI-06・10遺構平面実測。調査区周辺の清掃作業。一部の発掘機材撤収。出土遺物の搬出作業。

１月20日(水)　調査区全面のレベリング作業。終了後、残りの発掘機材を撤去しすべての作業を終了。

3　調査の成果

II次調査で検出した住居跡は10軒である。これらの遺構は、南側のⅠ次調査地点や西側のⅣ次調査地点で検出した住居跡群に連続して同一の集落跡を形成するものと推測される。さらに、Ⅰ次調査地点の南方には広範に古墳時代中期の土師器片の散布が見られ、II次調査地点の東方においても地面の掘削時などに同様の時期の土師器片の出土を見ることから、周囲には比較的大規模な古墳時代中期の集落が展開していると考えられる。

II次調査は対象範囲が狭く、また住居跡は相互の切り合いも顕著であることから、全体の形状の判明する住居跡は少ない。遺物を伴い時期の明らかな住居は、一定の時間幅は認められるものの、すべて古墳時代中期に該当する。3軒の住居跡にはカマドが、5軒の住居跡には貯蔵穴が伴う。カマドはいずれも東寄りの壁の内側に付き、中軸線よりもやや南側にずれる。貯蔵穴は南東寄りの隅に配される場合が多く、カマドを伴う場合には、カマドの右側に位置する。

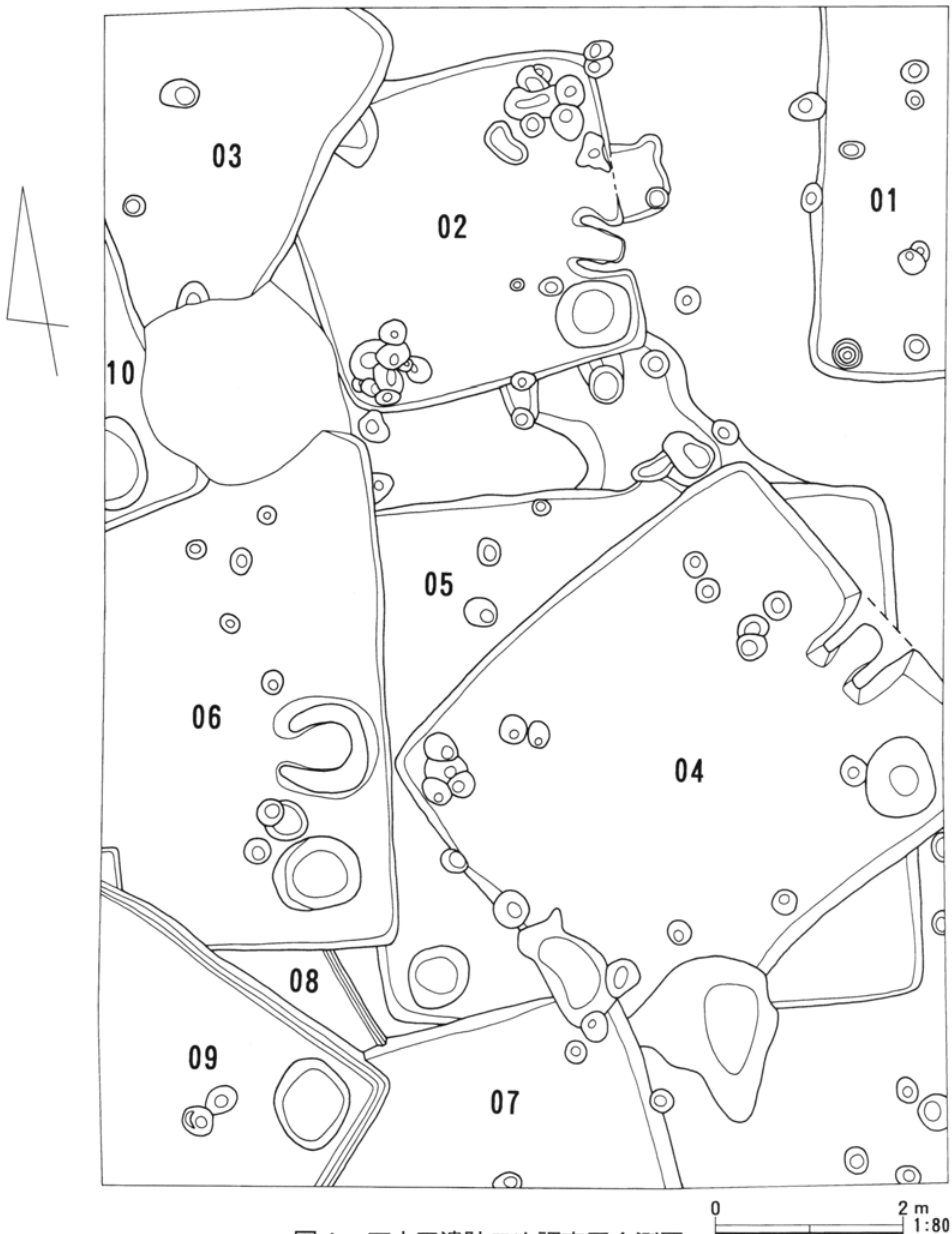


図4　四方田遺跡II次調査区全測図

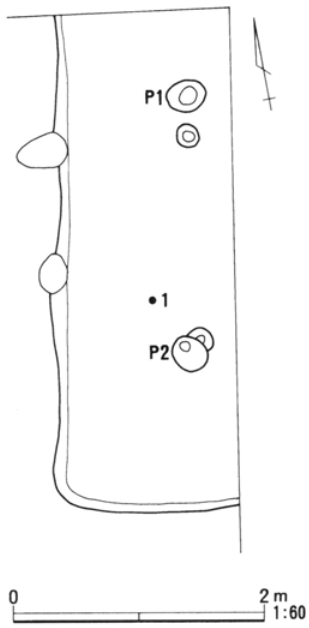


図５　四方田遺跡Ⅱ次調査
SI-01 床面

ａ．SI-01

遺構［図５・６、写真２］

調査区の北東隅に位置する。住居跡南西側の一部を検出した。平面形は隅丸方形を呈し、一辺４、６ｍ程度を測り、主軸方位は、Ｎ―10°―Ｅを示すと推測される。カマド・炉などの燃焼施設、貯蔵穴の有無は不明である。

覆土を完全に失い、確認面は床面と同レベルである。床面中央は方台状にロームを掘り残してそのまま床面とし、周囲にはロームブロックと黒色土に混合した土を敷き込んで貼床を形成している。床面はほぼ平坦で、硬化が顕著である。カマド・炉などの燃焼施設、貯蔵穴の有無は不明である。

ピットは７個を検出し、うちＰ１・Ｐ２は、主柱穴である。形態は楕円形ないしは歪んだ円形で、深さはＰ１が41cm、Ｐ２が40cmを測る。いずれも柱跡、裏込めは確認できない。掘り方は、主柱穴を二隅に配してロームを方形に掘り残し、四周を10～15cmほど掘り下げている。

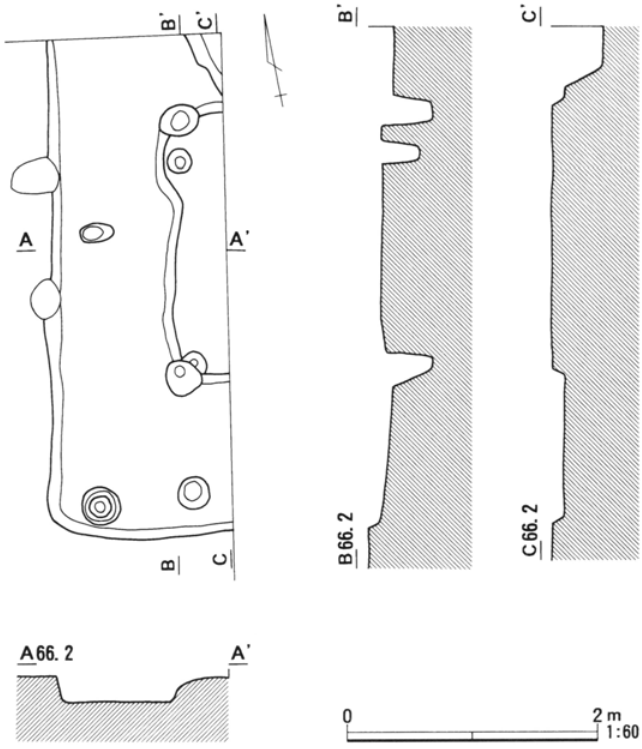


図６　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-01 掘り方

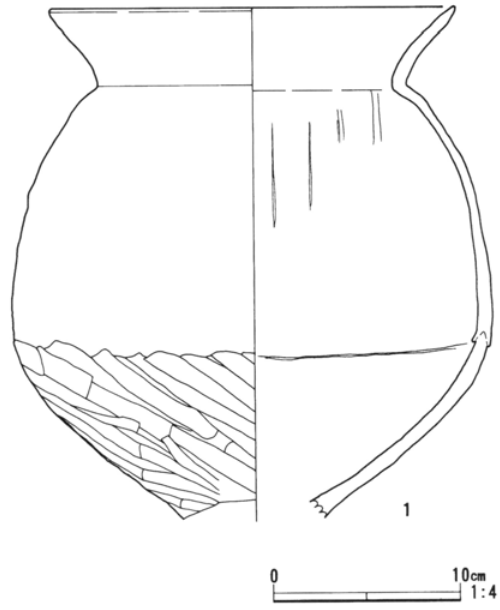


図７　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-01 出土遺物

SI-01出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 甕	口径 21.8 底径　― 器高　―	胴部はなで肩、下膨れで、口縁部は外反気味に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部ナナメのナデ、下位ナナメのケズリ。 内面―口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、ナナメのナデ、胴部中位一部ヨコのケズリ。	内外―明赤褐色	3／4

遺物［図７、写真23］

床面には遺物がほとんどなく、土師器甕［１］が、Ｐ２近くの床面に潜り入り込むようにして検出された。この土師器甕は遺存状態から、貼床層中の混入遺物とは考えがたく、本住居跡に伴うものと判断される。貼床層からも若干量の土師器小片が出土しているが、貼床造成時の混入と考えられる。

ｂ．SI-02

遺構［図８～12、写真２～４］

調査区の北半分中央に位置する。住居跡北西隅がSI-03と重複する。また、東壁中央と南壁東半の上端は攪乱のため失われている。平面形は隅丸の正方形で、3.4×3.4mを測り、主軸方位は、N―83°―Eを示す。東壁にカマド、南東隅に貯蔵穴を備える。

覆土は３層に分けられ、壁際にローム・炭化物・焼土などの細かなブロックを含む暗褐色土が堆積し、床面中央は黒褐色土で被覆される。上層には黒色土が堆積している。

床はロームブロックを多量に含む暗褐色土を全体に敷き込んで貼床を形成している。床面は微妙な起伏があるもののほぼ平坦である。壁溝は存在しない。

ピットは床面で３個を検出した。いずれも主柱穴である。形態は楕円形ないしは歪んだ円形で、深さはＰ１が20cm、Ｐ２が30cm、Ｐ３が30cmを測る。黒色土が堆積し柱跡、裏込めは確認できない。床面の残存状態から北西側にも主柱穴が検出されてしかるべきところであるが、精査によっても認められなかった。

東壁内側のやや南寄りにカマドが付設されている。カマドは東壁に直交せず、焚口をやや北方に振っている。壁への掘り込みをもたない完全な造り付けカマドで、黒褐色土にローム・白色粘質土・焼土

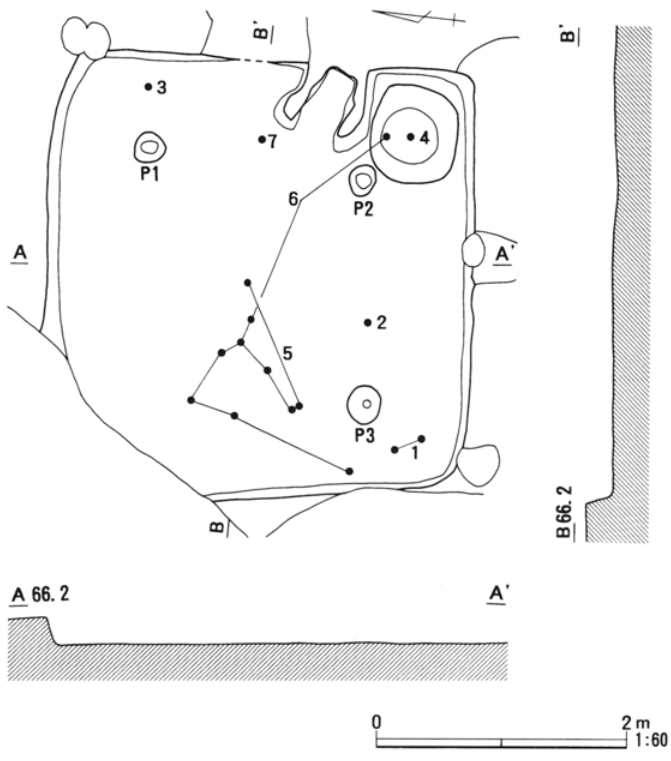
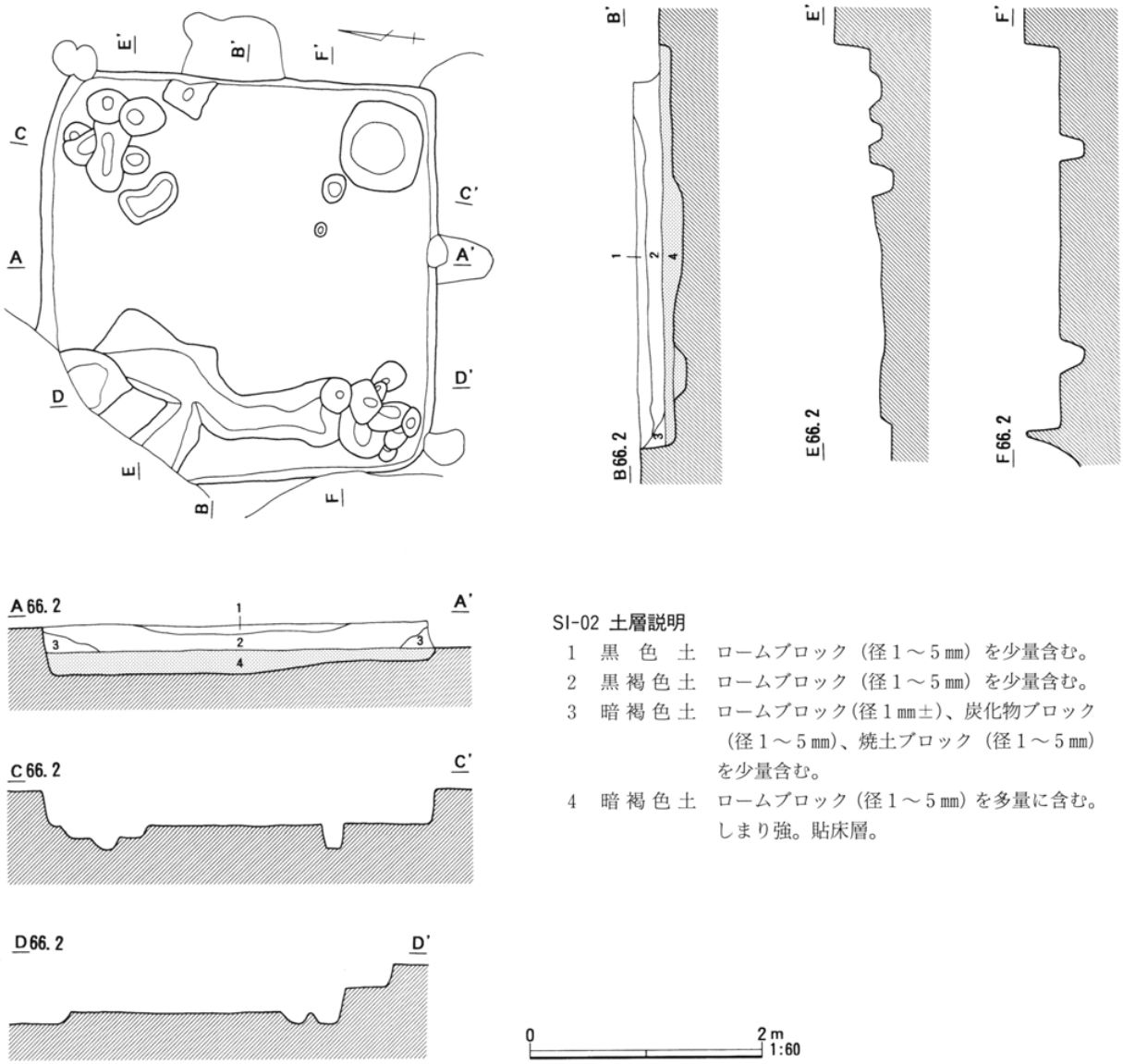


図８　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02 床面



SI-02 土層説明

1　黒　色　土　ロームブロック（径１～５㎜）を少量含む。
2　黒褐色土　ロームブロック（径１～５㎜）を少量含む。
3　暗褐色土　ロームブロック(径１㎜±)、炭化物ブロック（径１～５㎜)、焼土ブロック（径１～５㎜）を少量含む。
4　暗褐色土　ロームブロック（径１～５㎜）を多量に含む。しまり強。貼床層。

図９　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02 掘り方

SI-02出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 坏	口径 12.5 底径　3.9 器高　5.4	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は直立気味に立ち上がる。底部は小さな平底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、中位～下位ナナメのケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部上位ヨコナデ、中位～底部ヘラナデ。	内外―橙色	一部欠損
2	土師器 坏	口径 12.8 底径　2.4 器高　5.9	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は短く外反する。底部は上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部上位ケズリとナデが交叉、中位～底部ナナメのケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部ナナメのナデ。	胎土精良。 内外―明赤褐色	1/2
3	土師器 鉢	口径 (9.2) 底径　4.0 器高　7.0	胴部膨らみを持ち、口縁部は短く外反する。	外面―口縁部ヨコナデ、頸部に輪積痕、体部ナデ、指による整形あり。底部ケズリ。内面―口縁部ヨコナデ体部ヨコ、ナナメのナデ。	内外―にぶい赤褐色	2/3

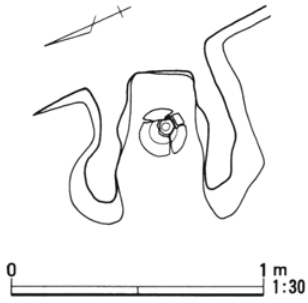


図10　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02 カマド
高坏転用支脚出土状況

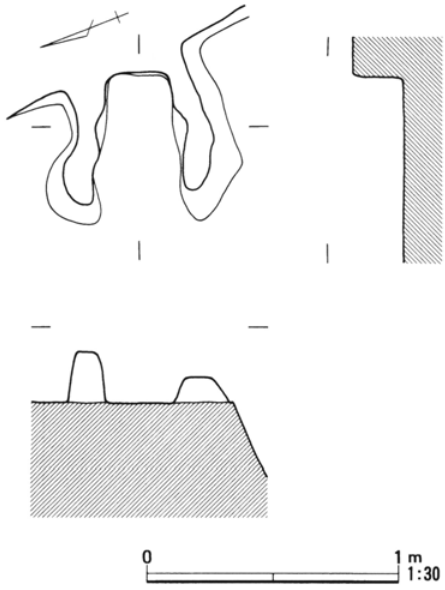


図11　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02 カマド

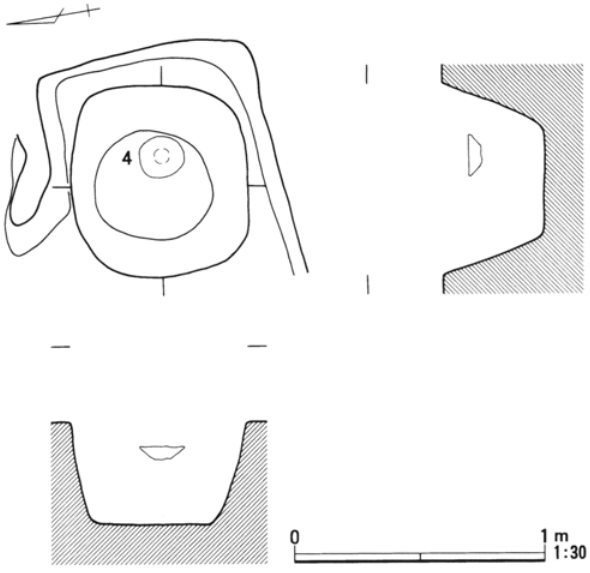


図12　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02 貯蔵穴

などの細かなブロックを混合した土を用いて構築している。遺存状態が良好ではないが、カマド中央に破損した高坏を転用し、逆位に設置して支脚としている［図10］。

南東隅の床面にはカマドと南壁の間に挟まれるようにして貯蔵穴が存在する。平面形はやや角の張った不整な円形を呈し、東西75cm、南北70cm、床面からの深さ40cmを測る。底面は平坦で径40cmの円形を呈する。内部に細かなロームブロックを含む黒色土が堆積していた。

掘り方はやや深く、底面は全体に北側が高く、南側が低い。また、Ｐ１とＰ３の周囲に多数の土壙・ピットの連続する落ち込みがあり、また西壁よりには整形の落ち込みがのびている。これらの落ち込みには、わずかな黒色土が混入するロームブロックが入っており、一見純粋なローム層との区別がつきにくい。

遺物［図13、写真23］

床面直上の遺物は、カマド周辺と住居跡の中央から南寄りにかけて分布している。カマドの炊き口周辺に土師器甑［７］があり、土師器甕［５・６］は床面中央に散乱していた。土師器坏［１・２］はＰ３を挟んだ床面南寄りで出土している。土師器鉢［３］はこれらとやや離れ、Ｐ１と東壁の中間に位置する。なお、土師器高坏の坏部［４］は、貯蔵穴覆土中位の東壁で検出されている。

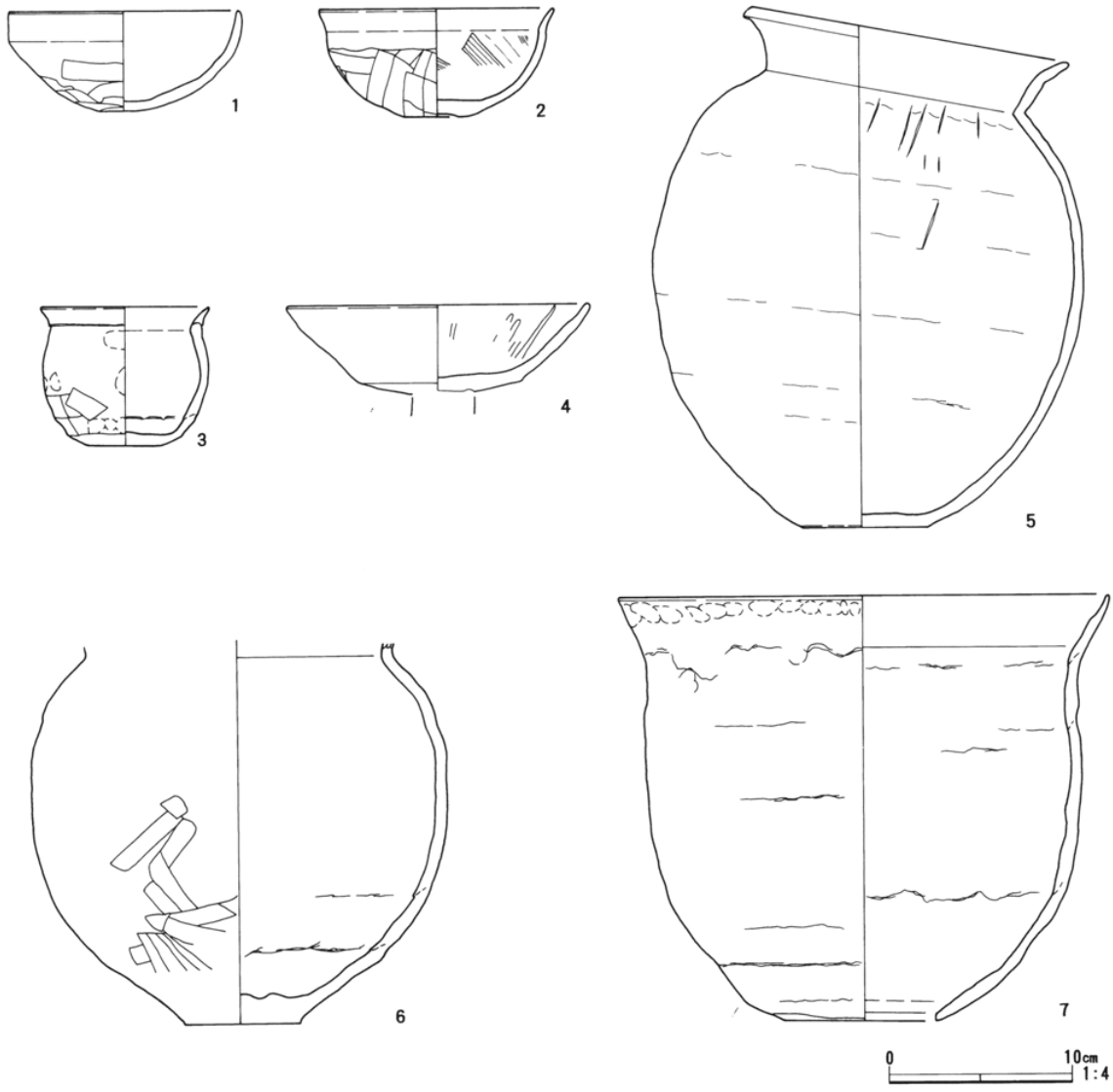


図13　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-02 出土遺物

SI-02出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
4	土師器 高坏	口径 16.5 底径　— 器高　—	坏底部に弱い稜を持ち、口縁部は微妙に彎曲しながら開く。	外面—坏部ヨコナデ、坏底部ヨコナデ。内面—ヨコナデ。	胎土精良。 内—赤褐色 外—橙色	脚部欠損
5	土師器 甕	口径 17.3 底径 6.8 器高 27.2	胴部膨らみを持ち、口縁部は外反する。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部上位タテ、ナナメのナデ、中位～下位タテナデ、底部ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヨコナデ。	内外—浅黄橙色	4 / 5
6	土師器 甕	口径　— 底径 6.4 器高　—	膨らみを持つ胴部。	外面—胴部上位ナナメのナデ、下位ナデとケズリの不規則な組み合わせ。底部は無調整。内面—ナナメのナデ。	内—明赤褐色 外—橙色	胴部 2 / 3 残存
7	土師器 甑	口径 26.6 底径 8.2 器高 23.1	胴部わずかに膨らみを持ち、口縁部は外傾し、端部わずかに内彎。	外面—口縁部ヨコナデ、指頭圧痕、胴部タテ、ナナメのナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、ナナメのナデ、下位にケズリ、底部ナデ。	内外—橙色	完形

c．SI-03

遺構［図14・15、写真４］

調査区の北西隅に位置する。住居跡東隅の１/４程度を検出した。平面形は隅丸方形を呈し、一辺5.2m程度の規模を有するものと推測される。検出された南東壁と並行に仮の軸線をとれば、主軸方位はN―38°―Eを示す。

覆土は単層で、ロームを含む黒色土が堆積している。

床は多量のロームブロックと少量の炭化物ブロック含む暗褐色土を全体に敷き込んで貼床を形成している。床面は微妙な起伏があるもののほぼ平坦である。壁溝は存在しない。

ピットは２個を検出し、うちＰ１は、主柱穴である。形態は楕円形で、深さはＰ１が80cmを測る。ロームブロックと焼土ブロックを含む黒色土が堆積し、柱跡や裏込めは確認できない。

カマド、炉などの燃焼施設は調査区外にあるものと考えられ、検出できていない。

掘り方は、主柱穴を隅に配して方台状にロームを掘り残し、四周をさらに15～20cmほど掘り下げている。

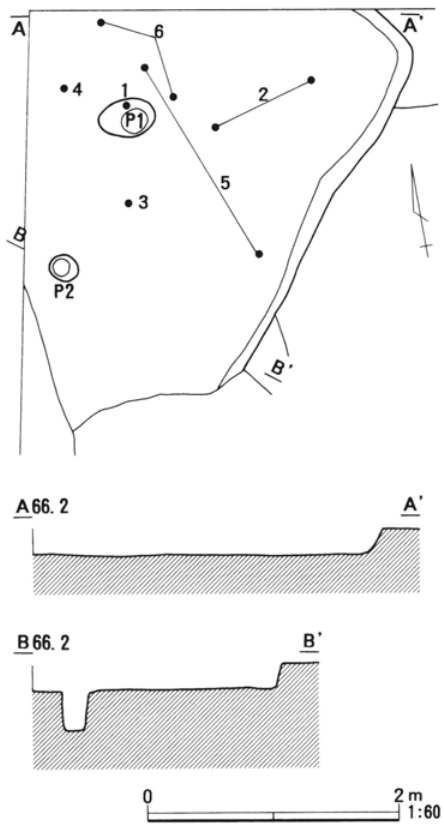


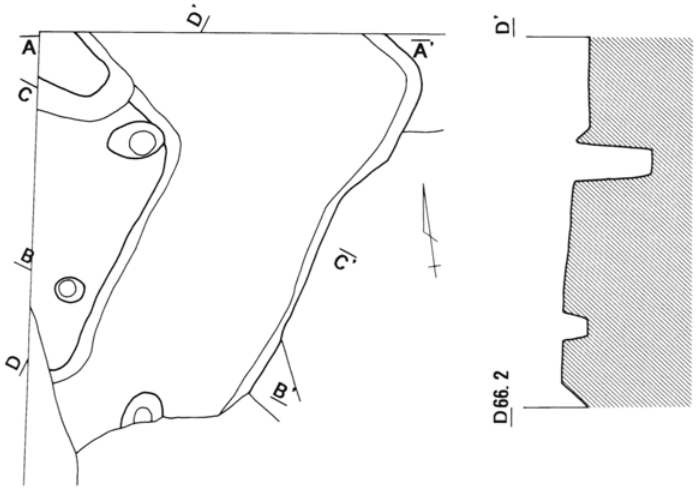
図14　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-03 床面

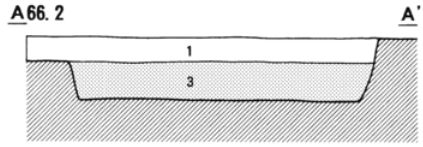
遺物［図16、写真23］

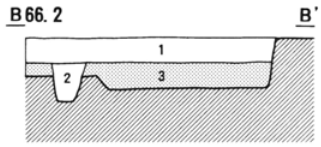
床面直上の遺物は、Ｐ１を中心に散漫な分布を見せている。土師器高坏［１～５］が多いが、いずれも欠損しており完形品はない。脚部に円形透孔を配する資料があり注目される［３・５］。土師器甕［６］はＰ１と北東壁の中間に散在していた。

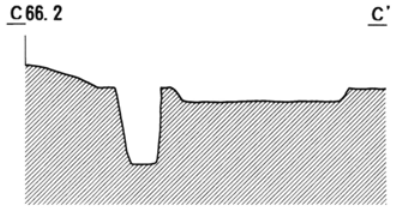
SI-03出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 高坏	口径 18.8 底径 ― 器高 ―	坏部下位に明瞭な稜を持ち、口縁部は直線的に開く。	外面―坏部ナナメのケズリ、ナナメのミガキ。内面―口縁部ヨコナデ、坏中位ヨコナデ調整後ミガキ。	内外―明赤褐色	坏部１/３残存
2	土師器 高坏	口径 16.7 底径 ― 器高 ―	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は直線的に開く。	外面―ヨコナデ。内面―ヨコナデ。部分的にヨコ、ナナメの暗文様のミガキ。	内―明赤褐色 外―橙色	坏部１/２残存
3	土師器 高坏	口径 ― 底径 ― 器高 ―	坏部下位に突出した段を持ち、柱状部は膨らみを持つ。円孔が６個穿たれているが、穿孔位置に高低がある。	外面―坏部下位・底部ヨコナデ、柱状部タテナデ、裾部ヨコナデ。内面―柱状部指によるタテの成形・整形。	胎土精良。 内外―橙色	坏部上位・裾部欠損
4	土師器 高坏	口径 ― 底径 11.5 器高 ―	柱状部やや外反して開き、裾部は広がる。	外面―柱状部ヨコナデ後タテナデ、裾部ヨコナデ。内面―柱状部輪積痕、裾部ヨコナデ。	内外―橙色	裾部４/５欠損
5	土師器 高坏	口径 ― 底径 13.0 器高 ―	柱状部わずかに膨らみ、裾部広がる。柱状部の中位やや上に円孔が１個穿たれている。	外面―柱状部タテナデ、裾部ヨコナデ。内面―柱状部上位無調整、裾部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	裾部１/３欠損
6	土師器 甕	口径 15.4 底径 ― 器高 ―	胴部は膨らみを持ち、下位に微稜がある。口縁部は外反気味に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部上位タテナデ、下位ナナメケズリ。 内面―口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、ナナメのナデ。	内外―明赤褐色	４/５









SI-03 土層説明

1　黒　色　土　ロームブロック（径１～５㎜）を少量含む。

2　黒　色　土　ロームブロック（径１～５㎜）、焼土ブロック（径１～５㎜）を少量含む。

3　暗 褐 色 土　ロームブロック（径１～10㎜）を多量に含み、炭化物ブロック（径１～３㎜）を少量含む。しまり強。貼床層。

図15　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-03 掘り方

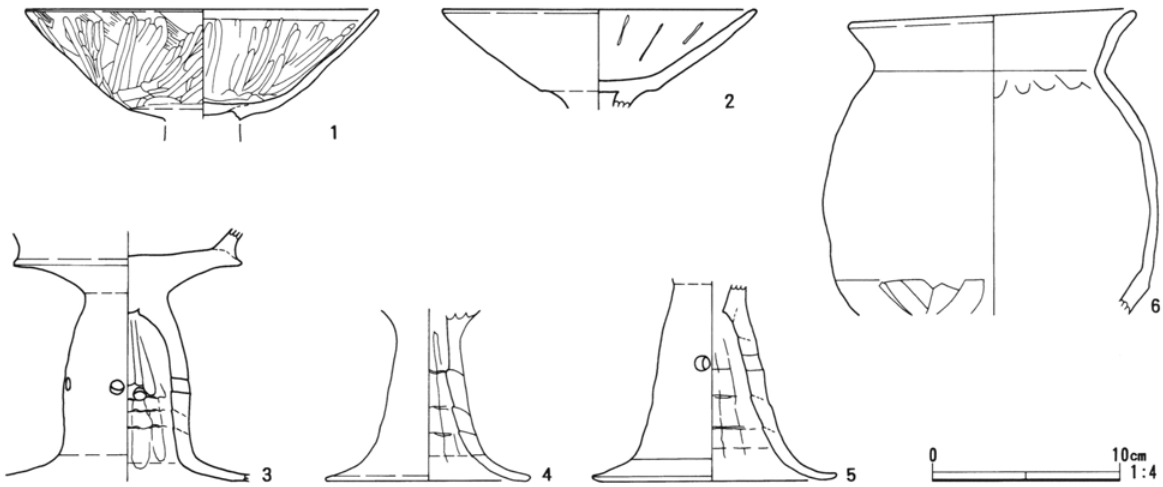


図16　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-03 出土遺物

d．SI-04

遺構［図17・18・20～22、写真５］

SI-05とともに調査区のほぼ中央に位置する。SI-05とは主軸をほぼ45°違えて重複している。調査区外にある住居跡東隅と攪乱で失われている南隅の一部を除き、ほぼ全体を検出した。平面形は北東―南西方向に長い隅丸の長方形を呈し、長軸5.2m、短軸4.5mを測る。主軸方位はN―60°―Eを示す。北東壁にカマド、東隅寄りに貯蔵穴を備える。

覆土は３層に分けられ、壁際にはロームと炭化物の細かなブロックを含む暗褐色土が堆積している。床面中央はロームブロックを含む黒褐色土で被覆され、さらに上層にはロームブロックを含む黒色土が堆積している。

床は多量のロームブロックと少量の炭化物・焼土ブロックを含む暗褐色土を全体に敷き込んで貼床を形成している。床面は平坦で硬化が顕著である。壁溝は存在しない。

カマドは北東壁の中央に付設されている。壁への掘り込みをもたない完全な造り付けカマドで、黒褐色土に白色粘質土・炭化物・焼土などの細かなブロックを混合した土を用いて構築している。比較的良好な遺存状態を保っていたが、土器片、石材などの構築材の使用や臼玉などを用いた祭祀の痕跡は認められなかった。

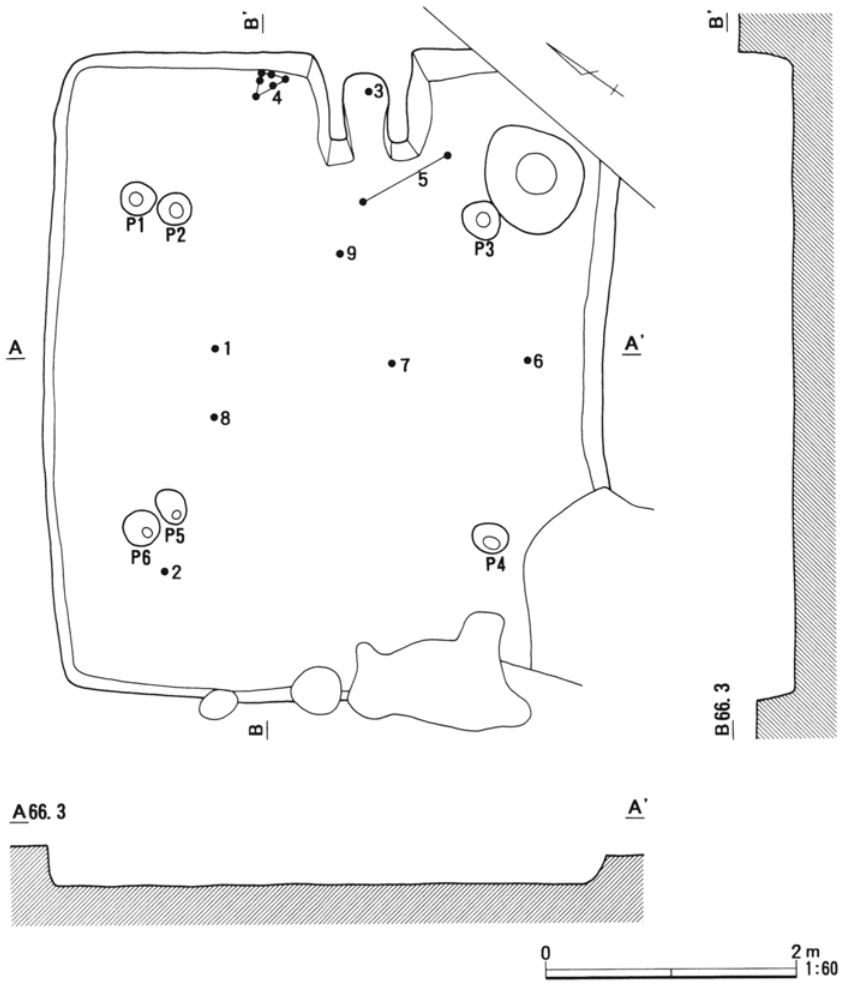


図17　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-04 床面

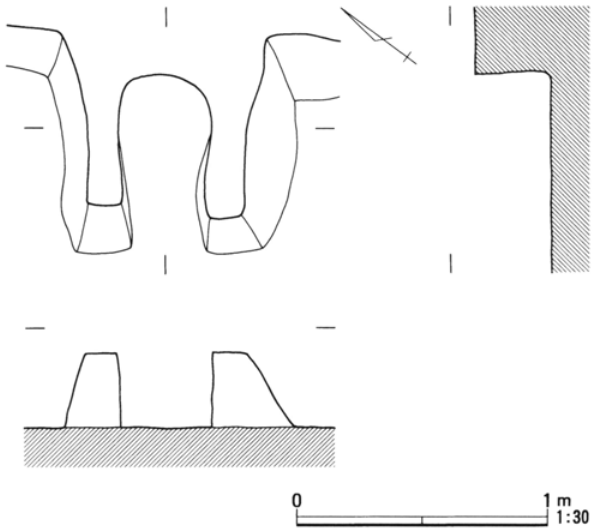


図18　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-04 カマド

貯蔵穴はカマドの右手前の床面に、主柱穴であるＰ３に接して設けられている。平面形はやや歪な円形を呈し、東西80cm、南北90cm、床面からの深さ35cmを測る。底面は平坦で径30cmの円形を呈する。内部には細かなロームブロックを含む黒色土が堆積していた。

ピットは床面で６個を検出した。いずれも主柱穴である。Ｐ１とＰ２、Ｐ５とＰ６は互いに近接しており、形態は楕円形ないしは歪んだ円形で、深さはＰ１が70cm、Ｐ２が49cm、Ｐ３が70cm、Ｐ４が70cm、Ｐ５が48cm、Ｐ６が70cmを測る。ロームブロックを含む黒色土が堆積し柱跡、裏込めは確認できない。

掘り方は、北西側と南東側の壁寄りがやや深く、他は微妙な起伏があるもののほぼ平坦である。北東壁に付くカマドの直下には、不整形の浅い落ち込みが集中し、また西隅にも浅いピット状の窪みがまとまっている。

遺物［図19、写真24］

床面直上の遺物は、カマド周辺と住居跡中央部に散在している。カマド内部では小型土師器甕［３］の底部片が出土したのみで、良好な資料は得られていない。南東壁よりのＰ３とＰ４の中間地点で完形の土師器甕［６］を検出している。他は残存率２/３以下のものが多く、混入資料が多く含まれると考えられる。

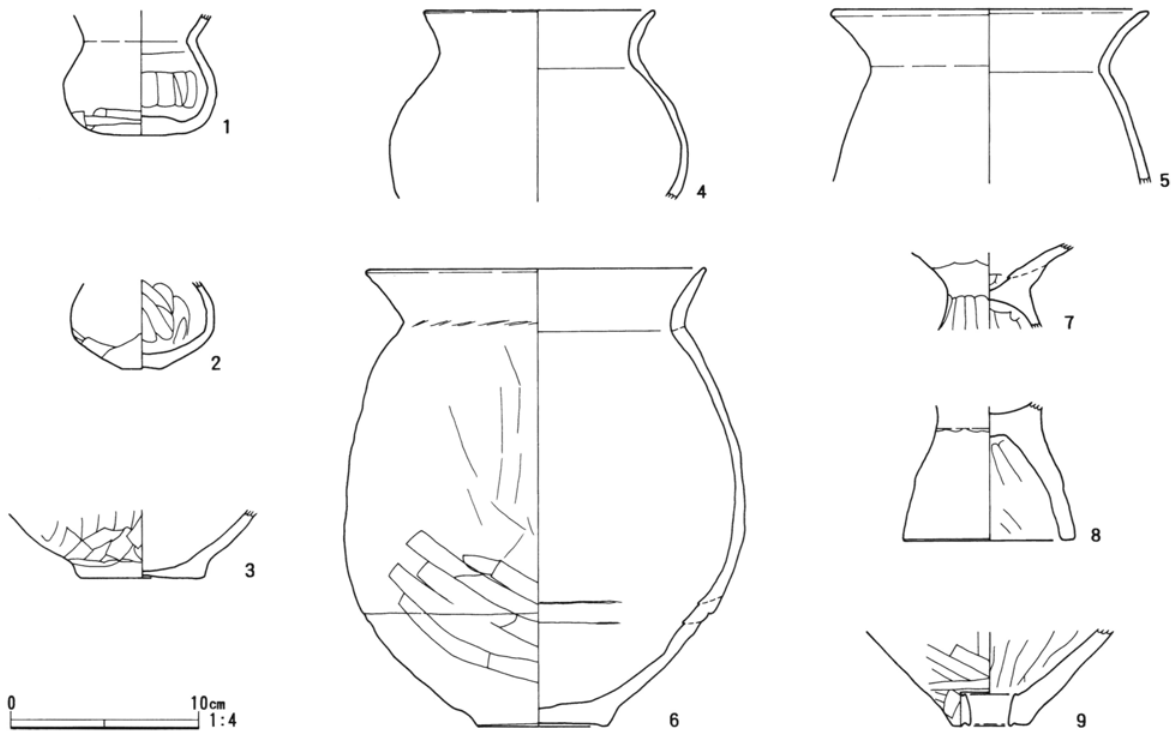


図19　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-04 出土遺物

SI-04出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 坩	口径　7.1 底径　4.8 器高　—	体部中位に膨らみを持つ偏平な形態。底部は平底。	外面―口縁部・体部上位ヨコナデ、体部中位ヨコ、ナナメのナデ。 内面―体部指頭による整形痕及びヨコナデ。	内外―橙色	1/3
2	土師器 坩	口径　6.2 底径　2.0 器高　—	膨らみを持つ体部。底部は上げ底。	外面―体部上位ヨコナデ、下位ケズリ。内面―指頭整形痕。	内外―明赤褐色	1/4
3	土師器 甕	口径　— 底径　6.4 器高　—	胴部は丸みを持って立ち上がる。底部は上げ底。	外面―胴部下位ナナメのケズリ。 内面―胴部～底部ヨコ、ナナメのナデ。	内外―にぶい赤褐色	底部残存
4	土師器 甕	口径(12.0) 底径　— 器高　—	胴部に膨らみを持ち、口縁部は外反する。	外面―口縁部・胴部ヨコナデ。 内面―口縁部・胴部ヨコナデ、不規則な条線入る。	小礫多く含む。 内外―明赤褐色	口縁部2/3
5	土師器 甕	口径(17.0) 底径　— 器高　—	胴部に膨らみを持ち、口縁部は外反する。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部ナナメのナデ。内面―口縁部・胴部ヨコナデ。	内外―にぶい橙色	口縁部1/2
6	土師器 甕	口径 18.1 底径　6.9 器高 24.3	胴部に膨らみを持ち、口縁部は外反する。なで肩。底部は上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部上位ナナメ、タテのケズリ、下位タテ、ナナメのナデ。内面―口縁部・胴部ヨコナデ。	内外―橙色	ほぼ完形
7	土師器 台付甕	口径　— 底径　— 器高　—	胴部は外反気味に立ち上がり、脚部は直線的に開く。	外面―脚部タテナデ、部分的にハケ。内面―脚部渦巻状の掻き取り痕。	内外―橙色	脚部1/2残存
8	土師器 台付甕	口径　— 底径(9.0) 器高　—	わずかに膨らみを持ちながら開く脚部。	外面―脚部タテ、ナナメのナデ。 内面―脚部指による調整痕。	内外―橙色	脚部2/3残存
9	土師器 甑	口径　— 底径　4.0 器高　—	底部から胴部は直線的に立ち上がる。	外面―胴部ナナメのケズリ。 内面―タテ、ナナメの深いナデ。	内―橙色 外―明赤褐色	底部1/3残存

e．SI-05

遺構［図20～24、写真5・6］

SI-04と重複して調査区のほぼ中央に位置する。SI-04とは主軸をほぼ45°違えて重複しているが、SI-04よりは古く、四隅を残して半分以上を失っている。また、南壁の一部にSI-04と攪乱が重複し、さらに西壁の多くもSI-06との重複で破壊を被っている。平面形はほぼ正方形を呈し、東西5.8m、南北5.5mを測る。主軸方位はN―7°―Eを示す。南西隅寄りに貯蔵穴を備える。

覆土は3層に分けられ、壁際には部分的にロームと炭化物の細かなブロックを含む暗褐色土が堆積している。床面中央はロームブロックを含む黒褐色土で被覆され、さらに上層にはロームブロックを含む黒色土が堆積している。

床は多量のロームブロックと少量の炭化物ブロック含む暗褐色土を全体に敷き込んで貼床を形成している。床面は平坦で硬化が顕著である。壁溝は存在しない。

燃焼施設は検出されていない。カマドであれば東壁もしくは南壁に付設されている可能性が考えられるが、SI-04や攪乱との重複により確認できない。

貯蔵穴は南西隅の床面に設けられている。平面形は歪な隅丸方形を呈し、東西70cm、南北65cm、床面からの深さ30cmを測る。底面は平坦で40cm×45cmの歪な円形を呈する。内部には細かなロームブロッ

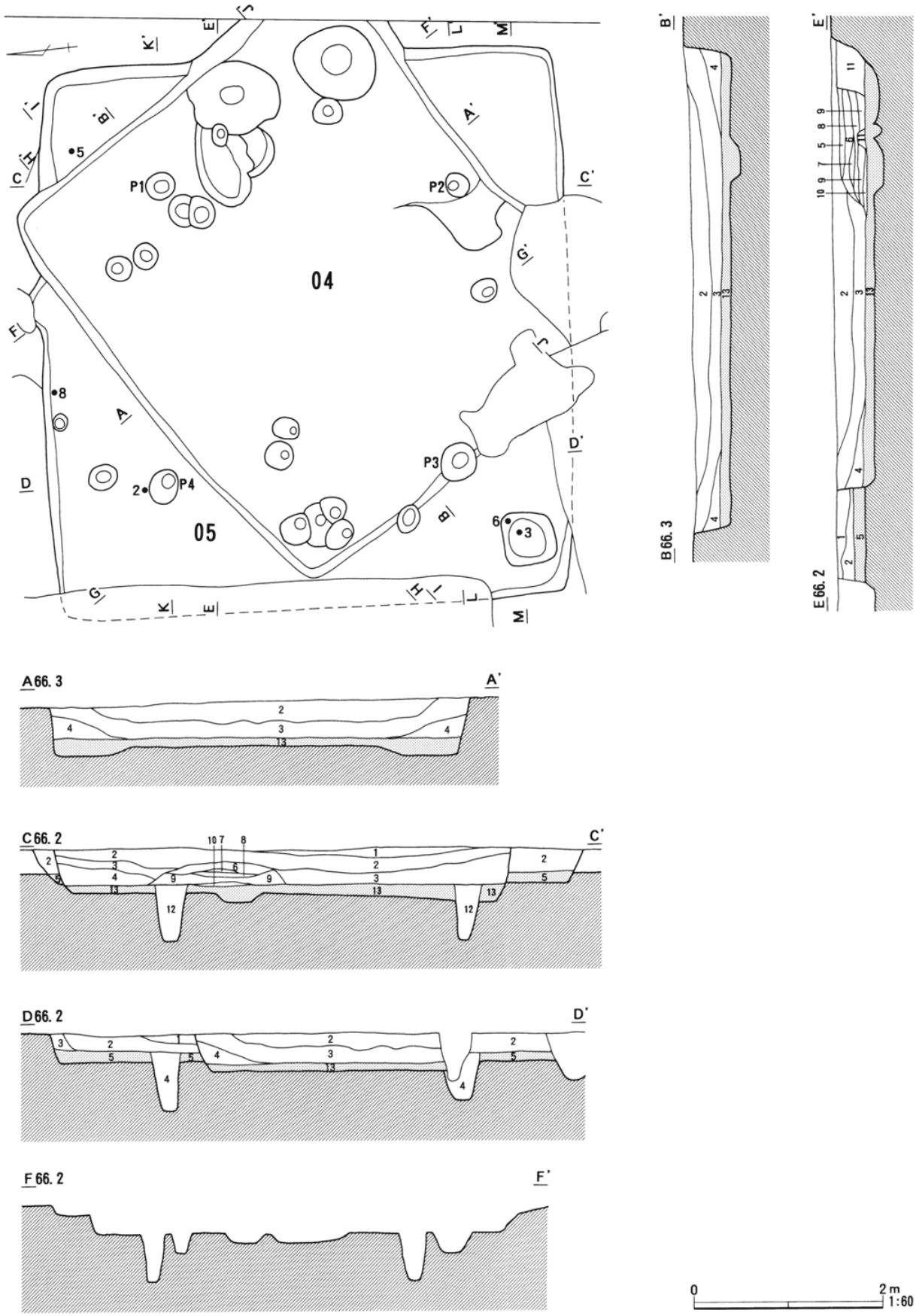


図20　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-04・05 掘り方(1)

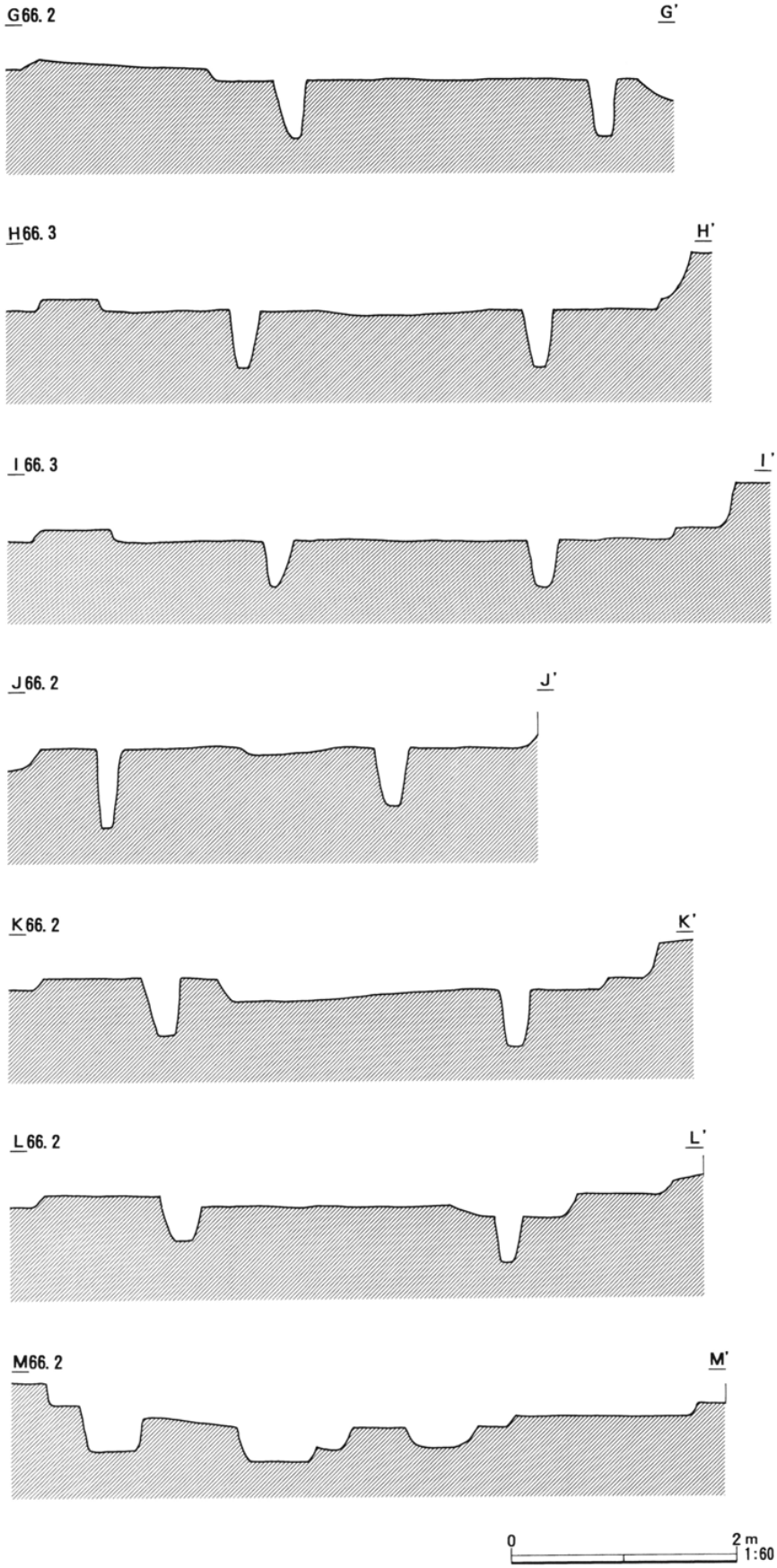


図21　四方田遺跡II次調査　SI-04・05 掘り方(2)

SI-04 土層説明

1　黒　色　土　ロームブロック（径１～５㎜）を少量含む。
2　黒 褐 色 土　ロームブロック（径１～５㎜）を少量含む。
3　暗 褐 色 土　ロームブロック（径１㎜±）、炭化物ブロック（径１～５㎜）を少量含む。
4　黒 褐 色 土　ロームブロック（径１～５㎜）、炭化物ブロック（径１～３㎜）を少量含む。
5　暗 褐 色 土　ロームブロック（径１～２㎜）、白色粘土ブロック（径１～３㎜）、焼土ブロック（径１～３㎜）を少量含む。
6　黒 褐 色 土　白色粘土ブロック（径１～５㎜）を少量含む。
7　焼　　土
8　黒　色　土　炭化物ブロック（径１～５㎜）、焼土ブロック（径１～10㎜）を多量に含む。
9　黒 褐 色 土　白色粘土ブロック（径１～５㎜）、焼土ブロック（径１～３㎜）を少量含む。
10　黒　色　土　炭化物ブロック（径１～５㎜）を多量に含む。
11　黒 褐 色 土　白色粘土ブロック（径１～５㎜）、炭化物ブロック（径１～３㎜）、焼土ブロック（径１～３㎜）を少量含む。
12　黒　色　土　ロームブブロック（径１～５㎜）を少量含む。
13　暗 褐 色 土　ロームブロック（径１～５㎜）を多量に含み、炭化物ブロック（径１～５㎜）、焼土ブロック（径１～５㎜）を少量含む。しまり強。貼床層。

SI-05 土層説明

1　黒　色　土　ロームブロック（径１㎜±）を少量含む。
2　黒 褐 色 土　ロームブロック（径１～10㎜）を少量含む。
3　黒 褐 色 土　ロームブロック（径１～５㎜）、炭化物ブロック（径１～３㎜）を少量含む。
4　黒　色　土　ロームブブロック（径１～15㎜）を少量含む。
5　暗 褐 色 土　ロームブロック（径１～５㎜）を多量に含み、炭化物ブロック（径１～５㎜）を少量含む。しまり強。貼床層。

図22　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-04・05 掘り方(3)

クを含む黒色土が堆積していた。

ピットは床下の掘り方面で７個を検出した。このうちＰ１～Ｐ４は主柱穴である。形態は円形ないしはやや歪んだ円形で、深さはＰ１が60㎝、Ｐ２が59㎝、Ｐ３が50㎝、Ｐ４が65㎝を測る。ロームブロックを含む黒色土が堆積し柱跡、裏込めは確認できない。

掘り方はほぼ平坦で、土坑状の落ち込みや、浅いピット状の落ち込みが集中する様相は認めない。

遺物［図25、写真24］

床面直上の遺物は、住居跡北半部に破片が散在する他、南西隅の貯蔵穴に完形品を含む遺物の集中が見られた。貯蔵穴では土師器台付甕［６］が上端にかかる状態で、土師器高坏［３］が貯蔵穴の内部に落ち込む状態で出土している。

SI-05出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 坩	口径　— 底径　3.6 器高　—	膨らみを持つ体部。底部は平底。	外面—体部ヨコナデ、底部ケズリ。内面—体部ヨコナデ。	内外—明赤褐色	1/3
2	土師器 高坏	口径(16.7) 底径　— 器高　—	脚部はわずかに膨らみ、現存３箇所、器面を等分しない位置に穿孔されている。	外面—坏部ヨコナデ、脚部タテナデ。内面—脚部ハケ目。	内外—橙色	坏部下半～脚部の1/2残存。

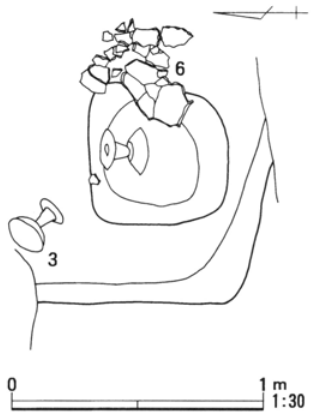


図23　四方田遺跡Ⅱ次調査
SI-05 貯蔵穴遺物出土状況

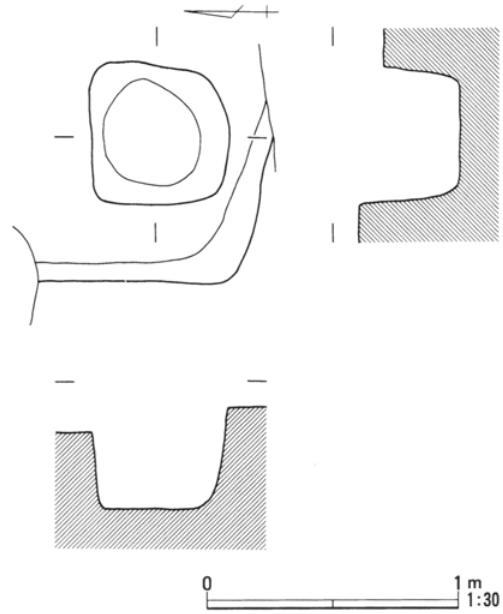


図24　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-05 貯蔵穴

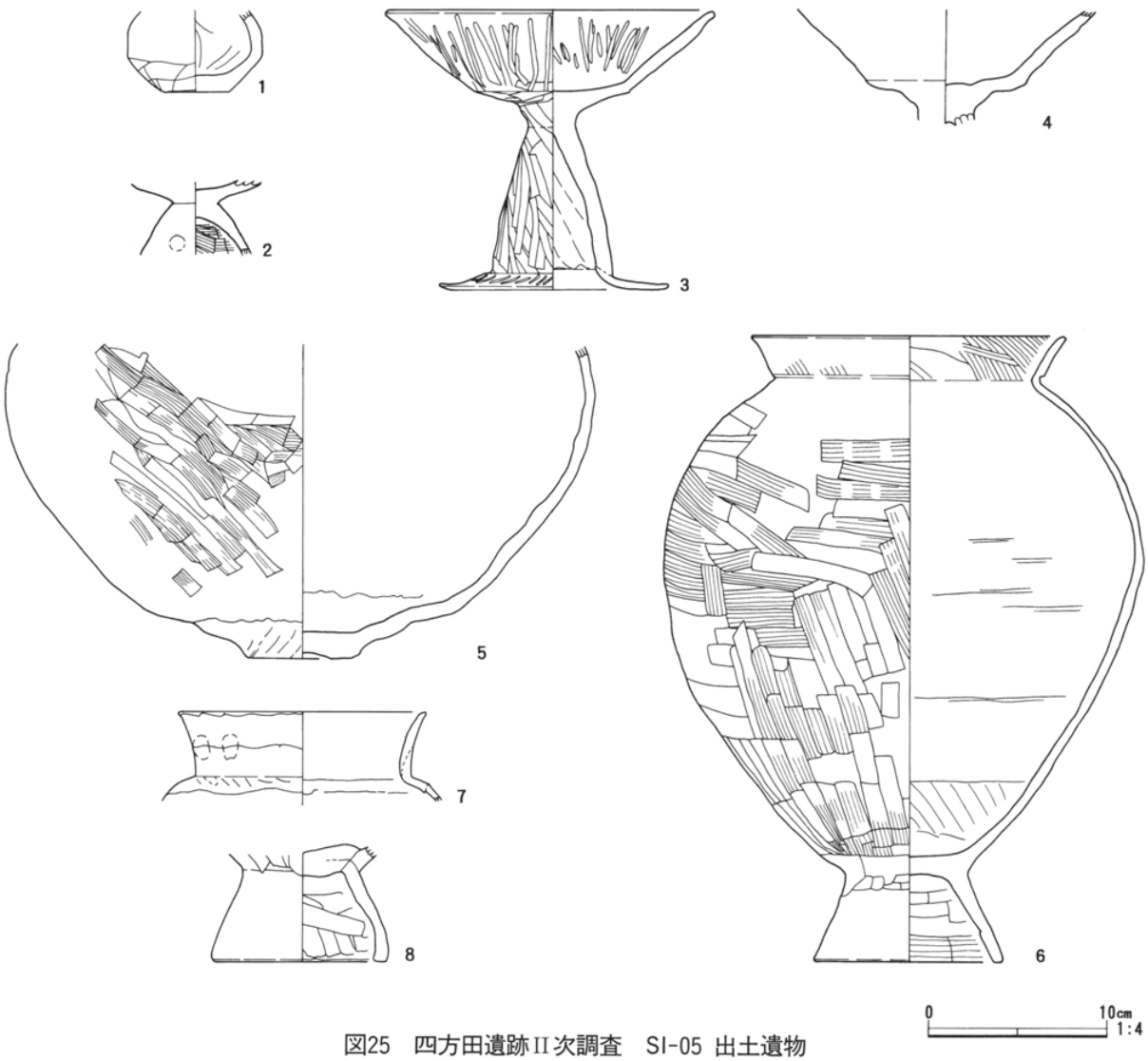


図25　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-05 出土遺物

SI-05出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
3	土師器 高坏	口径 18.6 底径 13.0 器高 15.5	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。柱状部は中位に膨らみを持ち、ほぼ水平に裾部広がる。	外面―坏部ヨコナデ後暗文様のミガキ、坏底部ヨコ、ナナメのナデ、柱状部タテ、ナナメのナデ、裾部ヨコナデ。内面―坏部タテナデ後暗文様のミガキ、柱状部指の腹全体を用いたナデ、裾部ヨコナデ。ナデには細線入る。	堅緻 内外―明赤褐色	ほぼ完形
4	土師器 高坏	口径(16.5) 底径　― 器高　―	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面―ヨコナデ。内面―ヨコナデ。大半は剝落。	内外―明赤褐色	坏部1/2残存
5	土師器 壺	口径　― 底径 6.0 器高　―	膨らみを持つ胴部。底部丸く凹んだ上げ底。	外面―胴部ナナメのケズリ、条線入る。底部ヨコ、ナナメのナデ。内面―ナナメのナデ。	低部内面に限って砂・小礫が密集。 内外―明赤褐色	1/3
6	土師器 台付甕	口径 17.7 底径 10.0 器高 34.9	胴部膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部は「ハ」の字状に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ヨコ、ナナメのケズリ、条線入る。脚部ナナメのナデ。内面―口縁部ハケ目、体部下位ナナメの調整痕、脚部ハケ目。	内―赤褐色 外―橙色	1/2
7	土師器 甕	口径 13.8 底径　― 器高　―	口縁部やや外反気味に立ち上がる。	外面―口縁部ヨコ、ナナメのナデ、指頭圧痕、輪積痕。内面―口縁部ヨコナデ。	内―にぶい橙色 外―明赤褐色	口縁部1/2残存
8	土師器 台付甕	口径　― 底径 9.7 器高　―	脚端部はわずかに内彎する。	外面―底部ナナメのケズリ、脚部ヨコナナメのナデ。内面―脚部ナナメのケズリ。	内外―明赤褐色	脚部残存

f．SI-06

遺構［図26～31、写真6・7］

調査区の西側のほぼ中央に位置する。調査区外にある住居跡西半を除き、東側のほぼ半分を検出した。北壁のほとんどを攪乱とSI-10、南壁の一部をSI-09との重複により失っている。南隅の一部を除き、ほぼ全体を検出した。平面形は比較的角の明瞭な方形を呈し、規模は南北5.4mを測る。主軸方位はN―10°―Eを示す。東壁からやや離れてカマドを、南東隅寄りに貯蔵穴を備える。

覆土は3層に分けられ、壁際には部分的にロームと炭化物の細かなブロックを含む暗褐色土が堆積している。床面は全体にロームブロックを含む黒褐色土で被覆され、さらに上層にはロームブロックを含む黒色土が堆積している。

床は多量のロームブロックを含む暗褐色土を全体に敷き込んで貼床を形成している。床面には凹凸が見られ、さらに壁際は中央に比べてやや低くなっている。全体に硬化が顕著である。壁溝は存在しない。

カマドは東壁中央のやや南寄りに付設されている。完全な造り付けカマドであるが、カマド本体が壁から分離している点が特徴である。カマドは黒褐色土に白色粘質土や焼土の細かなブロックを混合した土を用いて構築している。比較的良好な遺存状態を保っていたが、土器片、石材などの構築材の使用や臼玉などを用いた祭祀の痕跡は認められなかった。

貯蔵穴はカマドと南壁との中間の床面に検出した。平面形は不整な円形を呈し、東西95cm、南北80cm、床面からの深さ55cmを測る。底面は平坦で59×48cmの不整円形を呈する。内部には細かなロームブロックを含む黒色土が堆積していた。

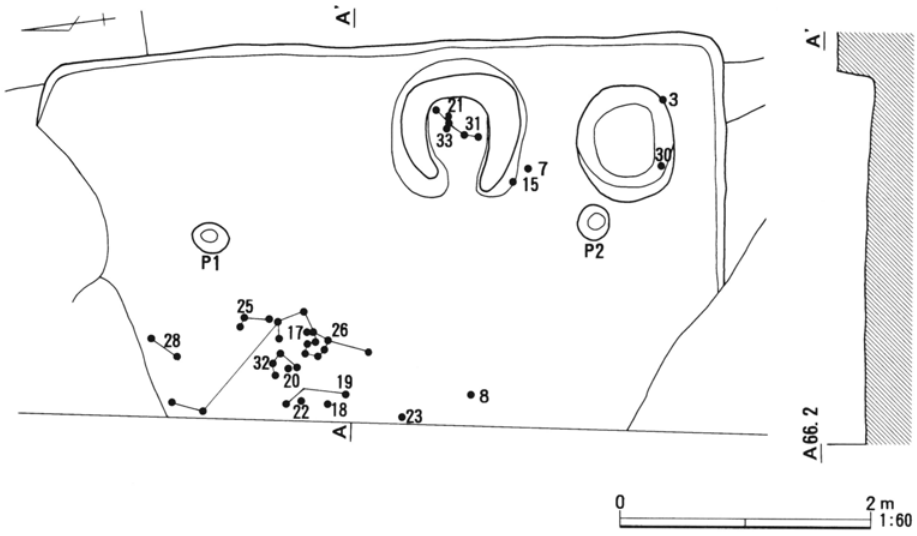
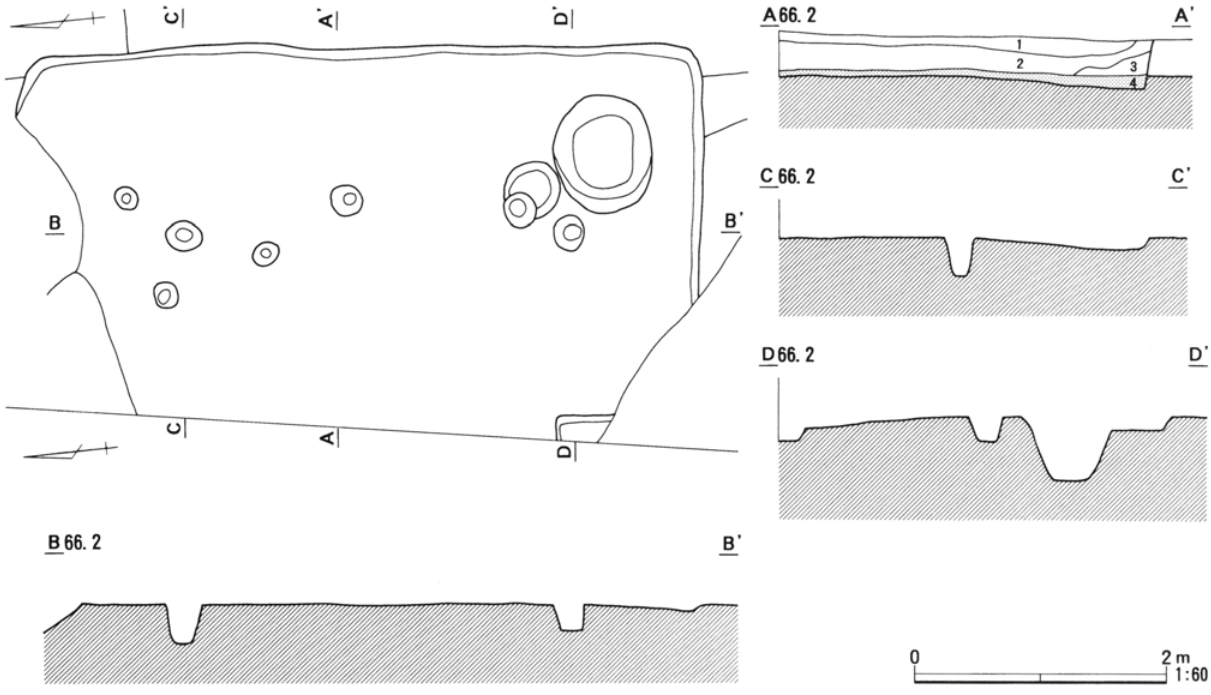


図26　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06 床面



SI-06 土層説明

1　黒　色　土　ロームブロック（径１～５㎜）を少量含む。
2　黒 褐 色 土　ロームブロック（径１～５㎜）を少量含む。
3　暗 褐 色 土　ロームブロック（径１～５㎜）、炭化物ブロック（径１～５㎜）を少量含む。
4　暗 褐 色 土　ロームブロック（径１～15㎜）を多量に含む。しまり強。貼床層。

図27　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06 掘り方

ピットは床面で２個を検出した。いずれも主柱穴である。形態は楕円形ないしは歪んだ円形で、深さはＰ１が35cm、Ｐ２が25cmを測る。ロームブロックを含む黒色土が堆積し柱跡、裏込めは確認できない。

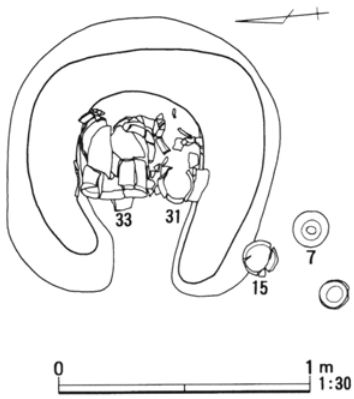


図28　四方田遺跡Ⅱ次調査
SI-06 カマド遺物出土状況

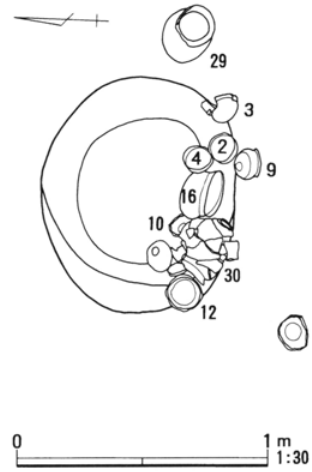


図30　四方田遺跡Ⅱ次調査
SI-06 貯蔵穴遺物出土状況

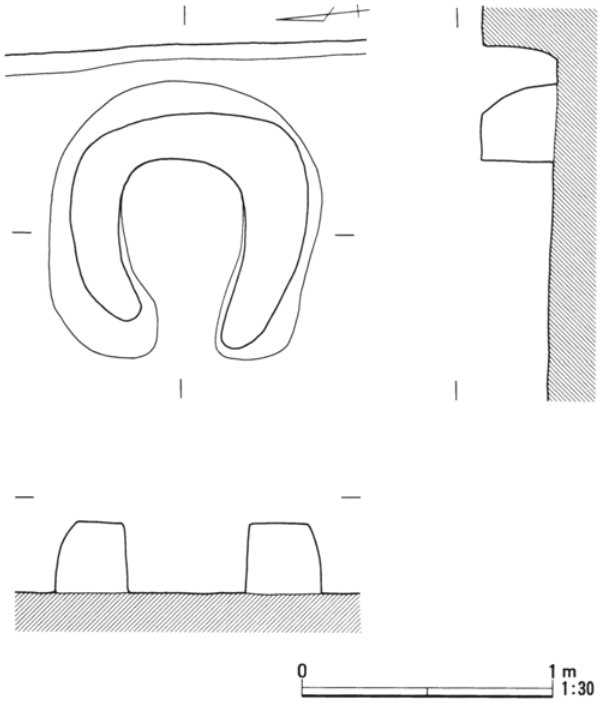


図29　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06 カマド

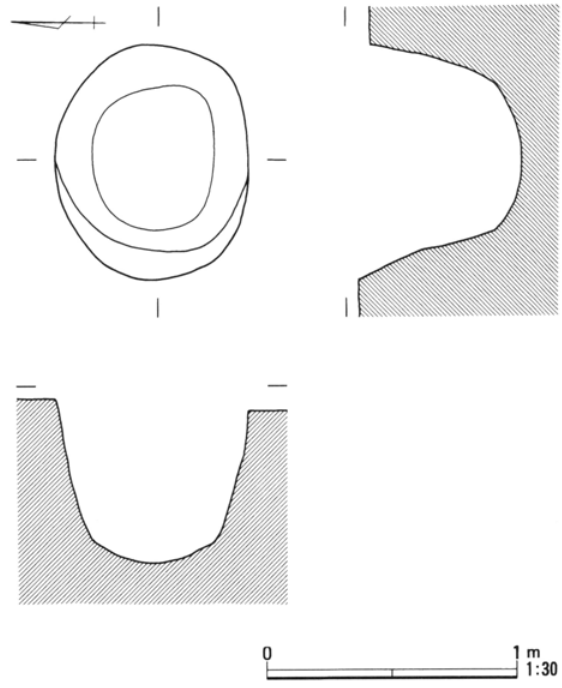


図31　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06 貯蔵穴

掘り方は、床面と同様に、中央に比べて壁際がやや低くなっている。また、土坑・ピット状の浅い落ち込みが散在している。

遺物［図32・33、写真25・26］

床面直上の遺物は、中央やや北寄りの位置に集中するほか、カマド、貯蔵穴周辺でまとまって検出している。床面では土師器坏［８］、土師器坩［18・19・20］、土師器壺［25・26］、土師器甕［32］などが集中しているが、完形品がなく二次的な廃棄によるものと考えられる。カマド内では土師器甕［31］と土師器甑［33］の組み合わせが見られ、カマド右袖の外側には土師器坏［７・15］が置かれていた。貯蔵穴の上層には土師器坏［３］、土師器甕［30］などがあり、いずれも完形もしくは完形に近いことから、これらは本住居に伴うものと認定される。

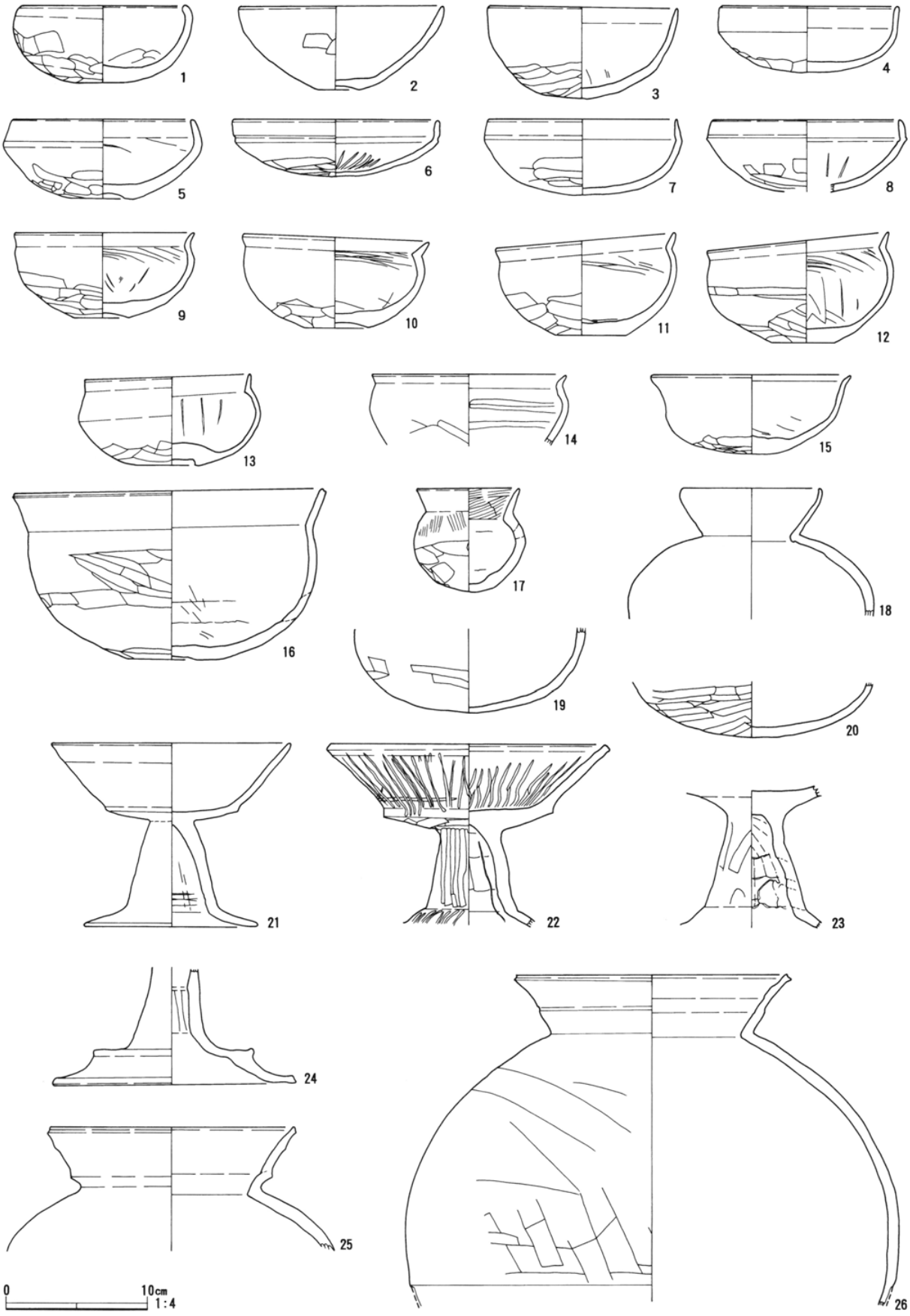


図32　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06 出土遺物(1)

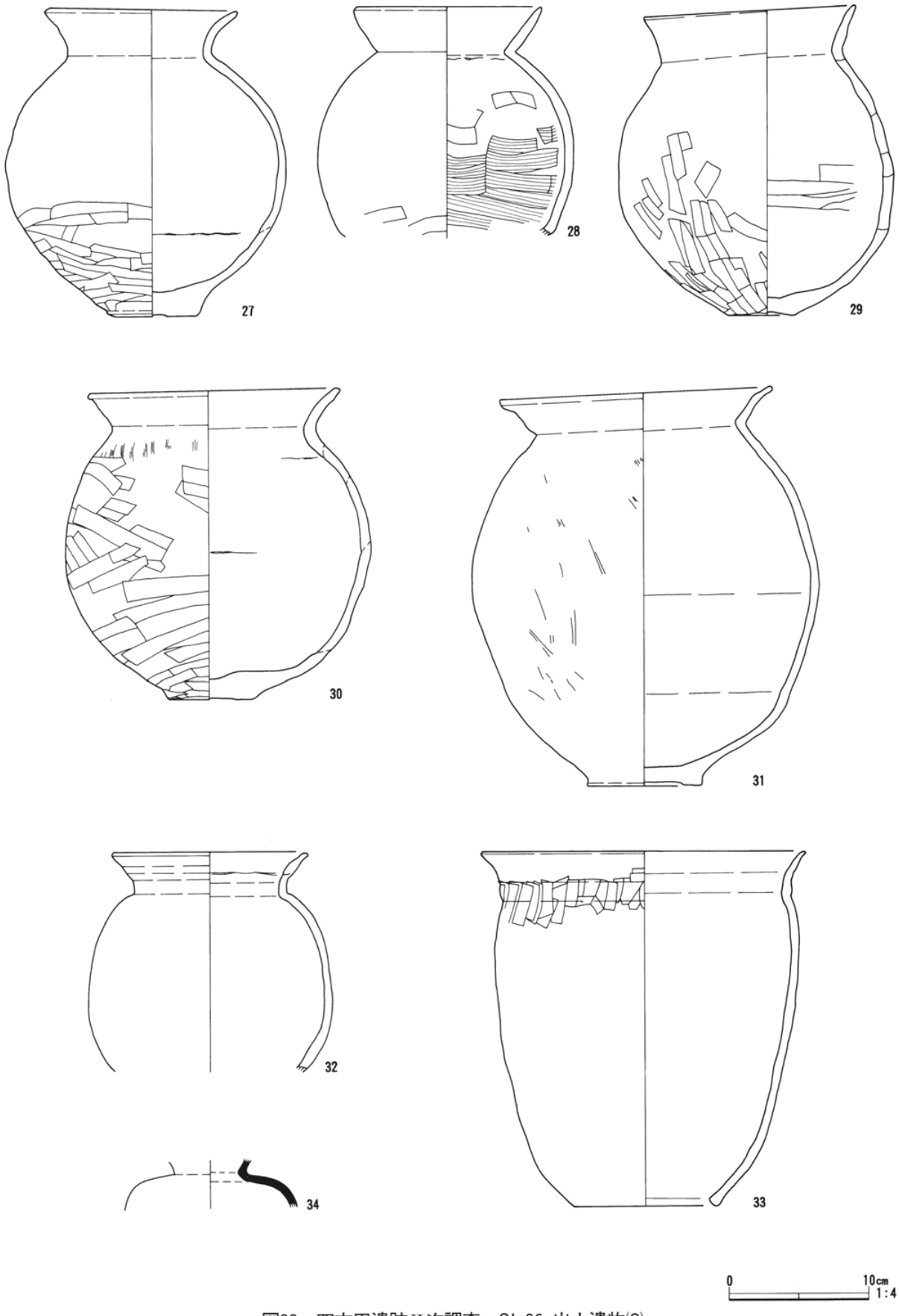


図33　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-06 出土遺物(2)

SI-06出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 坏	口径 11.5 底径 2.0 器高 5.4	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は内彎する。底部わずかに上げ底。	外面―体部上位ヨコナデ、中位～下位ケズリ。内面―体部ヨコナデ。	内外―橙色	完形
2	土師器 坏	口径 14.4 底径 3.1 器高 6.0	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はわずかに内彎する。底部は上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ。内面―口縁部ヨコナデ、体部ヨコ、ナナメのナデ、底部放射状のナデ。	内外―橙色	2/3
3	土師器 坏	口径 13.3 底径 ― 器高 6.4	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。底部は丸底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部上位ヨコナデ、指頭圧痕、下位ヘラケズリ。内面―口縁部・体部ヨコナデ。	内―明赤褐色 外―赤褐色	4/5
4	土師器 坏	口径 12.6 底径 2.4 器高 4.6	口縁部と体部との境に弱い稜を持ち、口縁部はほぼ直立する。	外面―口縁部ヨコナデ、体部上位ヨコ、ナナメのナデ、中位～底部ケズリ。内面―口縁部・体部ヨコナデ。	内外―橙色	完形
5	土師器 坏	口径 12.8 底径 3.6 器高 5.6	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は内傾する。底部は上げ底。上方から見ると楕円形に近い。	外面―口縁部・体部上位ヨコナデ、中位ケズリ。内面―口縁部・体部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	完形
6	土師器 坏	口径 14.4 底径 3.0 器高 4.0	体部と口縁部との境に稜及び凹線状の凹みを持ち、口縁部はほぼ直立する。底部は平底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部上位ヨコ、ナナメのナデ、中位～底部ヘラケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ及び暗文様のミガキ。	内外―明赤褐色	完形
7	土師器 坏	口径 13.6 底径 ― 器高 5.3	口縁部と体部との境に弱い稜を持ち、口縁部は内傾して立ち上がる。底部は丸底。	外面―口縁部・体部上位ヨコナデ、中位ケズリ、底部ヨコナデ。内面―口縁部・体部ヨコナデ。	内外―橙色	ほぼ完形
8	土師器 坏	口径 13.5 底径 ― 器高 (5.1)	口縁部と体部との境に稜を持ち、口縁部は内傾して立ち上がる。	外面―口縁部・体部上位ヨコナデ、中位～底部部分的にケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部にヘラ痕。	内外―明赤褐色	1/2
9	土師器 坏	口径 12.7 底径 4.0 器高 6.0	体部上位に膨らみを持ち、口縁部はやや外反する。底部は上げ底。	外面―口縁部・体部上位ヨコナデ、中位ケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部～底面粗いケズリ。	内外―橙色	完形
10	土師器 坏	口径 13.2 底径 4.5 器高 6.3	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は短く開く。底部は上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部上位～中位ナナメのナデ、下位ケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部上位鋭利な工具による切傷状の整形痕。	内外―明赤褐色	ほぼ完形
11	土師器 坏	口径 12.8 底径 5.0 器高 6.7	体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く開く。底部は平底。	外面―口縁部・体部上位ヨコナデ、中位ケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部上位工具による切傷状の整形痕。	内外―明赤褐色	完形
12	土師器 坏	口径 12.8 底径 4.5 器高 7.1	胴部膨らみを持ち、口縁部は短かく開く。底部は平底。	外面―口縁部・体部ヨコナデ、ナナメのナデ、底部ケズリ。内面―口縁部・体部ヨコナデ及び工具による切傷状の整形痕。底部ケズリ。	内外―明赤褐色	完形
13	土師器 坏	口径 11.6 底径 3.9 器高 6.2	体部中位に膨らみを持ち、口縁部は直立気味に短く立ち上がる。底部は上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、底部ケズリ。内面―口縁部・体部ヨコナデ。	内―褐灰色 外―赤褐色	ほぼ完形
14	土師器 坏	口径 13.8 底径 ― 器高 ―	体部中位に膨らみを持ち、口縁部は短く外反する。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ナナメ、ヨコのナデ。内面―口縁部・体部ヨコナデ。	内外―橙色	1/5
15	土師器 坏	口径 14.4 底径 ― 器高 5.5	体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く外反する。底部は丸底。	外面―口縁部・体部ヨコナデ。 内面―口縁部・体部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	ほぼ完形
16	土師器 鉢	口径 21.6 底径 7.1 器高 12.0	体部は膨らみを持って立ち上がり、口縁部はやや外反して開く。底部は上げ底。	外面―口縁部指による整形後ヨコナデ、体部ヨコ、ナナメのナデ。内面―口縁部・体部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	完形

SI-06出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
17	土師器 坩	口径　7.1 底径　— 器高　7.4	体部は膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上半ヨコナデ、部分的にナナメのハケ目。下半ヨコ、ナナメの粗雑なケズリ。内面—口縁部ヨコハケ。	内外—にぶい赤褐色	4/5
18	土師器 坩	口径　9.8 底径　— 器高　—	体部に膨らみを持ち、口縁部は大きく開き、端部は内彎する。	外面—口縁部・体部ヨコナデ。 内面—口縁部・体部ヨコナデ。	内外—橙色	1/3
19	土師器 坩	口径　— 底径　— 器高　—	体部ゆるやかな膨らみを持ち、底部は丸底。	外面—体部ナナメのナデ、底部ケズリ、ナデ擦痕入る。内面—体部ヨコナデ。	内外—橙色	1/2
20	土師器 坩	口径　— 底径　— 器高　—	体部ゆるやかな膨らみを持ち、底部は丸底。	外面—体部・底部磨耗の為不明瞭だがケズリ。内面—体部・底部ナデ。	内—にぶい橙色 外—にぶい赤褐色	底部残存
21	土師器 高坏	口径 16.7 底径(12.0) 器高 13.0	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は直線的に開く。柱状部は下位に膨らみを持ち、裾部広がる。	外面—坏部ヨコナデ、柱状部タテナデ、裾部ヨコナデ。内面—坏部ヨコナデ、柱状部条線があるヨコナデ、裾部ヨコナデ。	内外—明赤褐色	裾部1/2欠損
22	土師器 高坏	口径 19.5 底径　— 器高　—	坏部は下位に稜を持ち、口縁部は外反気味に開き、端部は面をなす。柱状部は下位に膨らみを持つ。	外面—口縁部ヨコナデ、坏部ヨコナデ後暗文様のミガキ、底部ヨコのケズリ、柱状部タテのミガキ、裾部ヨコナデ後ミガキ。内面—坏部ヨコナデ柱状部ナデ。	堅緻 内外—明赤褐色	裾部欠損
23	土師器 高坏	口径　— 底径　— 器高　—	柱状部は下位に膨らみを持つ。	外面—柱状部磨耗の為不明瞭、裾部ヨコナデ。内面—坏底部ナデ、柱状部輪積痕、指頭圧痕。	内外—橙色	1/3
24	土師器 高坏	口径　— 底径 16.9 器高　—	柱状部は直線的に開き、裾部は上位に段を有して開く。	外面—柱状部タテナデ、裾部ヨコナデ。内面—脚部タテの整形痕、裾部ヨコナデ。	堅緻 内外—明赤褐色	脚部残存
25	土師器 壺	口径 17.1 底径　— 器高　—	口縁部は端部及び2箇所に稜線を巡らせ、外反する。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ナナメ、、ヨコのナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ヨコナデ、指頭による整形痕。	内外—橙色	口縁部2/3残存
26	土師器 壺	口径 19.2 底径　— 器高　—	胴部に膨らみを持ち、口縁部は中位に稜を持ち、外反する。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ナナメのナデ、胴部中位ヨコ、ナナメのケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ナナメのナデ。	内—にぶい赤褐色 外—橙色	胴部1/3残存
27	土師器 壺	口径 13.0 底径　5.7 器高 22.0	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反する。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部上・中位ナナメのナデ、下位ヨコ、ナナメのケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、ナナメのナデ。	内外—明赤褐色	完形
28	土師器 甕	口径 13.4 底径　— 器高　—	胴部に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開き、端部やや内彎する。叩きによる成形の可能性もある。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ナナメヨコのナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヨコのハケ目。	内—にぶい赤褐色 外—橙色	胴部1/2残存
29	土師器 甕	口径 15.1 底径　4.4 器高 21.1	胴部中位に膨らみを持ち、口縁部は外反する。底部は上げ底。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ナナメのナデ、中位～下位タテ、ナナメのケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部中位に横方向のケズリ痕。	内外—橙色	4/5
30	土師器 甕	口径 17.3 底径　5.7 器高 21.9	胴部に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部中央円形に近く凹む。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、ナナメのケズリ後タテ、ナナメのナデ。内面—口縁部・体部ヨコ、ナナメのナデ。	内外—にぶい橙色	ほぼ完形
31	土師器 甕	口径 19.5 底径　8.2 器高 28.0	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反する。底部は上げ底。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ナナメのナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヨコナデ、全体に指頭による浅い押圧痕（成形痕？）残る。	内外—にぶい橙色	ほぼ完形

SI-06出土遺物観察表(3)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
32	土師器 甕	口径 17.0 底径 — 器高 —	胴部膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、ナナメのナデ。内面—口縁部・体部ヨコナデ。	内外—明赤褐色	1/3残存
33	土師器 甑	口径 22.7 底径 10.5 器高 25.0	膨らみの少ない胴部。口縁部は外反する。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部凹凸のある工具によるタテナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部外面と同じ工具によるヨコ、ナナメのナデ。	内外—橙色	完形
34	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	頸部は強く屈曲し、口縁部が微妙に曲折しつつ開く。部分的に頸部の屈曲が著しい。	外面—大部分剝落している。内面—ヨコナデ。屈曲部直下に細かなノッチ。	内—黄灰色 外—灰色	体部破片

g. SI-07

遺構［図34・35、写真8・9］

調査区の南側のほぼ中央に位置する。半分以上が調査区外にあって、北東隅の1/4程度を検出したに過ぎない。西側はSI-09との重複によって失っている。平面形は比較的角の明瞭な方形を呈するものと思われるが、規模、主軸方位ともに不明である。調査の範囲内でカマド、貯蔵穴は確認できていない。

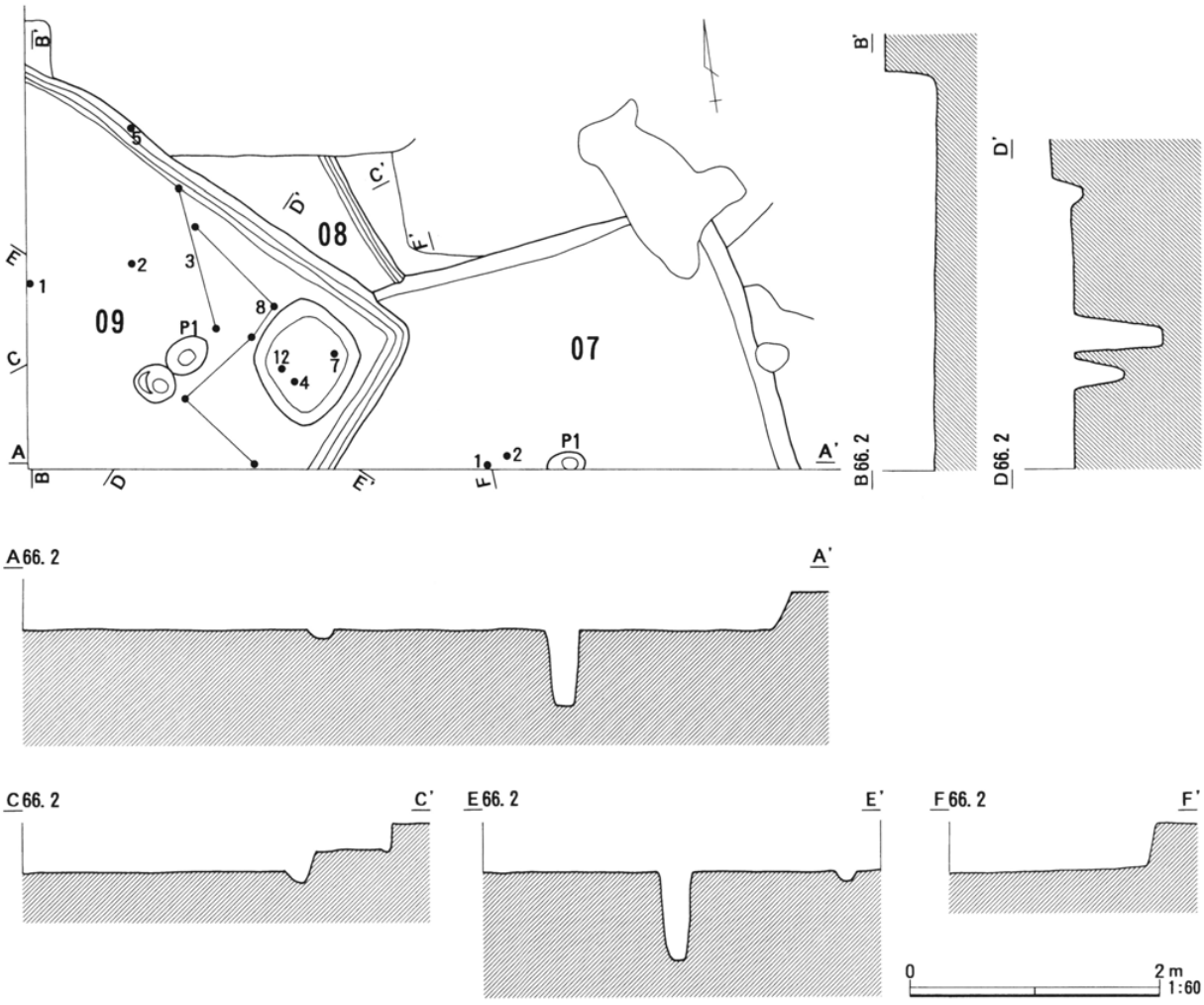
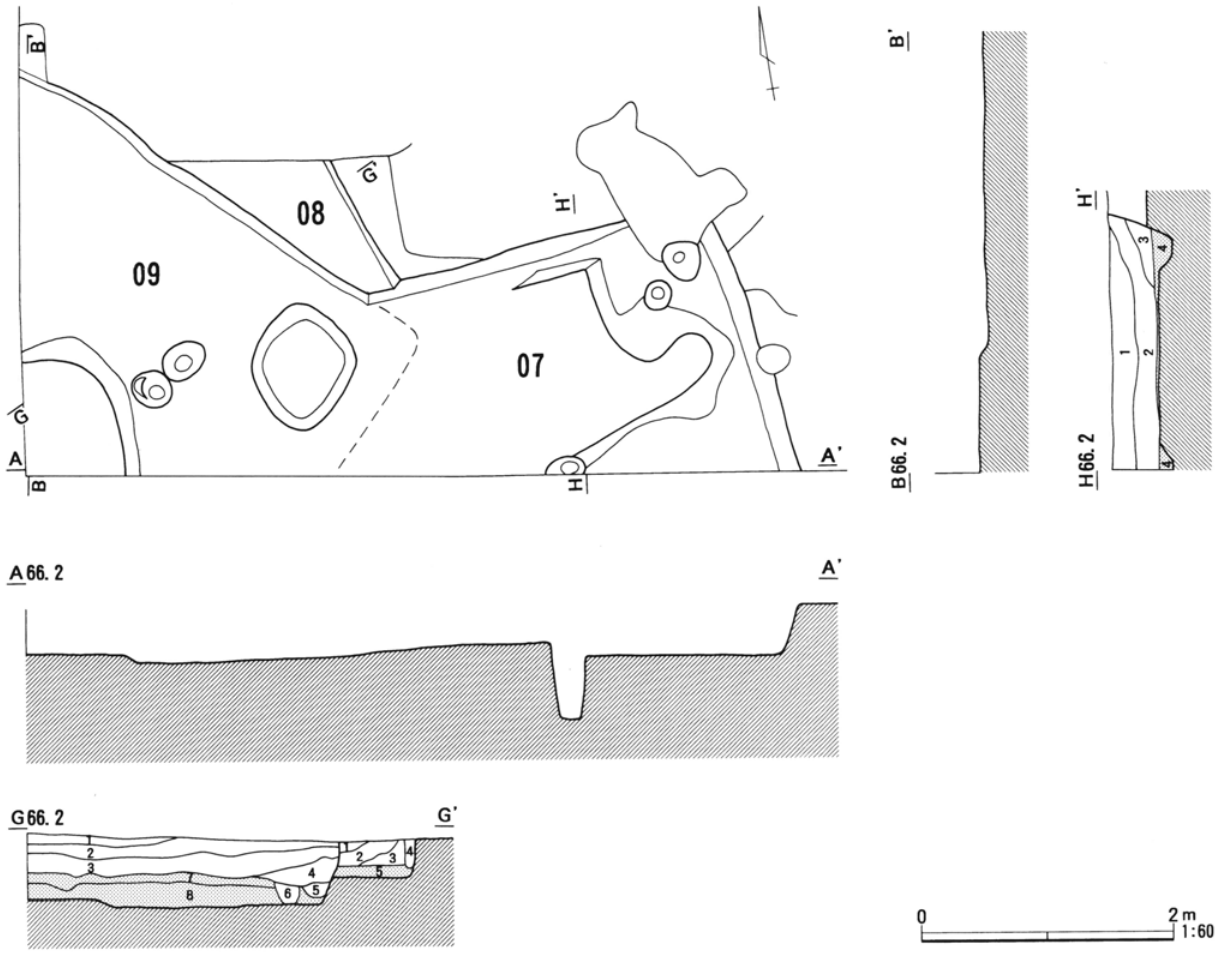


図34　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-07・08・09 床面



SI-07 土層説明

1　黒　色　土　ロームブロック（径1～5㎜）を少量含む。
2　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）を少量含む。
3　黒褐色土　ロームブロック(径1～5㎜)、炭化物ブロック（径1～5㎜）、焼土ブロック（径1～5㎜）を少量含む。
4　暗褐色土　ロームブロック（径1～15㎜）を多量に含む。しまり強。貼床層。

SI-08 土層説明

1　黒　色　土　ロームブロック（径1㎜±）を少量含む。
2　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）を少量含む。
3　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）、焼土ブロック（径1～5㎜）を少量含む。
4　黒　色　土　炭化物ブロック（径1～5㎜）を少量含む。
5　暗褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）を多量に含む。しまり強。貼床層。

SI-09 土層説明

1　黒　色　土　ロームブロック（径1～5㎜）、粘土ブロック（径1～5㎜）、白色パミス（径1～5㎜）を少量含む。
2　黒　色　土　ロームブロック（径1㎜±）を少量含む。
3　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）を少量含む。
4　黒褐色土　ロームブロック(径1～5㎜)、炭化物ブロック（径1～5㎜）、焼土ブロック（径1～5㎜）を少量含む。
5　黒　色　土　炭化物ブロック（径1～3㎜）を少量含む。
6　黒　色　土　ロームブロック(径1～5㎜)、白色粘質土ブロック(径1～5㎜)、炭化物ブロック（径1～5㎜）を少量含む。
7　暗褐色土　ロームブロック（径1～15㎜）、焼土ブロック（径1～5㎜）を多量に含む。しまり強。貼床層。
8　暗褐色土　ロームブロック（径1～10㎜）を多量に含む。しまり強。貼床層。

図35　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-07・08・09 掘り方

覆土は３層に分けられ、壁際にはロームと炭化物、焼土の細かなブロックを含む黒褐色土が堆積している。床面はロームブロックを含む黒褐色土で被覆され、さらに上層にはロームブロックを含む黒色土が堆積している。

床はローム面が露出し、直接覆土で被覆されている部分と、掘り方をもち、多量のロームブロックを含む暗褐色土を敷き込んで貼床を形成している部分とに別れる。床面はほぼ平坦で、貼床部分は全体に硬化が顕著である。壁溝は存在しない。

カマド、貯蔵穴が存在する場合は調査区外にあると考えられる。

ピットは床面で１個を検出した。住居跡内での位置的な関係から主柱穴と推定される。形態は楕円形で、深さは70cmを測る。ロームブロックを含む黒色土が堆積し柱跡、裏込めは確認できない。

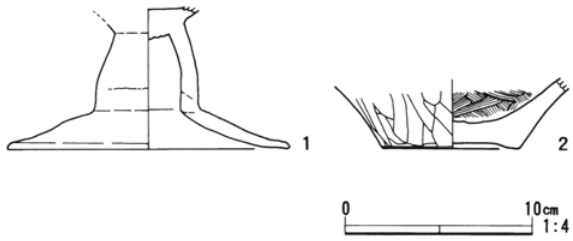


図36　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-07 出土遺物

掘り方は東壁際から主柱穴にかけての不整形な落ち込みとなっている。掘り方面には北東隅に２か所のピット状の浅い落ち込みがある。

遺物［図36、写真27］

床面直上の遺物は、主柱穴付近で検出された土師器高坏の脚部［１］と土師器鉢の底部［２］のみである。混入品と考えられる

SI-07出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 高坏	口径　— 底径 15.1 器高 21.1	柱状部は膨らみを持ち、裾部大きく広がる。	外面—坏部ヨコナデ、柱状部タテナデ、裾部ヨコナデ。内面—柱状部指による整形痕、裾部ヨコナデ。内外面化粧がけ。	胎土精良。 内外—橙色	裾部１/３欠損
2	土師器 壺	口径　— 底径　7.3 器高　—	底部は上げ底。	外面—底面ヘラケズリ。内面—ハケ目。	内外—明赤褐色	低部残存

h．SI-08

遺構［図34・35、写真８・９］

SI-06～09に囲まれるようにしてわずかに残存している。平面形、規模、主軸方位、カマド・貯蔵穴の有無、柱穴の位置などはまったく不明である。

覆土は３層に分けられ、壁際にはロームと焼土の細かなブロックを含む黒褐色土が堆積している。床面はロームブロックを含む黒褐色土で被覆され、さらに上層にはロームブロックを含む黒色土が堆積している。

床は多量のロームブロックを含む暗褐色土を全体に敷き込んで貼床を形成している。床面はおおよそ平坦で、全体に硬化が顕著である。壁際には壁溝が存在し、内部に炭化物ブロックを含む黒色土が堆積している。

掘り方の面は平坦で、落ち込みなども見られない。

遺物

覆土から若干の土師器片を検出しているが、床面直上の遺物は皆無である。

ｉ．SI-09

遺構［図34・35・37・38、写真８・９］

調査区の南西隅に位置する。大半が調査区外にあり、住居跡の東隅を中心とする１/４程度が確認できる。平面形は比較的角の明瞭な方形を呈するものと思われるが、規模は判然としない。南東壁が主軸線に並行すると考えれば、主軸方位はＮ―46°―Ｅを示す。東隅の床面に貯蔵穴を備える。

覆土は４層に分けられ、壁際にはロームと炭化物、焼土の細かなブロックを含む黒褐色土が堆積している。床面はロームブロックを含む黒褐色土で被覆され、さらに上層にはロームブロックを含む黒色土とローム・粘土のロックと白色パミスを含む黒色土が堆積している。

床は多量のロームブロックを含む暗褐色土を全体に敷き込んで貼床を形成している。貼床層は上下２層に分かれ、上層にのみ焼土ブロックが含まれている。床面はおおよそ平坦で、全体に硬化が顕著である。壁際には壁溝が存在し、内部にローム・炭化物・焼土・白色粘質土などの細かなブロックを含む黒色土が堆積している。

燃焼施設はカマド・炉とも確認できない。貯蔵穴との位置関係から、カマドが存在する場合は北東壁に付設されると思われるが、この付近には痕跡も認められなかった。カマド出現以前の段階に属し、調査区外に炉をもつ可能性も考えられる。

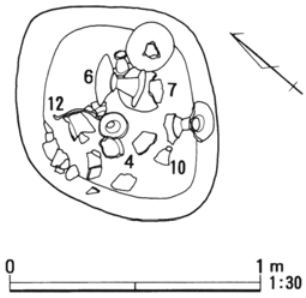


図37　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-09 貯蔵穴遺物出土状況

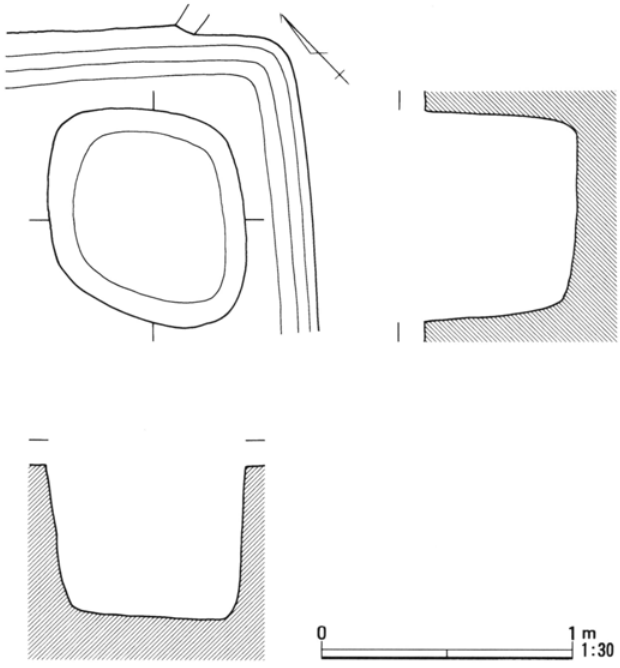


図38　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-09 貯蔵穴

貯蔵穴は床面の東隅に設けられている。平面形は不整な隅丸方形を呈し、東西82cm、南北80cm、床面からの深さ60cmを測る。底面は平坦で61×60cmの上端と相似の不整な隅丸方形を呈する。内部には細かなロームブロックを含む黒色土が堆積していた。

ピットは床面で１個を検出した。住居跡内での位置的な関係から主柱穴と推定される。形態は楕円形で、深さは72cmを測る。ロームブロックを含む黒色土が堆積し柱跡、裏込めは確認できない。

掘り方は中央のロームを台状に掘り残し、周りをさらに深く掘り込んでいる。なお、掘り方面ではＰ１に近接してさらにもう１個のピットを検出した。貼床が２層に分離できることからSI-09は建て替えが行われている可能性が考えられ、この掘り方面で検出されたピットは古い住居の主柱穴と推測される。

遺物［図39、写真27］

床面直上の遺物は、貯蔵穴周辺にまとまっているほか、貯蔵穴で集中して出土している。床面出土遺物のうち土師器坏［１］、土師器坩

［2・3］などは完形もしくは完形に近く、本住居に伴うものと認定される。また、貯蔵穴には土師器坩［4］、土師器高坏［6］、土師器甕［12］などがあり、［6］のような完形を含むものの、一部破損品が多い。

SI-09出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 坏	口径 13.2 底径 6.0 器高 5.8	体部膨らみを持ち、口縁部は内彎する。底部は上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部中位ヨコ、ナナメのナデ、底部ケズリ。 内面―口縁部～体部ヨコナデ、底部ケズリ。	内外―明赤褐色	完形
2	土師器 坩	口径 10.2 底径 ― 器高 8.7	体部中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開き、端部わずかに内彎する。底部丸底。	外面―口縁部タテハケ調整後ヨコナデ、体部下位～底部ケズリ。 内面―口縁部ヨコハケ、体部指頭による整形痕。	内外―橙色	完形
3	土師器 坩	口径 8.5 底径 ― 器高 9.1	体部中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開き、端部わずかに内彎する。底部丸底。	外面―口縁部・体部上位ヨコナデ、下位ナナメ、ヨコのケズリ。内面―口縁部ヨコナデ。	内外―橙色	口縁部1/3欠損
4	土師器 坩	口径 10.4 底径 0.8 器高 8.8	体部に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は丸底。	外面―口縁部・体部上位ヨコナデ、中位ナナメのナデ、下位ヨコ、ナナメのケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部ナナメのナデ。	内外―にぶい褐色	2/3
5	土師器 器台	口径 ― 底径(11.8) 器高 ―	接合部はすぼまり、脚部は大きく開く。接合部に貫通孔、脚部に円孔を3個穿孔。	外面―脚部タテのミガキ。端部ヨコナデ。内面―脚部中位ハケ、下位ヨコナデ。	比較的堅緻。角閃石。長石。 内外―橙色	裾部2/3欠損
6	土師器 高坏	口径 20.0 底径 14.0 器高 16.2	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部は微妙に膨らみを持ち、裾部広がる。	外面―口縁部～坏部ヨコナデ，柱状部タテのミガキ、裾部ヨコナデ。 内面―口縁部～坏部ヨコナデ、柱状部輪積痕、指頭圧痕、裾部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	完形。内外面の一部に炭化物付着。
7	土師器 高坏	口径 20.2 底径 ― 器高 ―	坏部下位に稜を持ち、坏部、脚部ともに直線的。	外面―口縁部～坏部ヨコナデ、柱状部タテナデ。内面―口縁部～坏上位ヨコナデ、中位細かな擦痕が入るタテの調整、柱状部指頭による整形。	内外―橙色	裾部欠損
8	土師器 高坏	口径 20.8 底径 ― 器高 ―	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面―口縁部～坏部ヨコナデ。 内面―口縁部～体部ヨコナデ後暗文様のミガキ。	内外―橙色	坏部3/4残存
9	土師器 高坏	口径 ― 底径(12.7) 器高 ―	柱状部下位に膨らみを持ち、裾部広がる。	外面―接合部ヨコナデ、柱状部タテのミガキデ、裾部ヨコナデ。 内面―柱状部タテナデ、裾部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	裾部4/5欠損
10	土師器 高坏	口径 ― 底径 ― 器高 ―	柱状部ほとんど膨らみを持たず直線的に開く。	外面―柱状部ヨコナデ。内面―柱状部工具を回転して調整、ケズリ痕。	内外―橙色	脚部残存
11	土師器 高坏	口径 ― 底径 10.3 器高 ―	「ハ」の字状に開き、脚端部外反する。	外面―ヨコナデ。 内面―ヨコナデ。	内外―橙色	脚部残存。時期的に異なる可能性もある。
12	土師器 甕	口径 16.7 底径 ― 器高(24.0)	胴部中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部上位ヨコナデ、下位タテのナデ。内面―口縁部～体部中位ヨコナデ、下位ナナメのナデ。	内外―明赤褐色	底部欠損

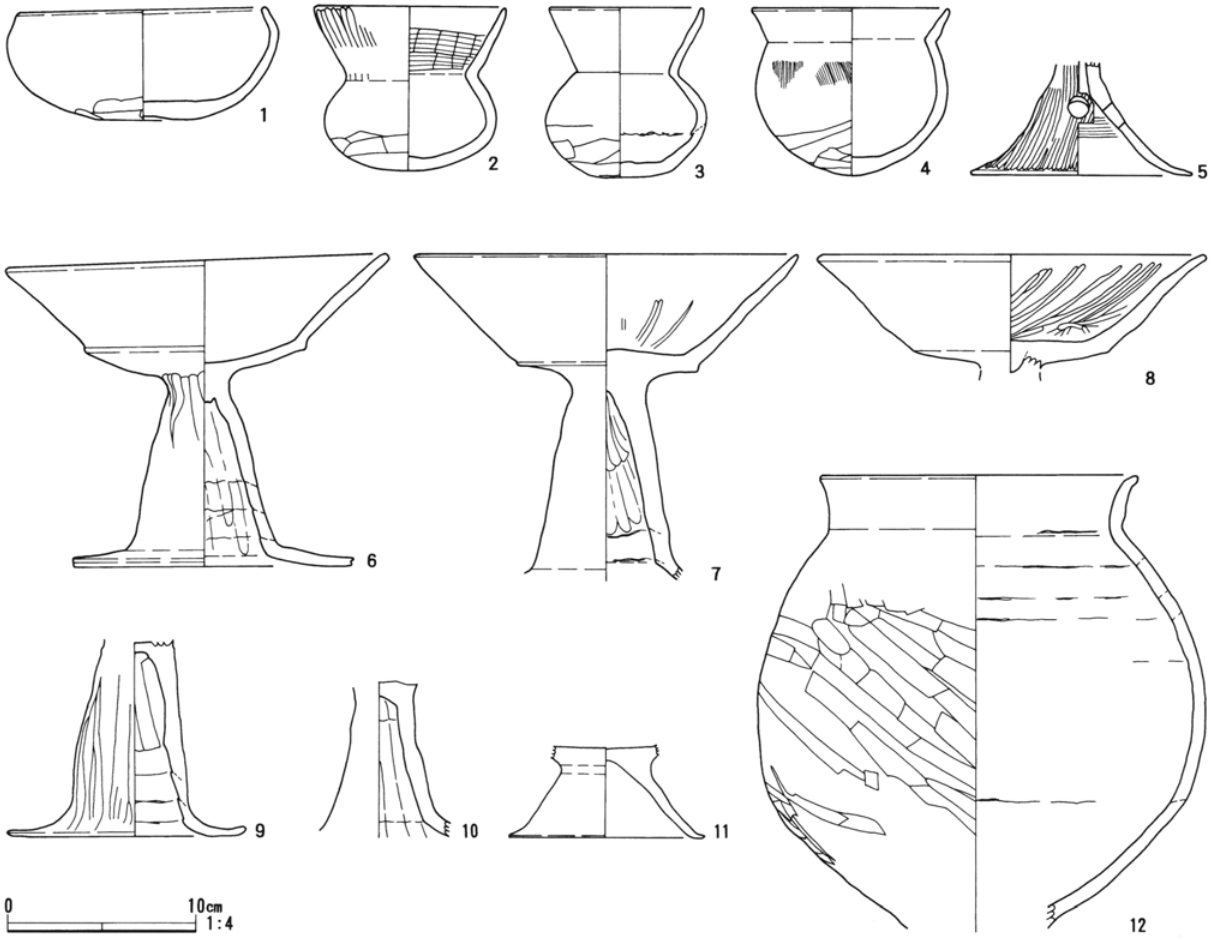


図39　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-09 出土遺物

j．SI-10

遺構［図40］

調査区の西壁際に位置する。大半が調査区外にあり、東隅周辺の1/5程度を検出するにとどまる。平面形、規模、主軸方位、カマドの有無、柱穴の位置などまったく不明である。南東壁際に貯蔵穴状の楕円形の落ち込みを認める。

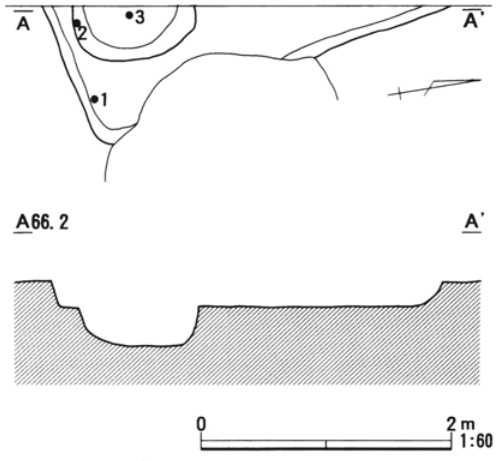


図40　四方田遺跡Ⅱ次調査　SI-10

覆土は単層で、全体にロームブロックを含む黒褐色土が堆積している。壁溝は存在しない。床は貼床層をもたず、ロームを直接床面としている。

南東壁際に貯蔵穴状の落ち込みがあるが、長径96cm、深さ30cmで平面規模の割に深さがなく、貯蔵穴と断定するに至らない。覆土も他と同様である。

遺物［図41、写真27］

床面直上の遺物は南東隅の壁際で出土した完形の土師器坏［1］1点のみである。他に貯蔵穴状の落ち込みで土師器坏［2］、土師器甕［3］を検出している。

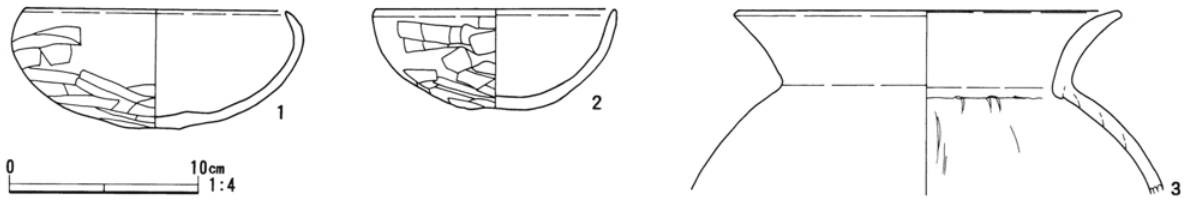


図41　四方田遺跡II次調査　SI-10 出土遺物

SI-10出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 坏	口径 14.0 底径 2.2 器高 6.3	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は内彎する。底部は上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ナデ、部分的にケズリ、底部ケズリ。内面―口縁部・体部ヨコナデ、底部に微妙な凹凸あり。	胎土精良。 内外―明赤褐色	ほぼ完形
2	土師器 坏	口径 12.7 底径 2.1 器高 5.3	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。底部は弱い上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ヨコのケズリ。内面―口縁部磨耗により不明瞭、体部～底部ヨコ、ナナメのナデ。	内外―明赤褐色	3/4
3	土師器 甕	口径 19.8 底径 ― 器高 ―	胴部膨らみを持ち、口縁部は外反する。	外面―口縁部・胴部ヨコナデ。内面―口縁部・胴部ヨコナデ、ヘラ先のノッチ入る。	内外―橙色	口縁部～胴部残存

B　四方田遺跡Ⅲ次調査

1　調査に至る経過

平成５年１月14日、本庄市大字四方田字屋敷前239－３番地の土地244㎡において個人専用住宅建設の開発計画があり、この土地にかかる『埋蔵文化財所在および取扱いについて』の照会が本庄市教育委員会あて提出された。当教育委員会において埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに埋蔵文化財の有無を確認したところ、同地は四方田遺跡（53-077）の範囲に含まれることが明らかとなった。同地はまた昭和61年度に、県営ほ場整備事業の実施に伴い、本庄市教育委員会が調査を行なった四方田遺跡Ⅰ次調査地点の北側に隣接し、また平成４年度に個人住宅の建設に伴い、同じく本庄市教育委員会が調査を実施した四方田遺跡Ⅱ次調査地点の西方に所在することから、これらの調査地点と同様の遺構が連続する可能性が高いと判断された。

本庄市教育委員会では以上の状況をふまえ、事業者あて『埋蔵文化財の所在について』の回答を送付し、

１．照会のあった土地については四方田遺跡（53-077）の範囲内に所在することから現状保存が望ましいこと

２．やむを得ず現状変更を実施する場合は、文化財保護法第57条の２の規定により、文化庁長官あて『埋蔵文化財発掘届』を提出し、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること

３．本回答後は関係機関との協議を徹底すること

の旨を伝達した。

また、上記の回答と同時に、事業主体者と協議をおこなった結果、当該開発予定地にかかる遺跡の範囲確認を目的する試掘調査を実施することとなり、平成５年１月21・22日に現地調査を実施した。

2　調査の方法と経過

今回調査の対象としたのは開発予定地全面の244㎡である。東西方向にA・B２本のトレンチを設定し、小型重機を用いて表土を除去しつつ遺構・遺物の有無を確認した。その結果、現地表から約0.8mの深さで、覆土に古墳時代～平安時代にかけての遺物を包含する河川跡と考えられる遺構を検出した。しかし、河川跡覆土の掘削に及んだ段階から、湧水がいよいよ激しくなり、掘削が1.8mに達した時点で、深さ1.6m付近の砂層からトレンチの壁が崩落を始め、1.8m以下の調査は断念した。また、河川跡覆土の十分な観察も不可能であった。掘削終了後、必要な記録を行い、埋め戻しを行って作業を終了した。

3　調査の成果

河川跡は確認面で幅９～10mを測った。確認面付近の深さから湧水が見られたため、確実な観察はできなかったが、河川跡覆土上面の色調は黒褐色を呈し、砂粒を少量含んでいた。河川跡の覆土は上層には砂層が発達し、砂層下の黒色粘質土層からは土師器片が出土した。土師器片を含む土層は深さ1.3～1.8mの厚さに及び、一定のレベルに集中せず、砂層を挟んで断続的に出土する状況が観察できた。土師器は古墳時代前・中期を中心に、一部８世紀末から９世紀初頭の資料を含んでいる。

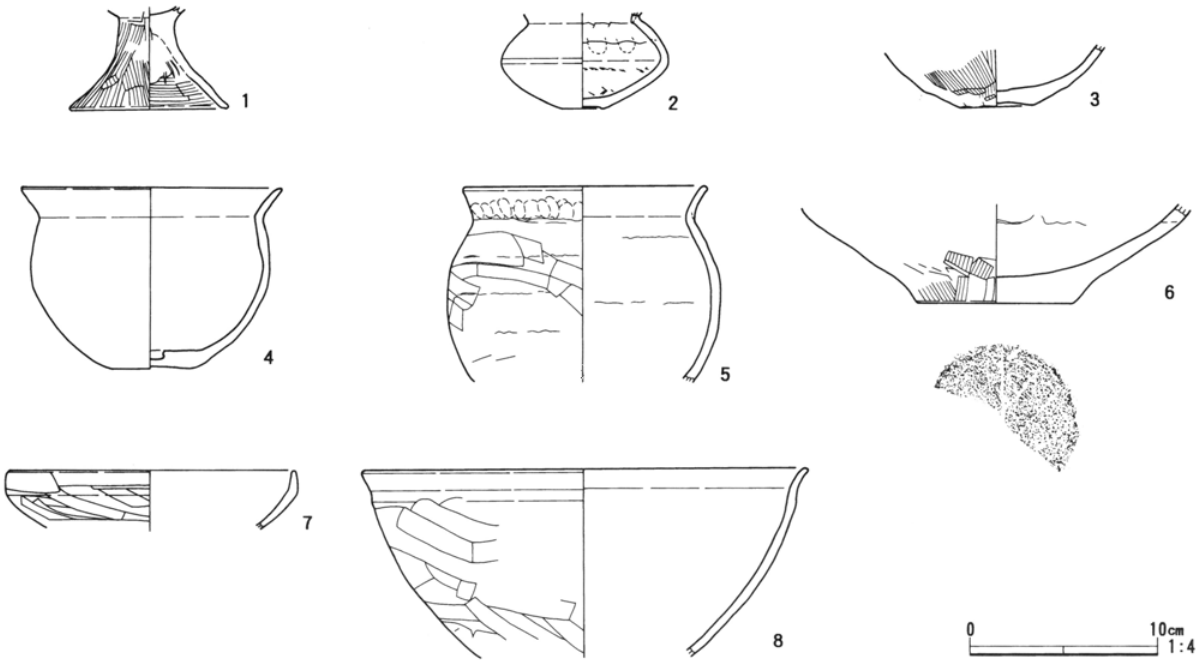


図42　四方田遺跡Ⅲ次調査出土遺物

Ⅲ次調査出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 小型高坏？	口径　— 底径　8.1 器高　—	脚部は「ハ」の字状に開く。	外面—脚部タテのハケ目。内面—上半は剝落、下半ヨコのハケ目。	内外—橙色	脚部残存
2	土師器 坩	口径　— 底径　2.1 器高　—	体部は横に膨らみを持つ、底部はわずかに上げ底。	外面—体部ヨコ、ナナメのナデ、下位にケズリに近い部分あり。内面—指頭による押圧、ヨコナデ、体部下位に放射状、風車状のヘラ痕。	内—橙色 外—明赤褐色	体部残存
3	土師器 坩？	口径　— 底径　3.7 器高　—	体部は丸味を持って立ち上がる。底部は上げ底。	外面—ナナメのハケ。内面—ナナメのナデ。	内—橙色 外—明赤褐色	底部残存
4	土師器 鉢	口径(13.7) 底径　4.6 器高(　9.6)	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部外反気味に開く。底面は微妙に凹む。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部磨耗の為不明瞭。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ナナメのナデ。	内外—橙色	体部～底部 1/3残存
5	土師器 甕	口径(12.9) 底径　— 器高　—	胴部は丸みを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、頸部に輪積痕を一段残し、指頭により圧着。連続指頭圧痕残る。体部ナナメのケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部ヨコ、ナナメのナデ。	内外—橙色	2/3
6	土師器 壺	口径　— 底径(　8.2) 器高　—	胴部は丸みを持って立ち上がる。	外面—胴部ナナメ、タテのハケ、底面木葉痕。内面—胴部ナデ、輪積痕。	内—にぶい橙色 外—橙色	底部・胴部の一部残存
7	土師器 坏	口径(15.0) 底径　— 器高　—	口縁部ほぼ直立する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ。	内外—橙色	1/5
8	土師器 鉢	口径(23.7) 底径　— 器高　—	体部やや丸みを持ち、口縁部と体部の境にかすかな稜を持つ。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ナナメのケズリ。内面—口縁部～体部ヨコのケズリ。	内外—橙色	口縁部・体部の一部残存

C　四方田遺跡Ⅳ次調査

1　調査に至る経過

平成６年６月８日、本庄市大字四方田字屋敷前257－１番地の土地295㎡において個人専用住宅建設の開発計画があり、この土地にかかる『埋蔵文化財所在および取扱いについて』の照会が本庄市教育委員会あて提出された。当教育委員会において埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに埋蔵文化財の有無を確認したところ、この土地は四方田遺跡（53-077）の範囲に含まれることが明らかとなった。同地はまた昭和61年度に、県営ほ場整備事業児玉南部地区の実施に伴い、本庄市教育委員会が調査を行った四方田遺跡Ⅰ次調査区の北側に隣接し、さらに平成４年度に個人専用住宅建設に伴い同じく本庄市教育委員会が調査を実施した四方田遺跡Ⅱ次調査区の西隣に近接することから遺構の存在することが確実視された。

本庄市教育委員会では以上の状況をふまえ、平成６年６月15日付け本教社発第110号にて事業主体者あて『埋蔵文化財の所在について』の回答を送付し、

１．照会のあった土地については四方田遺跡（53-077）の範囲内に所在することから現状保存が望ましいこと

２．やむを得ず現状変更を実施する場合は、文化財保護法第57条の２の規定により、文化庁長官あて『埋蔵文化財発掘届』を提出し、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること

３．本回答後は関係機関との協議を徹底すること

の旨を伝達した。

しかし、他に住宅建設の適地がなく、やむをえず住宅建設部分にかかる約118㎡について、遺跡の記録保存を目的とする発掘調査を実施することとなった。

発掘調査のための手続きについては平成６年10月５日付けで事業主体者から文化財保護法第57条の２第１項の規定による埋蔵文化財発掘の届出が提出され、本庄市教育委員会ではこれを受けて、平成６年10月７日付け本教社発第226号にて同届出を埼玉県教育委員会あて進達するとともに、文化財保護法第98条第１項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を埼玉県教育委員会を経由して文化庁長官あて提出した。

これに対し、平成６年11月７日付け教文第３－403号にて埼玉県教育委員会から『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知があり、本庄市教育委員会ではこれを受けて、平成６年11月18日付け本教社発第208号にて事業主体者あて伝達した。

現地での発掘調査は、本庄市教育委員会が調査主体となり、平成６年10月12日から平成６年12月22日までの期間で実施した。

2　調査の方法と経過

a．調査の方法

今回調査の対象としたのは開発申請地のうち2棟の住宅建設にかかる計90㎡である。当該部分には隣地におけるII次調査によって住居跡の存在が予測されており、現地表から遺構確認面までは約50～80㎝を測ることが知られていた。また、遺構確認面の上層には遺物包含層が発達していることが判明していた。このため、当初から人力によって遺物を検出しつつ、表土除去、遺構確認の作業を行った。記録については国土座標系により遺構平面図・遺物分布図1/20、遺物出土状況1/10で行ったほか、必要な写真の撮影を実施した。

b．調査の経過

調査は平成6年10月12日から平成6年12月22日にかけて実施した。以下、日付を追って調査の経過を記すこととする。なおこの間、土・日曜日、祭日は休日とし、雨天の場合も作業を中止した。

10月12日(水)　調査区の設定、調査区周りの囲柵作業、機材収納用テントの設営などを行う。

10月13日(木)　母屋建設部分をA区、離れ建設部分をB区とし、B区から調査に入る。人力による調査区の表土除去作業とともに遺構確認作業を行う。II次調査区と異なり表土は客土であったため遺物出土はきわめて少量にとどまる。

10月14日(金)　表土除去作業を午前中に終了。表土下にはII次調査区と同様の遺物包含層が所在することから、遺物を取り上げつつ遺構確認の作業を継続。

10月17日(月)　前週に続き、包含層の遺物を取り上げつつ遺構確認作業を継続。

10月18日(火)　遺構確認作業を継続し、夕方までに終了。B区では最終的に住居跡3軒(SI-11～13)を確認。SI-12・13覆土の調査を開始。

10月19日(水)・20日(木)　SI-12・13覆土の調査を継続。

10月21日(金)　雨天のため作業中止。

10月24日(月)　SI-12・13覆土の調査を継続。新たにSI-11覆土の調査を開始。

10月25日(火)　SI-12覆土の調査を終了。SI-13の覆土の調査に集中し、夕方までに遺物の検出を終了。

10月26日(水)　SI-11覆土の調査を継続。

10月27日(木)　SI-11覆土の調査を継続。夕方までにほぼ遺物の検出を終了。

10月28日(金)　SI-11午前中、遺物の検出作業。午後、SI-11～13の遺物出土状況写真撮影。

10月31日(月)　SI-11～13遺物出土状況実測および遺物取り上げ。並行して土層分割、土層断面実測、土層注記を実施。夕方までに終了。

11月1日(火)　SI-11～13床面検出作業および床面検出状況写真撮影。午後、掘り方の調査を開始。

11月2日(水)　SI-11～13掘り方の調査を継続。

11月4日(金)　作業中止。

11月7日(月)　SI-11～13検出状況及び調査区全体写真撮影。午後、遺構平面実測、レベリング作業を行いB区の調査を終了。

11月8日(火)　A区の調査を開始。B区での調査結果から、表土の除去には小型重機を導入し、表

土下の遺物包含層直上まで掘削を行う。並行して、遺物包含層の調査と遺構確認作業を実施。

11月９日(水)　表土除去、遺物包含層調査、遺構確認の作業を継続。

11月10日(木)　表土除去、遺物包含層調査、遺構確認の作業を継続。夕方までに表土除去作業を終了。

11月11日(金)　遺物包含層調査、遺構確認の作業を継続。

11月14日(月)　遺物包含層調査、遺構確認の作業を継続、夕方までに終了。住居跡５軒(SI-14～18)を確認。

11月15日(火)　攪乱、ピットの調査。

11月16日(水)　SI-17・18覆土の調査を開始。

11月17日(木)　SI-17・18覆土の調査を継続。SI-17カマド精査。

11月18日(金)　SI-17・18覆土の調査を継続。午前中にSI-18の調査を終了。

11月21日(月)　SI-17覆土の調査を継続、午前中に終了。午後、SI-17・18遺物出土状況写真撮影。

11月22日(火)　SI-17・18遺物出土状況実測および遺物取り上げ。並行して土層分割、土層断面実測、土層注記を実施。夕方までに終了。新たにSI-14覆土の調査を開始。

11月24日(木)　SI-17・18床面検出作業および床面検出状況写真撮影。SI-14覆土の調査を継続。新たにSI-15覆土の調査を開始。

11月25日(金)　SI-17・18掘り方の調査。SI-14・15覆土の調査を継続。SI-14カマド精査。

11月28日(月)　SI-17・18掘り方、SI-14・15覆土の調査、SI-14カマド精査。午前中に終了。

11月29日(火)　SI-17・18掘り方の調査を継続。SI-14・15覆土の調査、午前中に終了。午後、遺物出土状況写真撮影。

11月30日(水)・12月１日(木)　SI-14・15遺物出土状況実測および遺物取り上げ。並行して土層分割、土層断面実測、土層注記を実施。

12月２日(金)　SI-17・18掘り方完掘状況写真撮影。SI-14・15遺物取り上げを継続、午前中に終了。

12月５日(月)　SI-14・15床面検出作業。新たにSI-16覆土の調査を開始、夕方までに終了。

12月６日(火)　SI-14・15床面検出作業を継続。SI-16遺物出土状況実測および遺物取り上げ。並行して土層分割、土層断面実測、土層注記を実施。

12月７日(水)　SI-14・15床面検出状況写真撮影。SI-16床面検出作業。貯蔵穴を検出。

12月８日(木)　SI-14・15掘り方の調査。SI-16床面検出作業を継続。貯蔵穴の調査を開始。

12月９日(金)　SI-14・15掘り方の調査を継続。SI-16床面検出状況写真撮影。

12月12日(月)　SI-14・15掘り方検出状況写真撮影。SI-16掘り方の調査。

12月13日(火)　SI-16掘り方の調査。一部の出土遺物を搬出。

12月14日(水)　SI-16検出状況写真撮影。調査区壁面の土層断面実測。

12月15日(木)　午前中、調査区全体写真撮影。午後、遺構平面実測を開始。

12月16日(金)～12月20日(火)遺構平面実測を継続。この間に発掘機材、出土遺物を搬出。

12月21日(水)　調査区全面のレベリング作業。基準杭の抜去。

12月22日(木)　機材収納用テントの解体、囲柵の撤去を行いすべての作業を終了。

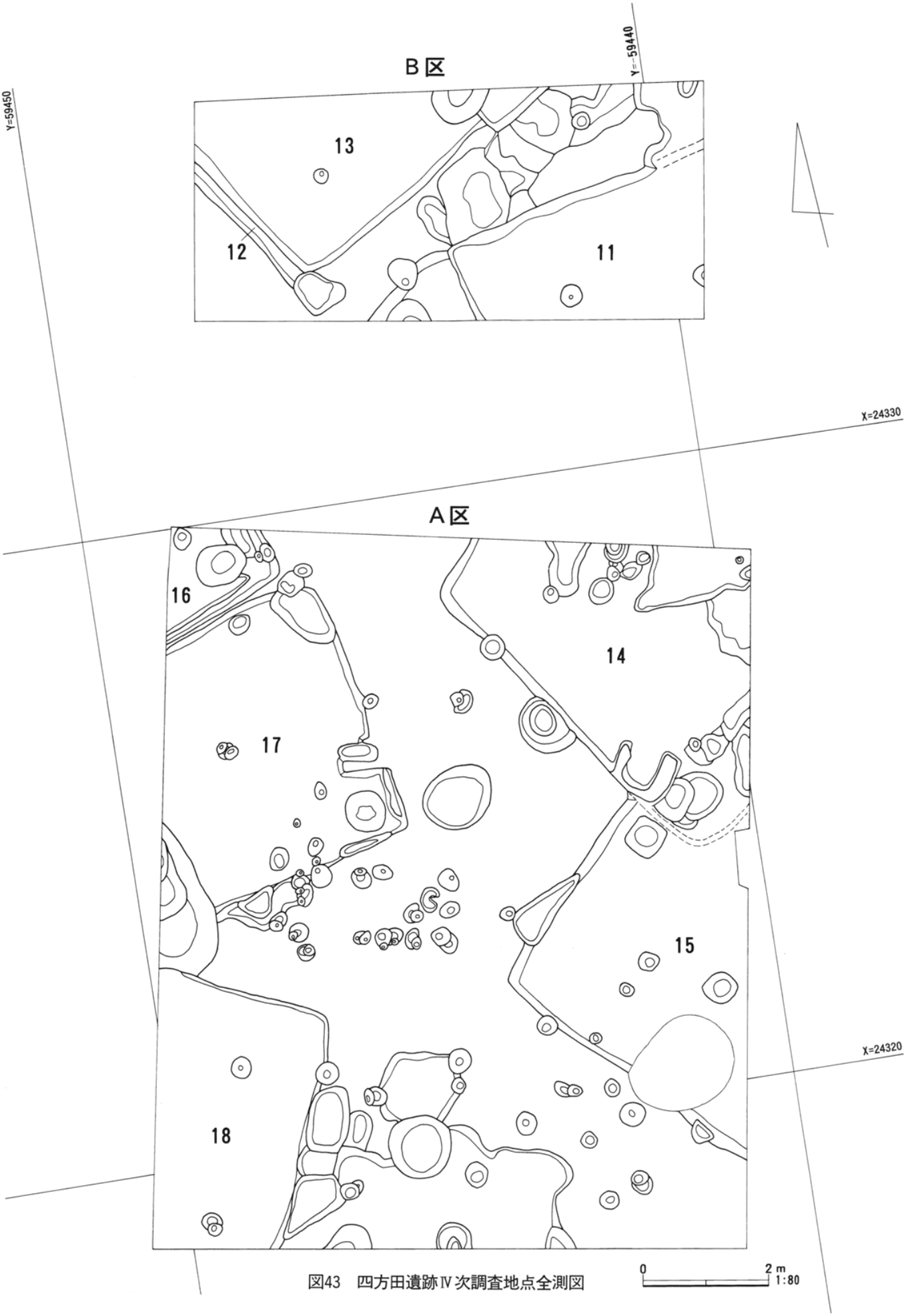


図43　四方田遺跡Ⅳ次調査地点全測図

3　調査の成果

Ⅳ次調査で検出した住居跡は８軒である。Ａ区で５軒、Ｂ区で３軒を確認している。南側のＩ次調査地点や東側のⅡ次調査地点で検出した住居跡群に連続して同一の集落跡を形成するものと推測される。さらに、Ｉ次調査地点の南方には広範に古墳時代中期の土師器片の散布が見られ、Ⅱ次調査地点の東方においても地面の掘削時などに同様の時期の土師器片の出土を見ることから、周囲には比較的大規模な古墳時代中期の集落が展開していると考えられる。

Ⅳ次調査はＡ・Ｂ区とも対象範囲が狭く、また住居跡は相互の切り合いも顕著で、全体の形状の判明する住居跡はない。遺物を伴い時期の明らかな住居は、一定の時間幅は認められるものの、すべて古墳時代中期に該当する。２軒の住居跡にはカマドが、３軒の住居跡には貯蔵穴が伴う。カマドはいずれも東寄りの壁と南寄りの壁に付くものがある。

ａ．SI-11

遺構［図44、写真11・12］

Ｂ区の南東隅に位置する。北西壁側を中心に全体の１/３程度を検出した。平面形は比較的角の明瞭な方形を呈する。規模は不明ながら、検出された北西壁と並行に仮の軸線をとれば、主軸方位はＮ―65°―Ｅを示す。

覆土は単層で、ロームブロックを含む黒褐色土が堆積している。貼床をもたず、ローム面をそのまま床面とし、壁溝も存在しない。

カマドや炉は検出されず、存在する場合は調査区外にあると考えられる。

ピットは２個を検出し、うちＰ１は主柱穴である。形態は円形で、深さは63cmを測る。ロームブロックを含む黒褐色土が堆積し、柱跡、裏込めは確認できない。

遺物［図45、写真28］

床面直上の遺物はわずかで、土師器坏［１］がＰ１付近で、土師器坏［２］が調査区東壁際で出土

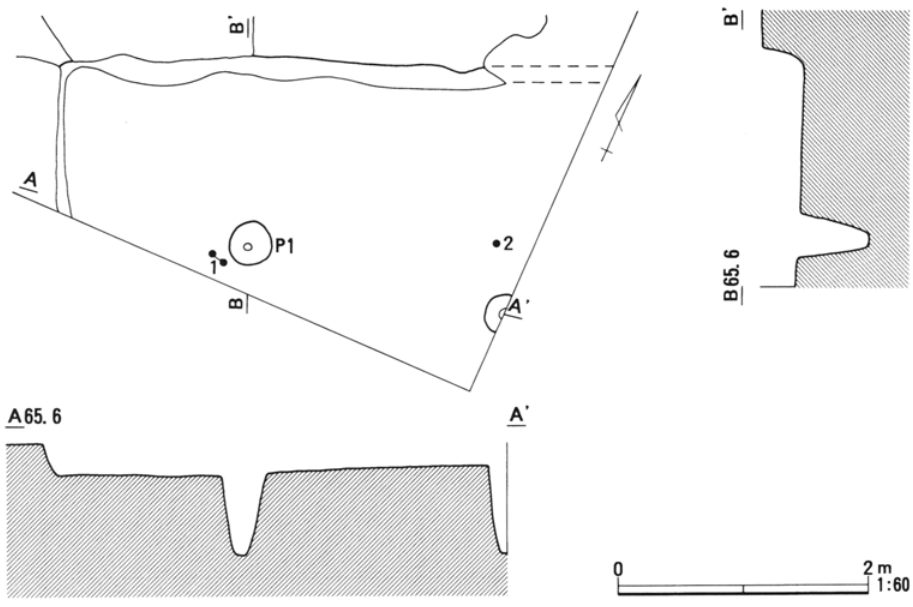


図44　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-11

した。土師器坏［1］は完形に近く本住居跡に伴うものであろう。土師器坏［2］は典型的な坏蓋模倣坏で、遺存状態から混入の可能性が考えられる。

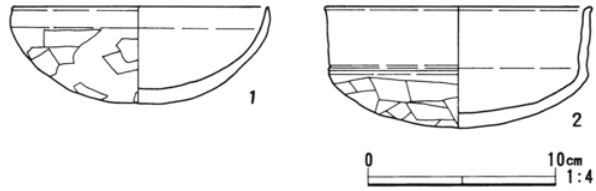


図45　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-11 出土遺物

SI-11出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器坏	口径 13.5 底径　— 器高　5.1	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部内わずかに内彎する。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ナナメヨコナデ。内面—口縁部～体部ヨコナデ。	内外—明赤褐色	口縁部一部欠損
2	土師器坏	口径(14.1) 底径　— 器高(6.4)	口縁部と体部との境に稜を持ち、口端部に平坦面、外稜わずかに突出する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面—ヨコナデ。	内外—明赤褐色	1/2

b．SI-12

遺構［図46、写真12］

Ｂ区の北西隅に位置する。大半がSI-13と重複し、南西壁際の一部が残るのみである。当初、SI-13とともに単一の住居跡との認識で調査を進めたが、床面レベルで明瞭な段差があり、最終的に個別の住居跡と認定した。平面形、規模、主軸方位、カマドの有無、柱穴の位置などは不明である。

覆土は単層で、ロームブロックを含む黒褐色土が堆積しているが、SI-13との切り合い関係は判別できない。

貼床をもたず、ローム面をそのまま床面とし、壁溝も存在しない。カマドや炉は検出されず、存在する場合は調査区外にあると考えられる。ピットも確認できなかった。

遺物

遺物は覆土中から土師器坏•甕などの小片を検出しているが、SI-13との切り合い関係が判別できていないために、帰属を確認できない。

c．SI-13

遺構［図46、写真12］

先のSI-12とともにＢ区の北西隅に位置する。南隅を中心に全体の1/3程度を検出した。平面形は隅丸方形を呈する。規模は不明ながら、検出された南東壁と並行に仮の軸線をとれば、主軸方位はN—55°—Eを示す。

覆土は単層で、ロームブロックを含む黒褐色土が堆積している。床面は平坦で、貼床をもたず、ローム面をそのまま床面とし、壁溝も存在しない。

カマドもしくは炉は検出されず、存在する場合は調査区外にあると考えられる。

調査区北壁際の床面に、貯蔵穴の可能性がある不整円形の落ち込みを確認しているが、掘り込みが浅く、遺物を伴わず、覆土も他と同様であることから貯蔵穴としての性格は確定できない。

ピットは1個を検出した。主柱穴と考えられる。形態は円形で、深さは50cmを測る。ロームブロッ

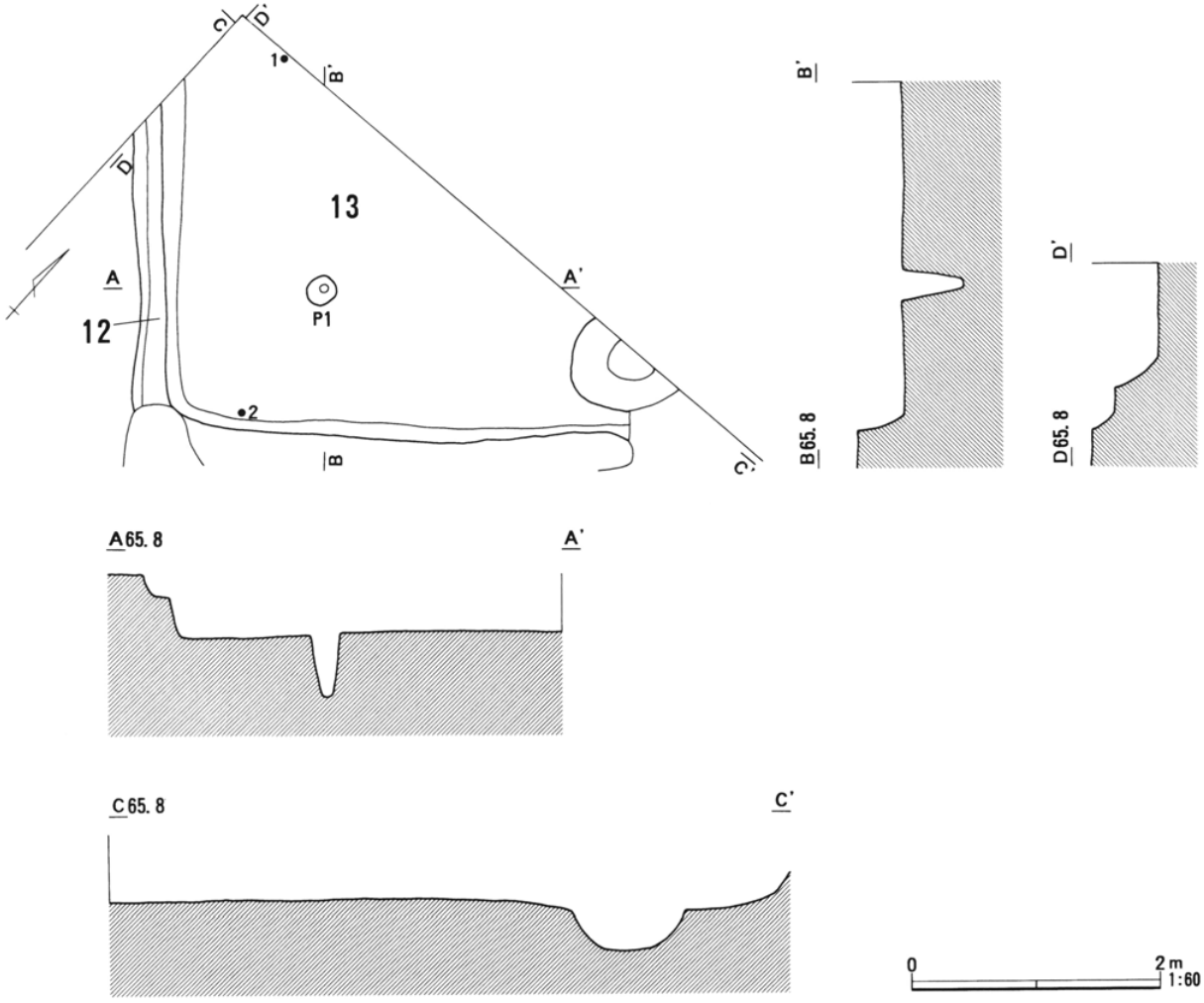


図46　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-12・13

クを含む黒褐色土が堆積し柱跡、裏込めは確認できない。

なお、SI-12とは軸線を並行し、南東壁を共有するように見られることから、前後関係は不明ながら、SI-12・13は先行する住居跡の一部を利用した建て替えによる重複と考えられる。

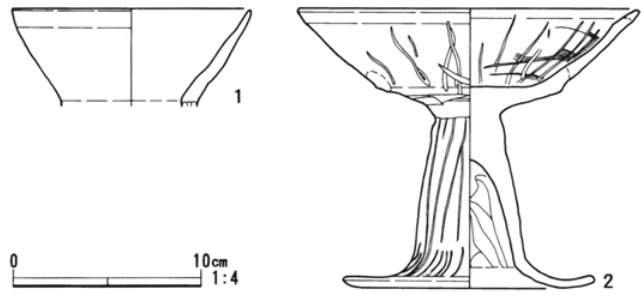


図47　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-13 出土遺物

遺物［図47、写真28］

床面直上の遺物はわずかで、土師器坩の口縁部［1］が調査区北西隅で、土師器高坏［2］が南東壁際で出土した。土師器坩［1］は口縁部のみで、混入の可能性が考えられる。土師器高坏［2］も脚部を欠損し、本住居跡への帰属は微妙である。

SI-13出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 坩	口径 12.6 底径 — 器高 —	口縁部外反気味に開き、端部やや内彎する。	内外面とも磨耗しており殆ど不明瞭。	内外—橙色	口縁部3/4残存
2	土師器 高坏	口径 18.3 底径 11.5 器高(14.8)	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。柱状部膨らみ持ち、裾部広がる。	外面—口縁部～坏部中位ヨコナデ坏部下位ヨコナデ後暗文様のミガキ底部ヨコ、ナナメのナデ、柱状部タテナデ、ミガキ後暗文様のミガキ。裾部ヨコナデ。内面—坏部ヨコナデ後暗文様のミガキ、部分的に細かなハケメ、裾部ヨコナデ。	内外—橙色	脚部1/2欠損。内面に炭化物付着。

d．SI-14

遺構［図48～51、写真14～16］

A区の北東隅に位置する。南西側を中心に全体の1/2近くを検出した。南隅周辺はSI-15と重複する。平面形はやや不整な隅丸方形を呈し、規模は南西壁側でおよそ6mを測る。主軸方位はS—50°—Wを示す。南西壁の南隅寄りにカマドを備える。

覆土は単層に近く、ロームブロックを含む黒褐色土が厚く堆積しているが、南東壁際の床面には炭化物ブロックと木灰を多量に含む黒色土が見られる。

床は中央のロームを方台状に掘り残し、壁に沿って周り掘り込んだ後、多量のロームブロックと少量の白色粘質土、炭化物、焼土などのブロックを含む暗褐色土や黒褐色土を敷き込んで貼床を形成している。床の中央はロームをそのまま床面としている。床面はおおよそ平坦で、全体に硬化が顕著である。壁溝は存在しない。

カマドは南西壁の中央から南隅に寄った位置に付設されている。完全な造り付けカマドで、壁内への掘り込みをもたない。カマドは黒褐色土に白色粘質土や焼土の細かなブロックを混合した土を用いて構築している。比較的良好な遺存状態を保っていたが、土器片、石材などの構築材の使用や臼玉などを用いた祭祀の痕跡は認められなかった。なお、これまで四方田遺跡で検出されているカマドは、

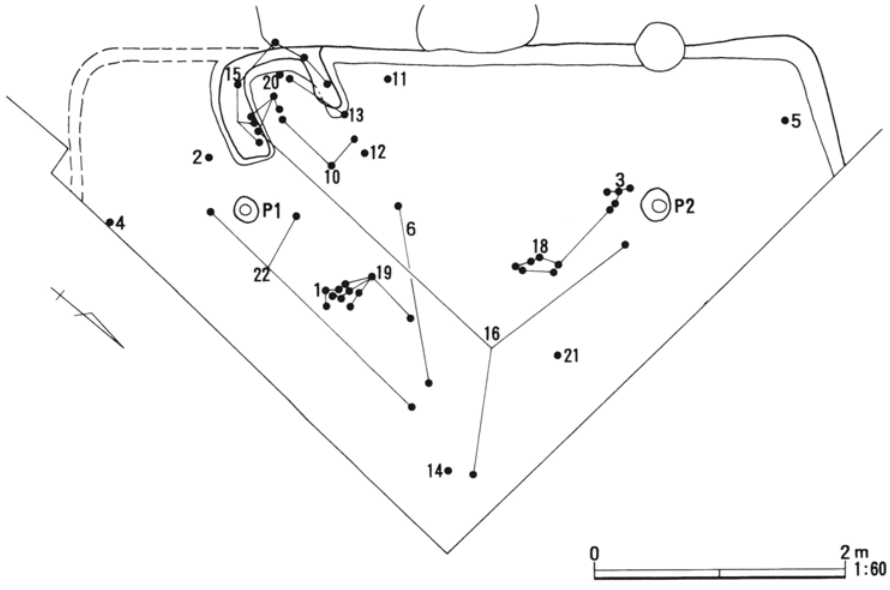
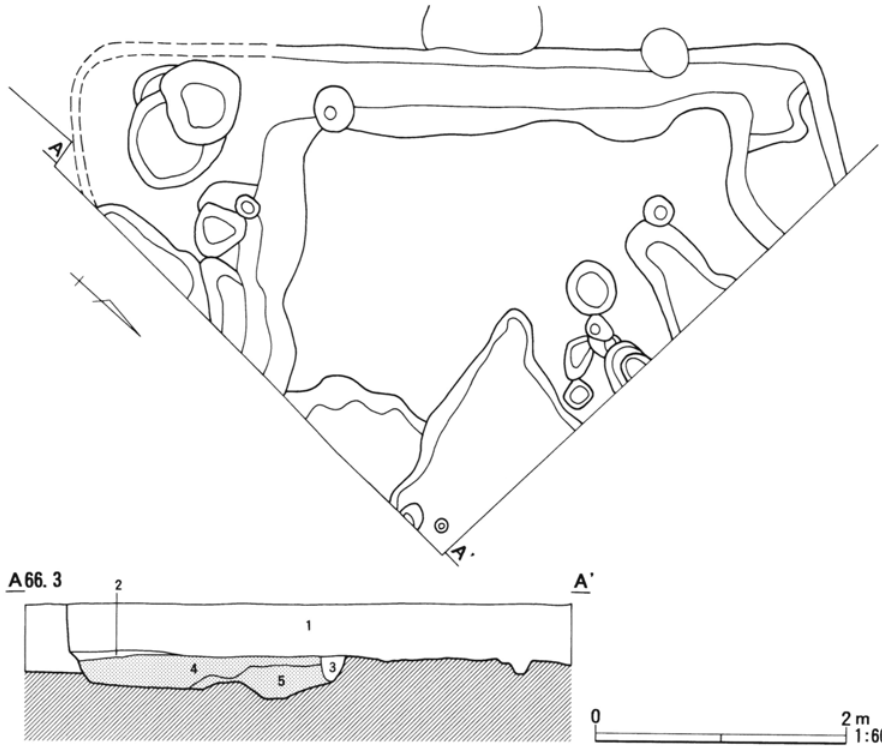


図48　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-14 床面



SI-14 土層説明

1　黒褐色土　ロームブロック（径１～５㎜）を少量含む。
2　黒　色　土　炭化物ブロック（径１～５㎜）、木灰を多量に含む。
3　黒　色　土　ロームブロック（径１～５㎜）を少量含む。
4　暗褐色土　ロームブロック（径１～５㎜）を多量に含み、炭化物ブロック（径１～５㎜）、焼土ブロック（径１～５㎜）を少量含む。しまり強。貼床層。
5　黒褐色土　ロームブロック(径１～５㎜)を多量に含み、白色粘土ブロック(径１～５㎜)、炭化物ブロック（径１～３㎜）、焼土ブロック（径１～３㎜）を少量含む。しまり強。貼床層。

図49　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-14 掘り方

SI-14出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 坏	口径 12.4 底径 2.2 器高 7.0	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。底部は平底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部上位～中位ナナメのナデ､下位ケズリ。内面―口縁部～底部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	口縁部一部欠損
2	土師器 坏	口径 10.3 底径 2.8 器高 4.1	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は外傾する｡底部は上げ底。	外面―口縁部～体部上位ヨコナデ中位～底面ヨコ､ナナメのケズリ。内面―ヨコ、ナナメのナデ。部分的にナナメの弱いミガキ。	内外―明赤褐色	完形
3	土師器 坏	口径 14.0 底径 3.1 器高 5.0	体部は浅めで上位に膨らみを持つ。口縁部は外傾する。底部上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部上位下調整のタテハケ、下位不規則なヨコケズリ｡内面―口縁部ナナメ、ヨコのハケ、体部ヨコナデ、底部ケズリ。	内外―明赤褐色	口縁部一部欠損
4	土師器 坏	口径 10.6 底径 3.6 器高 6.6	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は短く外傾する。底部は上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部上位～中位ヨコ、ナナメのナデ、下位～底部ケズリ。内面―口縁部・体部ヨコナデ。	内―にぶい橙色 外―橙色	口縁部一部欠損
5	土師器 坏	口径 11.2 底径 3.4 器高 6.5	体部は膨らみを持ち、口縁部は短かく外傾する。底部は上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ケズリ。内面―口縁部～体部中位ヨコナデ、下位～底部ヨコ、ナナメのナデ。	内外―明赤褐色	一部欠損
6	土師器 坏	口径 12.2 底径 3.5 器高 6.7	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反する。底部は凹凸ある上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部上位タテ、ナナメのナデ、中位～下位ケズリ。内面―口縁部～体部ヨコナデ、底部ケズリ。	内外―橙色	4／5

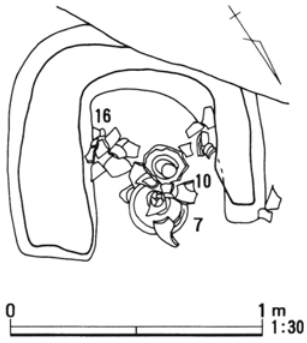


図50　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-14 カマド遺物出土状況

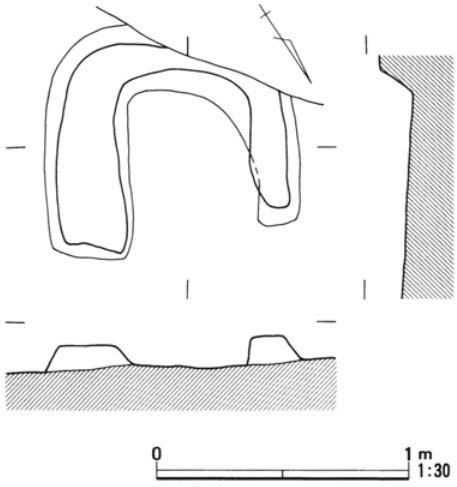


図51　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-14 カマド

Ⅰ次調査地点も含めほとんどが東ないし北東側の壁に付く例が一般的であるが、南西壁に付く本住居の場合は異例である。貯蔵穴は確認できていない。

ピットは床面で２個を検出した。いずれも主柱穴である。形態は楕円形ないしは歪んだ円形で、深さはＰ１が20cm、Ｐ２が25cmを測る。ロームブロックを含む黒色土が堆積し柱跡、裏込めは確認できない。

掘り方は中央のロームを台状に掘り残し、周りを深く掘り込んでいる。南東壁に沿う掘り方にはさらに不整形の落ち込みが重複している。また、中央の方台状のローム掘り残しにも、不整形の土坑・ピット状の浅い落ち込みが散在している。

遺物［図52・53、写真28・29］

床面直上の遺物は、中央部に集中するほか、カマド周辺でまとまって検出している。遺物量は多いが、欠損品が多い。完形品はカマド左袖付近で出土した土師器坏［２］のみである。

SI-14出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
7	土師器 高坏	口径 17.0 底径 14.0 器高 12.7	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部は中位に膨らみを持ち、裾部広がる。	外面―口縁部ヨコナデ、坏部下調整のハケメ後ヨコナデ、柱状部タテナデ。内面―口縁部ヨコナデ、坏部ヨコ、ナナメのハケメ調整後暗文様のミガキ。柱状部ナナメのケズリ、裾部ヨコナデ。	内―橙色 外―明赤褐色	脚部１/３欠損
8	土師器 高坏	口径 20.3 底径 ― 器高 ―	坏部下位に稜を持つ。口縁部は外反気味に開く。	外面―口縁部～坏部ヨコナデ、坏底部タテ、ナナメのナデ。内面―口縁部～坏部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	脚部欠損
9	土師器 高坏	口径 17.5 底径 ― 器高 ―	坏部下位に稜を持ち、口縁部ほぼ直線的に開く。	外面―口縁部～坏部ヨコナデ、坏底部ヨコ、ナナメのナデ。内面―坏部放射状のナデ。	内外―明赤褐色	脚部欠損。内面に炭化物付着。
10	土師器 高坏	口径 17.8 底径 ― 器高 ―	坏部下位に稜を持ち、口縁部はほぼ直線的に開く。	外面―口縁部～坏部ヨコナデ。 内面―口縁部～坏部ヨコナデ。	内―明赤褐色 外―橙色	坏部３/４残存
11	土師器 高坏	口径 20.0 底径 ― 器高 ―	坏部下位に稜を持ち、口縁部はほぼ直線的に開く。	外面―口縁部～坏部ヨコナデ。 内面―口縁部～坏部ヨコナデ。	内―にぶい赤褐色 外―明赤褐色	坏部２/３残存
12	土師器 高坏	口径 13.8 底径 ― 器高 ―	坏部下位には明瞭な稜を持たず、口縁部は外反気味に開く。	外面―口縁部～坏部上位ヨコナデ中位～底部タテ、ナナメのナデ。内面―ヨコナデ、局所的にナナメのミガキに近い調整。	内外―明赤褐色	脚部欠損。器台の可能性もある。
13	土師器 鉢	口径(15.5) 底径 ― 器高 ―	胴部あまり膨らみを持たず、口縁部は内彎しつつ開く。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、ナナメのナデ。内面―口縁部～胴部ヨコナデ。	内―赤褐色 外―明赤褐色	胴部破片

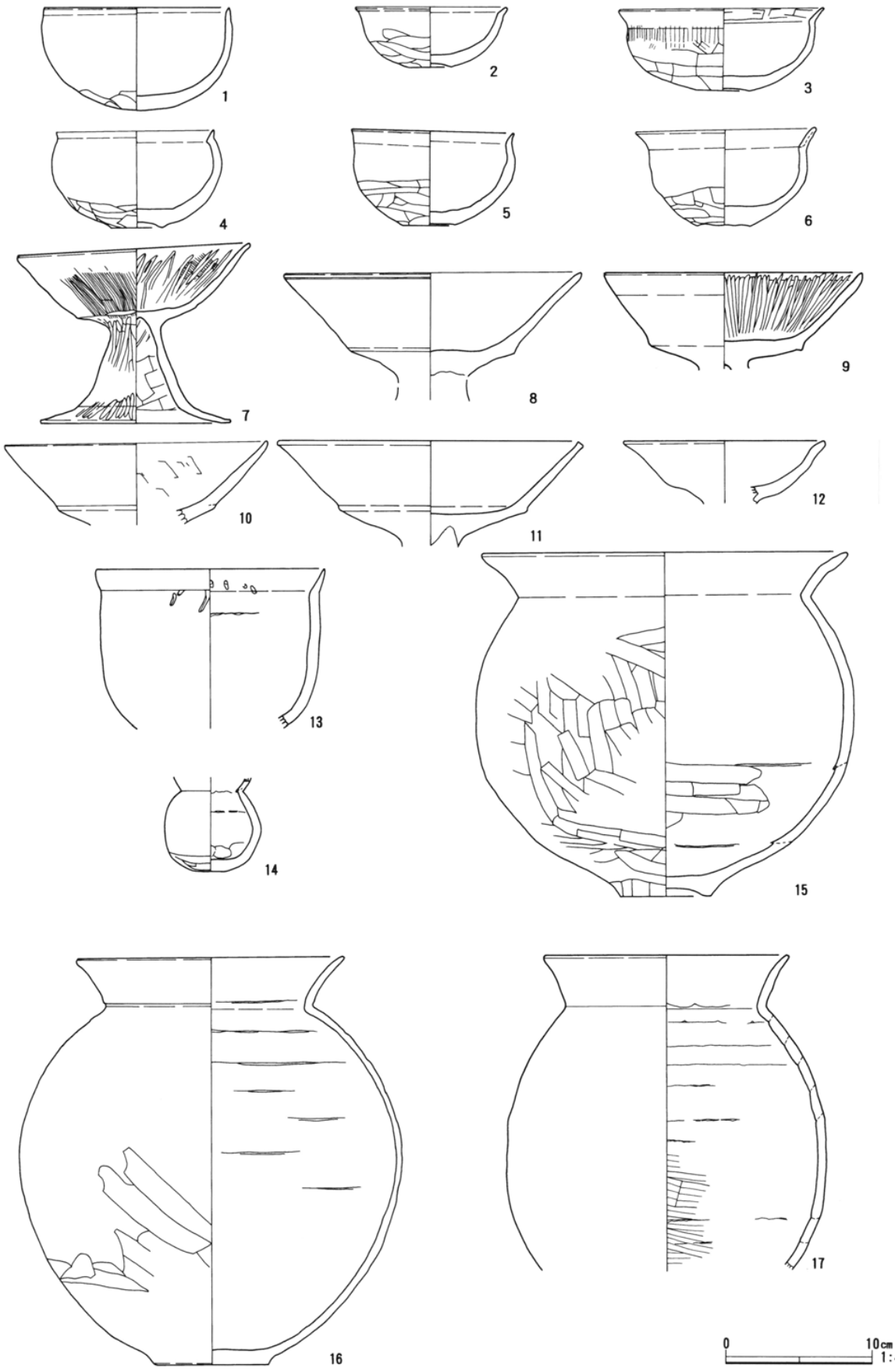


図52　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-14 出土遺物(1)

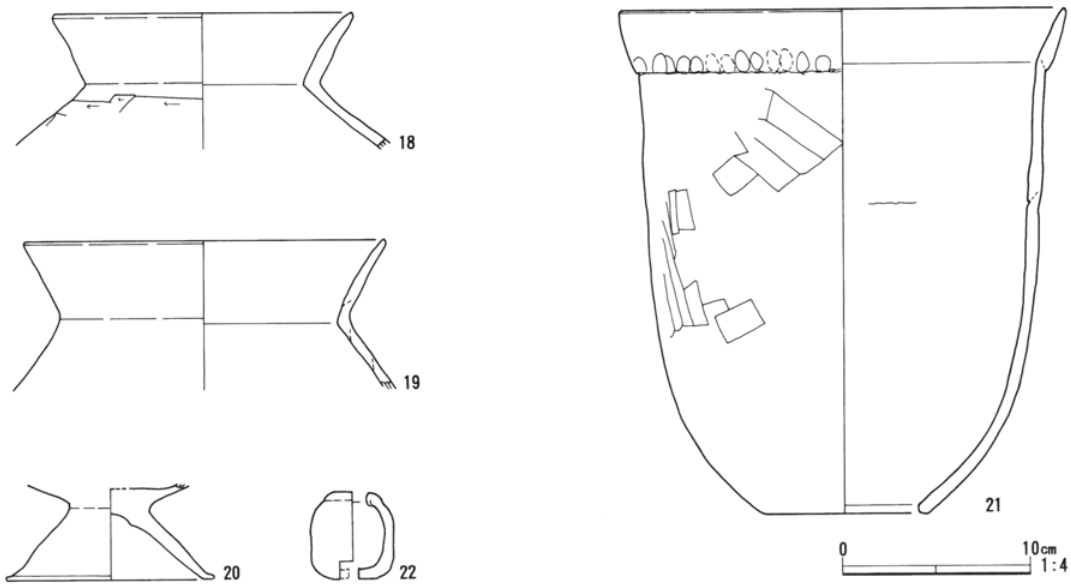
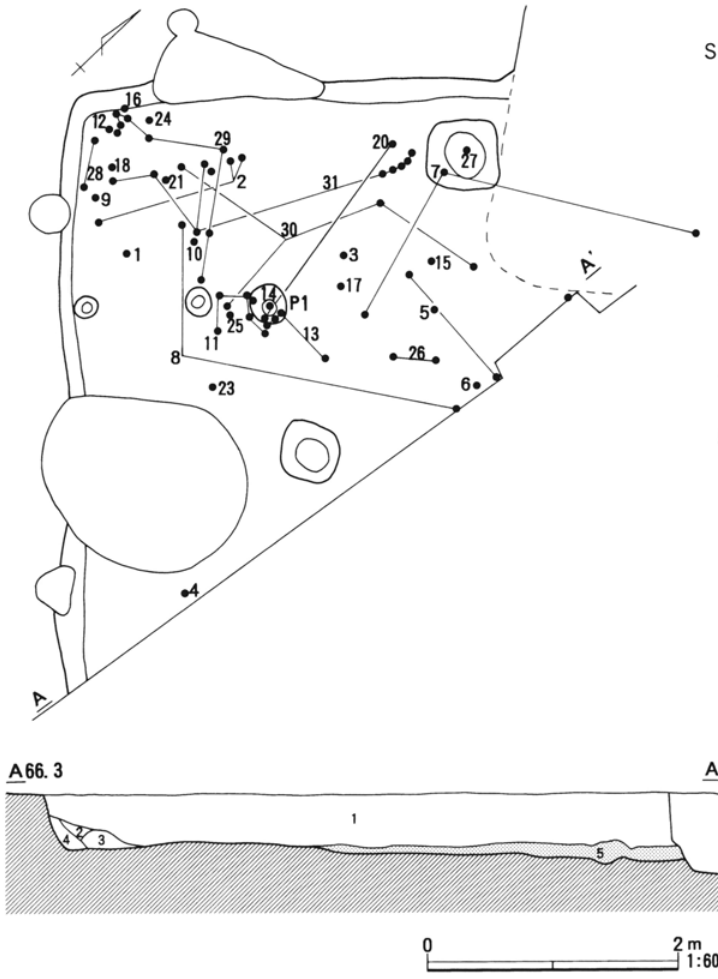


図53　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-14 出土遺物(2)

SI-14出土遺物観察表(3)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
14	土師器 坩	口径　— 底径　2.2 器高　—	体部中位に膨らみを持ち、口縁部は内彎気味に開く。底部は平底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部上位～中位ヨコ、ナナメのナデ、下位～底部ヨコ、ナナメのケズリ。 内面—口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、指頭圧痕。	内外—橙色	2/3
15	土師器 甕	口径(24.6) 底形(6.2) 器高(23.3)	胴部中位に膨らみを持ち、口縁部は外反する。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部タテ、ナナメのケズリ、底部ヨコのケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、ナナメのナデ、ケズリ。	内—明赤褐色 外—赤褐色	1/4
16	土師器 甕	口径(18.0) 底径　7.8 器高 27.7	胴部中位に膨らみを持ち、口縁部は外反する。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ナナメのナデ、中位ナナメのケズリ、下位ヨコ、ナナメのナデ、底面ケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヨコナデ。	胎土精良。 内外—明赤褐色	2/3
17	土師器 甕	口径 16.5 底径　— 器高　—	胴部膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ヨコナナメのナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ナナメのナデ。	内—明赤褐色 外—橙色	1/4
18	土師器 甕	口径 15.8 底径　— 器高　—	口縁部は外反気味に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ヨコ、ナナメのナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、ナナメのナデ。	内外—橙色	口縁部4/5残存
19	土師器 甕	口径(19.0) 底径　— 器高　—	口縁部は外反気味に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ヨコ、ナナメ、タテのナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ヨコ、ナナメのナデ。	内外—明赤褐色	口縁部1/2残存。片岩の粉末含む。
20	土師器 高坏	口径　— 底径 11.0 器高　—	脚部わずかに膨らみを持ち、「ハ」の字状に開く。	外面—坏部底部ナナメのナデ、脚部ヨコナデ。内面—脚部ヨコナデ。	胎土精良。 内—明赤褐色 外—にぶい赤褐色	脚部残存。時期的に異なる可能性もある。
21	土師器 甑	口径(23.5) 底径　8.6 器高 26.8	胴部わずかに膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、頸部指頭圧痕、胴部ナナメ、タテのナデ、下位磨耗により不明瞭。内面—口縁部～胴部ヨコ、ナナメのナデ(磨耗著しい)。	内—赤褐色 外—明赤褐色	1/4
22	土師器 (ミニチュア土器)	口径(2.0) 底形(2.3) 器高　4.5	全体に長胴の無頸壺のような形態で、口縁部がやや突出し、肥厚する。底部は穿孔されている可能性がある。	外面—ナナメの不規則なナデ。部分的に細かな切傷のような調整痕。内面—指押え。	内—にぶい褐色 外—橙色	1/2。土器以外の器具もしくは模倣品の可能性もある。



SI-15 土層説明

1　黒褐色土　ロームブロック（径1㎜±）を少量含む。

2　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）を少量含み、炭化物ブロック（径1～2㎜）、焼土ブロック（径1～3㎜）を多量に含む。

3　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）を少量含み、白色粘土ブロック（径1～5㎜）を多量に含む。

4　暗黒色土　ロームブロック（径1～5㎜）を多量に含む。

5　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）を多量に含み、炭化物ブロック（径1～5㎜）を少量含む。しまり強。貼床層。

図54　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-15

e．SI-15

遺構［図54、写真17・18］

A区の東壁側に位置する。半分以上が調査区外にあって、住居跡の西隅側1/3程度を検出したにとどまった。北側はSI-14との重複によって失っている。平面形は比較的角の明瞭な方形を呈すると思われるが、規模、主軸方位ともに不明である。調査の範囲内では、カマドを確認できていない。

覆土は2層に大別され、壁際には部分的にロームと白色粘質土、炭化物、焼土の細かなブロックを含む黒褐色土ないし暗褐色土が堆積している。床面は全体にロームブロックを含む黒褐色土で被覆されている。

床には中央に緩やかな窪みが存在し、この部分に多量のロームブロックと少量の炭化物ブロックを含む黒褐色土を敷き込んで貼床を形成している。他の部分はロームをそのまま床面としている。床面はおおよそ平坦で、全体に硬化が顕著である。壁溝は存在しない。

カマドは検出されず、存在する場合は調査区外にあると考えられる。

北西壁際のSI-14との境界近くに貯蔵穴状の土坑を検出した。隅丸方形を呈する平面形や、位置的な問題から、貯蔵穴と断定するに至らない。平面形は隅丸方形を呈し、一辺50cm、床面からの深さ30cmを測る。底面は平坦で径35cmの円形を呈する。覆土には細かなロームブロックを含む黒色土が堆積し

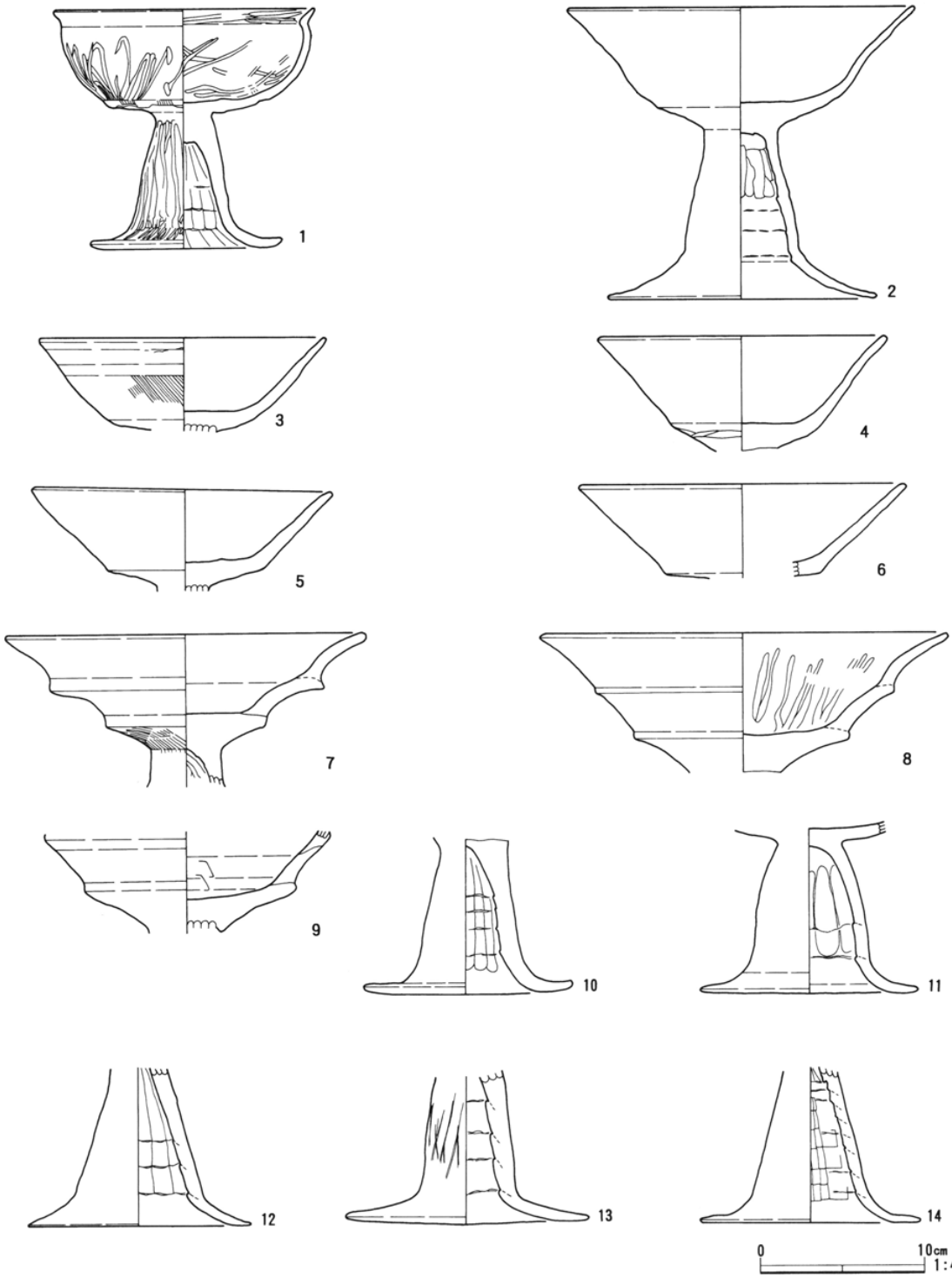


図55　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-15 出土遺物(1)

SI-15出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 台付鉢	口径 15.7 底径 11.6 器高 14.5	鉢体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は短く開く。柱状部は中位に膨らみを持ち、裾部は広がる。	外面―口縁部ヨコナデ、鉢体部ヨコナデ後タテの不規則な暗文様のミガキ。柱状部タテのミガキ、裾部暗文様のミガキ。内面―鉢体部かなりランダムなミガキ、柱状部～裾部輪積痕、タテの絞り目。	内外―明赤褐色	口縁部、裾部一部欠損

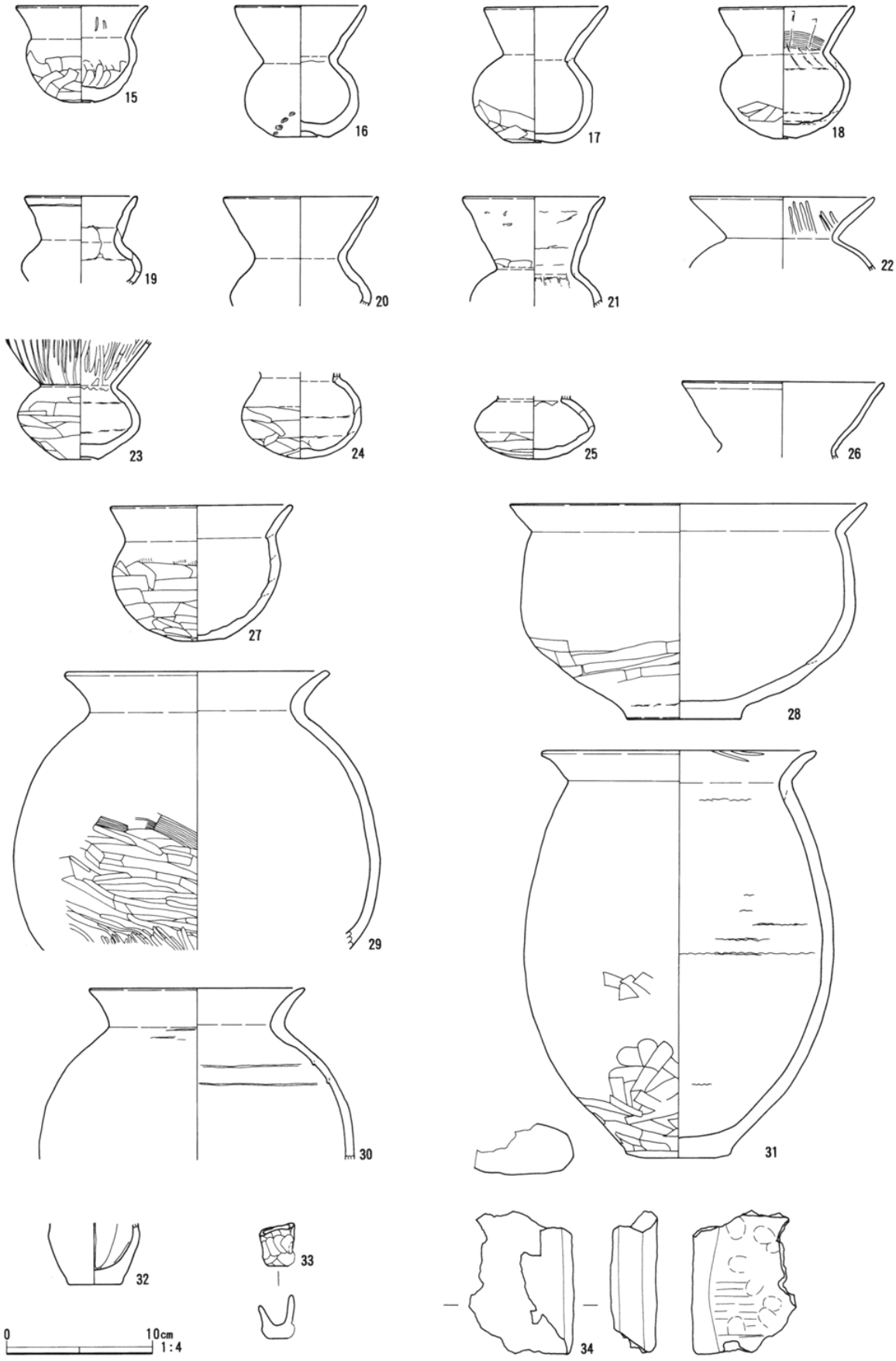


図56　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-15 出土遺物(2)

SI-15出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
2	土師器 高坏	口径(21.2) 底径(16.5) 器高(17.7)	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。柱状部は下位に膨らみを持ち、裾部広がる。	外面―口縁部～坏部ヨコナデ、坏底部タテ、ナナメのナデ、柱状部タテナデ(ミガキに近い)、裾部ヨコナデ。内面―口縁部～坏部ヨコナデ、柱状部輪積痕、タテのケズリ、裾部ヨコナデ。	内―橙色 外―明赤褐色	坏部1/4、裾部1/3残存
3	土師器 高坏	口径 17.5 底径 ― 器高 ―	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は直線的に開く。	外面―口縁部～坏部上位ヨコナデ中位ナナメのナデ、下位ヨコナデ。内面―口縁部～坏部ヨコナデ、底部剝落の為不明瞭。	内―橙色 外―黄橙色	坏部3/4残存
4	土師器 高坏	口径 17.5 底径 ― 器高 ―	坏部下位に稜を持ち、口縁部外反気味に開く。	外面―口縁部～坏部ヨコナデ。 内面―口縁部～坏部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	坏部残存
5	土師器 高坏	口径 18.0 底径 ― 器高 ―	坏部下位に稜を持ち、口縁部外反気味に開く。	外面―口縁部～坏部ヨコナデ。 内面―口縁部～坏部ヨコナデ。	内―暗褐色 外―赤褐色	坏部3/4残存
6	土師器 高坏	口径(19.7) 底径 ― 器高 ―	坏部下位に稜を持ち、口縁部直線的に開く。	外面―口縁部～坏部ヨコナデ。 内面―口縁部～坏部ヨコナデ。	内外―橙色	口縁部1/3残存
7	土師器 高坏	口径(21.6) 底径 ― 器高 ―	坏部中位と下位に突出した段を巡らせ、口縁部は外反する。	外面―口縁部～坏部ヨコナデ、底部ナナメのハケ。内面―口縁部～坏部ヨコナデ、脚部整形痕。	内外―橙色	坏部1/2残存。二次的に被熱している可能性あり。
8	土師器 高坏	口径 24.9 底径 ― 器高 ―	坏部中位と下位に突出した段を巡らせ、口縁部は外反する。	ヨコナデ後ミガキ入る。内外面共磨耗の為不鮮明。	内外―橙色	坏部残存
9	土師器 高坏	口径(16.5) 底径 ― 器高 ―	坏部中位と下位に突出した段を持つ。	外面―口縁部～坏部ヨコナデ。 内面―口縁部～坏部ヨコナデ。	内外―橙色	坏部4/5残存
10	土師器 高坏	口径 ― 底径 12.7 器高 ―	柱状部下位に膨らみを持ち、裾部広がる。	外面―柱状部タテナデ、裾部ヨコナデ。内面―柱状部下位タテナデ、裾部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	裾部1/4欠損
11	土師器 高坏	口径 ― 底径 13.3 器高 ―	柱状部中位に膨らみを持ち、裾部広がる。	外面―坏底部ヨコ、ナナメのナデ、柱状部ナナメ、タテのナデ、裾部ヨコナデ。内面―坏底面ナデ、柱状部指頭による調整痕、裾部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	脚部一部欠損
12	土師器 高坏	口径 ― 底径 13.6 器高 ―	柱状部は直線的に開き、裾部広がる。	外面―柱状部タテミガキ、裾部ヨコナデ。内面―柱状部指頭による調整痕、裾部ヨコナデ。	内―明赤褐色 外―赤褐色	裾部一部欠損
13	土師器 高坏	口径 ― 底径 15.0 器高 ―	柱状部中位に膨らみを持ち、裾部広がる。	外面―柱状部タテ、ナナメのナデ、裾部ヨコナデ。内面―柱状部指頭による調整痕、裾部ヨコナデ。	内外―橙色	裾部1/4欠損
14	土師器 高坏	口径 ― 底径 13.5 器高 ―	柱状部は直線的に開き、裾部広がる。	外面-柱状部タテナデ、裾部ヨコナデ。内面―柱状部下位タテナデ、裾部ヨコのケズリ。	内―明赤褐色 外―にぶい橙色	裾部1/4欠損
15	土師器 坩	口径 8.7 底径 1.6 器高 6.5	体部に膨らみを持ち、口縁部外反気味に開く。底部上げ底。	外面―口縁部・体部上位ヨコナデ、中位～底部ケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部上位ナナメのナデ、底部指頭による整形痕。	内―橙色 外―明赤褐色	1/2
16	土師器 坩	口径 8.8 底径 3.5 器高 9.0	体部に膨らみを持ち、口縁部は内彎気味に開く。底部は上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ヨコ、ナナメのナデ、体部下位に縄の圧痕。内面―口縁部ヨコナデ、体部指頭による整形痕。	内外―明赤褐色	完形

SI-15出土遺物観察表(3)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
17	土師器 坩	口径　8.4 底径　3.2 器高　9.2	体部は膨らみを持ち、口縁部直線的に開く。底部上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ（細線入る）、体部上位ヨコナデ、中位ヨコ、ナナメのナデ、底部ヨコ、ナナメのケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部指頭によるヨコ、ナナメの整形。	内外―明赤褐色	一部欠損
18	土師器 坩	口径　9.2 底径　1.4 器高　9.0	体部は中位が膨らみ、口縁部は直線的に開く。底部上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ヨコ、ナナメのナデ。底部ヨコ、ナナメのケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部ヨコ、ナナメのナデ。	内外―明赤褐色	ほぼ完形
19	土師器 坩	口径(7.4) 底径　― 器高　―	体部は中位が膨らみ、口縁部は外反気味に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、体部指頭による整形痕とナデ。内面―口縁部ヨコナデ、体部ナデ、凹凸ある整形痕。	内外―明赤褐色	1/3
20	土師器 坩	口径(10.4) 底径　― 器高　―	体部は中位が膨らみ、口縁部は直線的に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ヨコ、ナナメのナデ。内面―口縁部・体部ヨコナデ。	内外―橙色	1/3
21	土師器 坩	口径　9.8 底径　― 器高　―	体部は膨らみを持ち、口縁部直線的に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ヨコ、ナナメのナデ。内面―口縁部ヨコナデ、屈曲部絞り目、体部指頭による整形痕。	内外―明赤褐色	2/3
22	土師器 坩	口径(12.5) 底径　― 器高　―	口縁部外反気味に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ヨコ、ナナメのナデ。内面―口縁部ヨコナデ部分的にミガキ、体部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	口縁部1/2残存
23	土師器 坩	口径　― 底径　2.5 器高　―	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は微妙な丸みを持ち開く。底部上げ底。	外面―口縁部暗文様のミガキ、屈曲部ヨコナデ、体部ケズリ。内面―口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部ナデか？、指頭による整形痕あり。	内外―赤褐色	口縁部一部欠損
24	土師器 坩	口径　― 底径　― 器高　―	体部は丸く膨らみ、底部は丸底。	外面―口縁部・体部上位ヨコナデ、中位～底部ケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部ナナメのナデ。	内外―明赤褐色	体部残存
25	土師器 坩	口径　― 底径　― 器高　―	体部は中位で大きく膨らむ。底部は丸底。	外面―体部上位ヨコナデ、下位ケズリ。内面―体部ヨコナデ。	内―にぶい褐色 外―赤褐色	体部残存
26	土師器 坩	口径 13.7 底径　― 器高　―	口縁部直線的に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、内面―口縁部ヨコナデ。	内外―赤褐色	口縁部一部欠損
27	土師器 鉢	口径 12.3 底径　3.1 器高　9.3	体部に丸みを持ちなで肩、口縁部外反気味に開く。底部は小さな平底。	外面―口縁部・体部上位ヨコナデ、中位～底部ケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部ナナメのナデ。	内―にぶい赤褐色 外―明赤褐色	完形
28	土師器 鉢	口径(24.3) 底径　7.7 器高(14.7)	体部上位丸みが弱く、口縁部は直線的に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、体部上位ヨコ、ナナメのナデ、中位ヨコのケズリ、底部ナナメのナデ。内面―口縁部ヨコナデ、体部上位ヨコ、ナナメのナデ、中位ヨコのケズリ、下位ナナメのナデ。	内外―赤褐色	1/2
29	土師器 甕	口径 17.8 底径　― 器高　―	胴部膨らみを持ち、口縁部は外反する。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、ナナメのナデ、内面―口縁部ヨコナデ、胴部ヨコナデ。	内外―橙色	2/3
30	土師器 甕	口径(14.6) 底径　― 器高　―	胴部膨らみを持ち、口縁部は外反する。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部ナナメのナデ。内面―口縁部ヨコナデ、胴部租いヨコナデ。	内外―橙色	1/4

SI-15出土遺物観察表(4)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
31	土師器 甕	口径 15.0 底径 8.0 器高 27.9	胴部緩やかな膨らみを持ち、口縁部は外反する。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部上位ヨコ、ナナメのナデ、中位ナナメのナデ、一部ケズリ、下位細かなケズリ。内面―口縁部～底部ヨコ、ナナメのナデ。	内外―明赤褐色	1/2
32	土師器 (ミニチュア土器)	口径 ― 底径 3.5 器高 ―	平底の底部から胴部が彎曲して立ち上がる。	外面―体部ヨコ、ナナメのナデ。内面―放射状の指ナデ。	白色の微細粒多い。 内―灰褐色 外―にぶい橙色	底部残存。甕あるいは鉢のミニュチアか？
33	土師器 (ミニチュア土器)	口径 2.8 底径 ― 器高 2.8	全体に口縁部の長い坩を模したかと思われる形態で、体部は中実。	指頭による成形、整形のまま無調整。	内外―明赤褐色	体部1/2欠損
34	板状土製品		厚みのある板状で、表裏をなす平坦面とやや丸みのある側面からなる。薄板状の粘土を重ねている。	一方の平坦面（A面）には、浅く粗いハケ様の痕跡の残るナナメのナデ。もう一方の平坦面（B面）には、部分的にナデ痕、指頭圧痕、竹官状工具による刺突痕。側面はA面と同じナナメのナデ。	内外―橙色	一部残存

ていた。

ピットは床面で3個を検出した。このうちP1は主柱穴である。形態は歪んだ楕円形で、深さは20cmを測る。ロームブロックを含む黒色土が堆積し柱跡、裏込めは確認できない。

掘り方は中央部をごく浅く緩やかに掘り込んでいるのみで、他に落ち込みは存在しない。

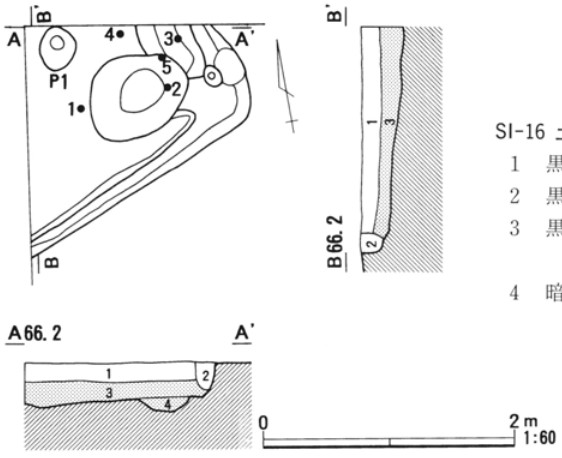
遺物［図55・56、写真29～31］

床面からは、土師器高坏、坩を中心に多量の遺物が出土しているが、完形品は西隅で検出した土師器坩［16・18］のみで、欠損品が多数を占める。ほとんどが、住居廃絶後に遺棄されたものと考えられる。なお、北西壁際の貯蔵穴状の土坑底面からは完形土師器鉢［27］を検出している。

f．SI-16

遺構［図57、写真19］

A区の北西隅に位置する。大半が調査区外にあって、住居跡東隅付近の一部を検出したにとどまっ



SI-16 土層説明

1　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）を少量含む。
2　黒　色　土　ロームブロック（径1㎜±）を少量含む。
3　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）、炭化物ブロック（径1～5㎜）を少量含む。しまり強。貼床層。
4　暗褐色土　ロームブロック（径1～15㎜）を多量に含む。しまり強。貼床層。

図57　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-16

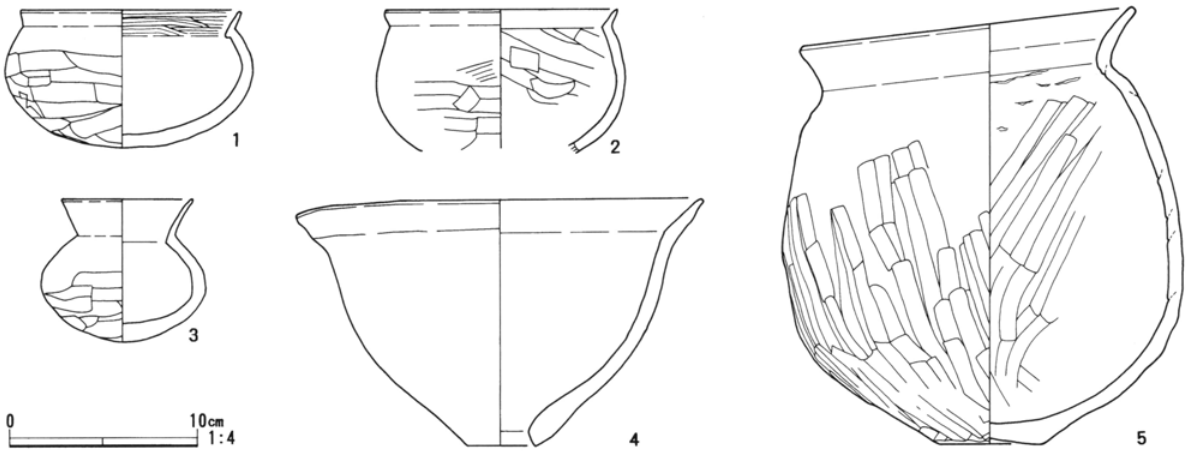


図58　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-16 出土遺物

SI-16出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 坏	口径 11.7 底径 1.8 器高 7.3	膨らみを持つ体部、口縁部は直線的に短く開く。底部は小さな凹底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ケズリ。内面―口縁部ヨコハケ、体部～底部ヨコナデ、一部ケズリ。	内―明赤褐色 外―橙色	ほぼ完形
2	土師器 坏	口径(12.3) 底径 ― 器高 ―	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は直線的に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、体部上位ヨコナデ、中位ナナメのナデ、下位ヨコケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部上位ナナメのケズリ、下位ヨコ、ナナメのナデ。	内外―明赤褐色	1/4
3	土師器 坩	口径 7.0 底径 ― 器高 7.5	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は丸底。	外面―口縁部～体部上位ヨコナデ中位ヨコナデとケズリが交錯、下位ヨコ、ナナメのケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、指頭による整形痕。	内外―橙色	口縁部一部欠損
4	土師器 甑	口径 21.4 底径 3.6 器高 13.0	胴部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反気味に開く。	外面―口縁部ヨコ、以下タテ、ナナメのナデか、磨耗、剝落の為不明瞭。内面―口縁部ヨコナデ、以下ナナメのナデ。体部中位にごく細かなハケ様の細線入る。底面の貫通孔の周辺は強いヨコナデ。	内外―明赤褐色	ほぼ完形
5	土師器 甕	口径 17.5 底径 5.5 器高 23.1	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反する。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部上位タテ、ナナメのナデ、中位タテのケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、胴部上位指頭による整形痕、中位～底面ナナメのナデ。	内外―橙色	ほぼ完形

た。平面形は比較的角の明瞭な方形を呈するものと思われるが、規模、主軸方位、カマドの有無などは不明である。

覆土は単層で、ロームブロックを含む黒褐色土が堆積している。

多量のロームブロックとわずかな炭化物ブロックを含む黒褐色土ないし暗褐色土を全体に敷き込んで貼床を形成している。床面には微妙な起伏があり、全体に硬化が顕著である。壁際には壁溝が存在し、内部にロームブロックを含む黒色土が堆積している。

カマドは検出されず、存在する場合は調査区外にあると考えられる。

貯蔵穴は東隅近くの床面に検出した。平面形は不整な楕円形を呈し、長径80cm、短径70cm、床面からの深さ25cmを測る。底面は平坦で、上端と同じく不整な楕円形を呈し、長径20cm、短径30cmを測る。覆土には細かなロームブロックを含む黒色土が堆積していた。

ピットは床面で２個を検出した。このうちＰ１は主柱穴である。形態は楕円形で、深さは20cmを測る。ロームブロックを含む黒色土が堆積し柱跡、裏込めは確認できない。

掘り方底面には緩やかな凹凸が存在する。

遺物［図58、写真31］

床面直上の遺物は、散在しているが土師器坏［１］、土師器坩［３］、土師器甑［４］、土師器甕［５］など完形に近い遺物の割合が多い。

g．SI-17

遺構［図59～62、写真20］

Ａ区の西壁側に位置し、SI-16と壁を接している。平面形はやや不整な隅丸方形を呈し、規模は南西壁側でおよそ4.3mを測る。主軸方位はＮ―75°―Ｅを示す。東壁にカマド、南東隅に貯蔵穴を備える。

覆土は単層で、ロームブロックを含む黒褐色土が堆積している。床面は平坦で、貼床をもたず、ローム面をそのまま床面とし、壁溝も存在しない。

東壁内側のやや南寄りにカマドが付設されている。カマドは東壁に直交せず、焚口をやや北方に振っている。壁への掘り込みをもたない完全な造り付けカマドで、黒褐色土にローム・白色粘質土・焼土などの細かなブロックを混合した土を用いて構築している。左袖が大きく壊れているが、右袖は遺存状態が良好である。精査を行ったが、土器片、石材などの構築材の使用や臼玉などを用いた祭祀の痕跡は認められなかった。燃焼部には緩やかな楕円形の窪みがある。

南東隅の床面にはカマドと南壁の間に挟まれるようにして貯蔵穴が存在する。平面形はやや歪な円形を呈し、東西65cm、南北65cm、床面からの深さ25cmを測る。底面は平坦で30×20cmの楕円形を呈する。内部には細かな炭化物ブロックを含む黒色土が堆積していた。

ピットは掘り方面で大小７個を検出した。このうちＰ１は主柱穴である。形態は楕円形で、深さは20cmを測る。また、カマド直下の掘り方面には浅い楕円形の落ち込みがある。なお、床面の残存状態から他にも主柱穴が検出されてしかるべきところであるが、精査によっても認められなかった。

図59　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-17 床面

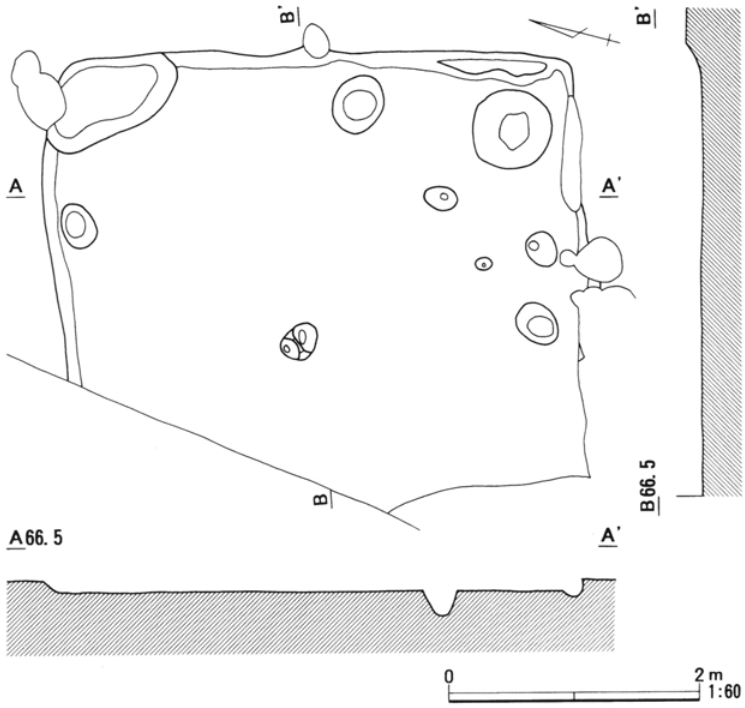


図60　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-17 掘り方

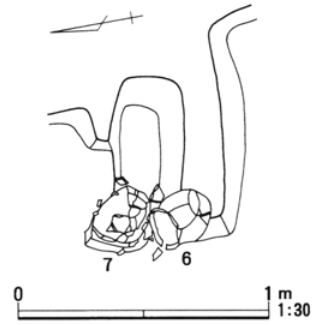


図61　四方田遺跡Ⅳ次調査
SI-17 カマド遺物出土状況

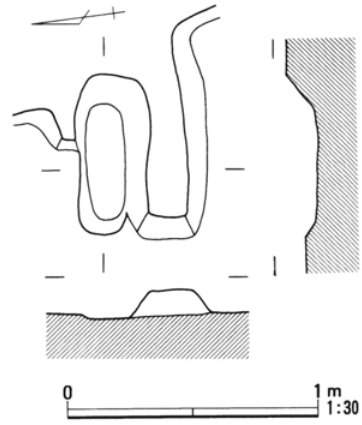


図62　四方田遺跡Ⅳ次調査
SI-17 カマド

SI-17出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 高坏	口径 17.4 底径 12.2 器高 14.1	坏部下位に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。柱状部は下位に微妙な膨らみ持ち、屈曲した後裾部広がる。	外面―坏部ヨコナデ、底部放射状のナデ、柱状部タテのナデ、裾部ヨコナデ。内面―坏部ヨコナデ、柱状部・裾部輪積痕。	内外―橙色	裾部1/2欠損
2	土師器 高坏	口径 17.2 底径 12.8 器高 14.5	坏部下位に稜を持ち、口縁部はほぼ直線的に開く。柱状部直線的に開き、屈曲した後裾部広がる。	外面―坏部ヨコナデ、底部放射状のナデ、柱状部タテのナデ、裾部ヨコナデ。内面―坏部ヨコナデ後暗文様のミガキ、柱状部輪積痕、指頭圧痕、裾部ヨコナデ。	内外―橙色	脚部1/2欠損
3	土師器 高坏	口径 17.4 底径 ― 器高 ―	坏部下位に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。	外面―坏部ヨコナデ、底部ヨコ、ナナメのナデ。内面―坏部ヨコナデ、底部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	坏部3/4残存。接合面を残し脚部欠失
4	土師器 坩	口径 ― 底径 2.7 器高 ―	体部は丸く膨らみを持ち、底部は上げ底。	外面―体部上位ヨコナデ、中位～底部ヨコのケズリ。内面―ヨコナデ、上位に輪積痕。	内外―明赤褐色	体部2/3残存
5	土師器 坩	口径 ― 底径 3.2 器高 ―	体部中位に膨らみを持ち、底部は平底だが中央部にわずかな凹み。	外面―体部上位ヨコナデ、中位ヨコ、ナナメのナデ、下位ヨコケズリ。内面―体部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	体部1/3残存
6	土師器 甕	口径 17.0 底径 6.5 器高 22.4	胴部中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底面中央に不整形の凹み。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、ナナメのナデ。内面―口縁部ヨコナデ、胴部凹凸著しく指頭などによる整形痕残る。	内―灰褐色 外―橙色	ほぼ完形

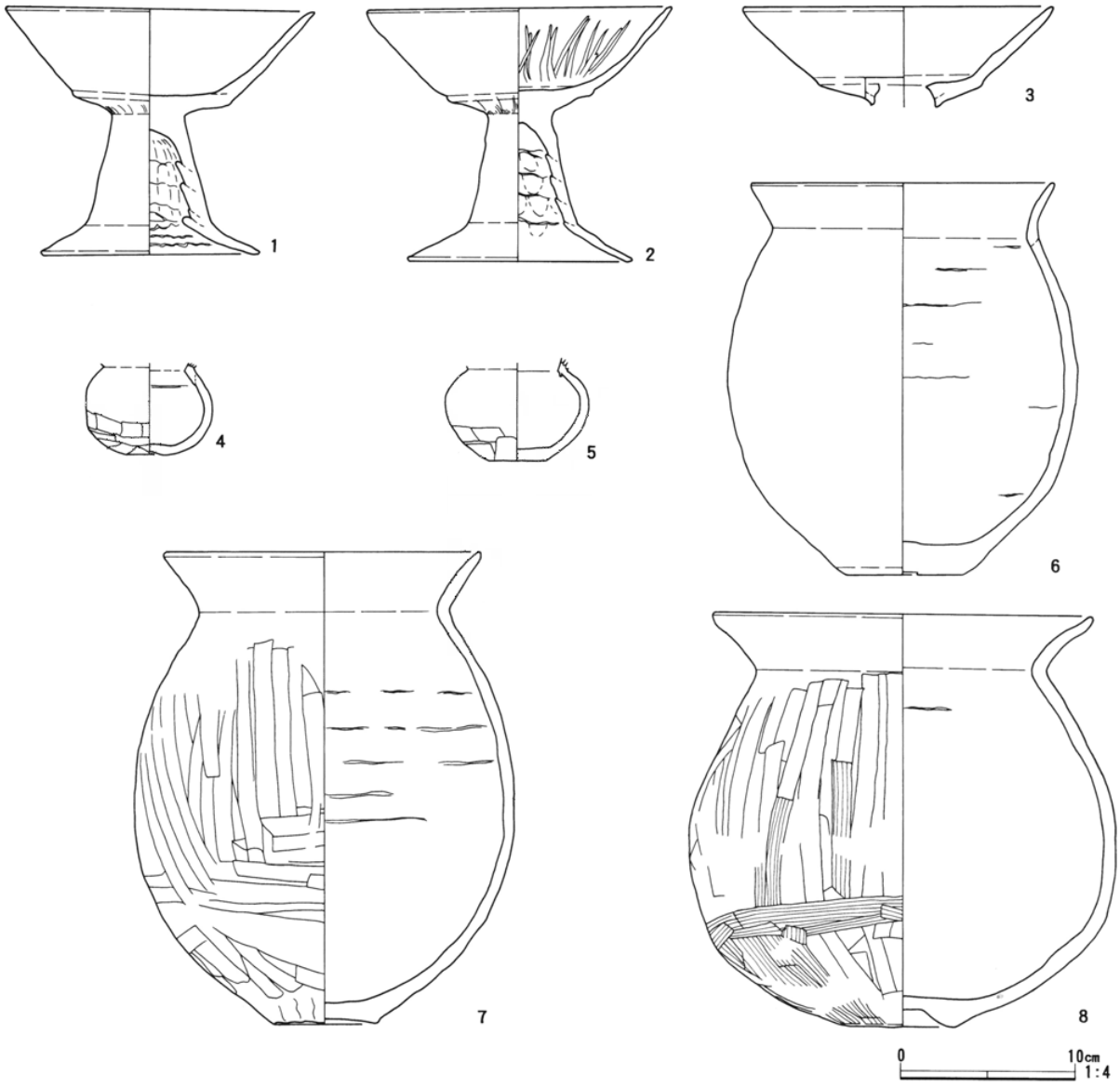


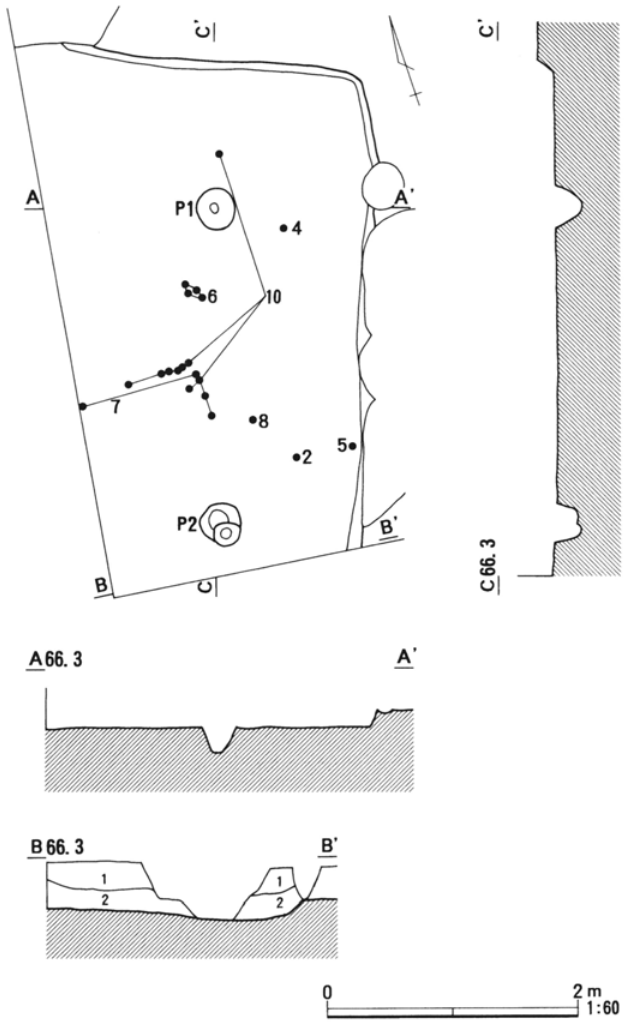
図63　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-17 出土遺物

SI-17出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
7	土師器 甕	口径 17.8 底径 5.9 器高 26.9	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部はわずかに上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部タテ、ナナメのケズリ、下位指頭による整形痕。内面―口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、ナナメのナデ。	内外―明赤褐色	3/5
8	土師器 甕	口径 21.5 底径 6.5 器高 23.4	胴部は下位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開き、端部はつまみ上げられている。底部が大きく凹む上げ底。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部上位タテ、ナナメのケズリ、下位ハケ目。粗いハケ目とケズリは同一工具による。内面―口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、ナナメのナデ。	小礫を多く含む。 内外―にぶい橙色	2/3

遺物［図63、写真31・32］

床面直上の遺物は、カマド全面とカマド焚口に集中的な分布を見せる。カマド焚口には土師器甕［6・7］が一括出土しており、本住居跡に伴うものと思われる。



SI-18 土層説明

1　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）を少量含む。

2　黒褐色土　ロームブロック（径1～10㎜）を少量含む。

図64　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-18

h．SI-18

遺構［図64、写真21・22］

A区の南西隅に位置する。西半から南壁際にかけては調査区外にあって、住居跡の北東側の1/3程度を検出したにとどまった。平面形は比較的角が明瞭で、やや不整な方形を呈するものと思われる。規模は南北4.3m程度を測る。検出された東壁と並行に仮の軸線をとれば、主軸方位はN―20°―Eを示す。カマドもしくは炉および貯蔵穴の有無は不明である。

覆土は上下2層に分けられ、ともにロームブロックを含む黒褐色土が堆積する。

床面はほぼ平坦であるが、南隅付近ではやや壁際が低くなっている。貼床をもたず、ローム面をそのまま床面とし、壁溝も存在しない。

カマドや炉、貯蔵穴は検出されず、存在する場合は調査区外にあると考えられる。

ピットは2個を検出した。いずれも主柱穴である。形態は円形で、深さはP1が25cm、P2が20cmを測る。土師器の小片を含む黒色土が堆積し、柱跡、裏込めは確認できない。

遺物［図65、写真32］

床面直上の遺物は、東壁から主柱穴間にかけて分布する。完形品は少なく土師器坏［2］1点のみである。散漫な出土状態から、多くが住居廃絶後の遺棄や混入によるものと考えられる。

SI-18出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器坏	口径(13.4) 底径　― 器高(4.7)	体部は緩やかな丸みを持ち、口縁部は内傾する。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ケズリ。内面―ヨコナデ。	内外―橙色	1/4
2	土師器坏	口径 12.9 底径　4.9 器高　6.9	体部は丸みを持って立ち上がり、端部はわずかに屈曲。底部中央は微妙に凹む。	外面―口縁部～体部上位ヨコナデ中位～下位ナナメのナデ、底部ケズリ。内面―ヨコナデ。	内―にぶい赤褐色 外―明赤褐色	完形
3	土師器坏	口径(12.5) 底径　― 器高　―	膨らみを持つ体部。口縁部は直立気味に立ち上がり端部やや外反。	外面―口縁部～体部上位ヨコナデ中位ヨコ、ナナメのナデ。内面―ヨコナデ。	内外―明赤褐色	1/4

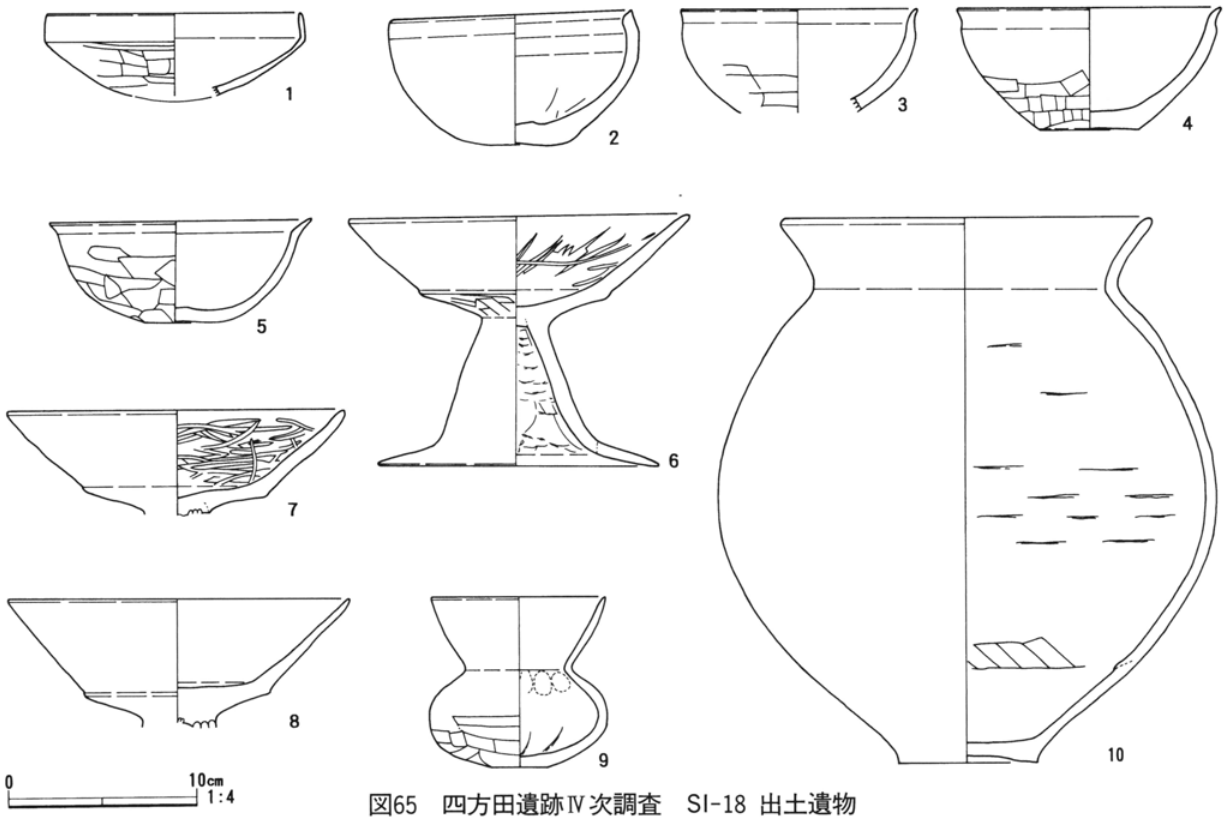


図65　四方田遺跡Ⅳ次調査　SI-18 出土遺物

SI-18出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
4	土師器 坏	口径 14.1 底径　5.2 器高　6.5	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は短く外反する。底部は平底。	外面―口縁部ヨコナデ、体部上位ヨコ、ナナメのナデ、下位ヨコのケズリ。内面―体部ナナメのナデ、底部ナデ。	内外―明赤褐色	1/2
5	土師器 坏	口径 13.3 底径　3.1 器高　5.3	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は外傾して開く。底部平底。	外面―口縁部～屈曲部直下ヨコナデ、体部上位・中位ヨコのナデとケズリ、下位ナナメのケズリ。 内面―口縁部～体部上位ヨコのナデ、下位放射状のナデ。	内外―赤褐色	一部欠損
6	土師器 高坏	口径 18.0 底径 14.8 器高 13.2	坏部下位に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。柱状部は下位に向かって大きく開き、裾部広がる。	外面―坏部ヨコナデ，底部ヨコナデ後ナナメのケズリ、柱状部タテのナデ、裾部ヨコナデ。内面―坏部ヨコナデ後暗文様のミガキ、柱状部上半輪積痕、下半ナデ、輪積痕、裾部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	2/3
7	土師器 高坏	口径 17.7 底径　― 器高　―	坏部下位に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。	外面―坏部ヨコナデ。内面―坏部ヨコナデ後暗文様のミガキ。	内外―明赤褐色	坏部1/2残存
8	土師器 高坏	口径 17.9 底径　― 器高　―	坏部下位に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、坏部～底部磨耗により不明瞭。内面―ヨコナデ。	内外―明赤褐色	坏部1/2残存
9	土師器 坩	口径(9.2) 底径(3.6) 器高(9.0)	体部は横に膨らみを持ち、口縁部はやや内彎気味に開く。底部は平底。	外面―口縁部～体部上位ヨコナデ下位ヨコ、ナナメのケズリ。内面―ヨコナデ。頸部に指頭圧痕と絞り目。	内外―橙色	1/2残存
10	土師器 甕	口径 19.8 底径　7.3 器高(28.9)	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部ナナメのナデ、中位にはヨコナデが入る。内面―口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、ナナメのナデ、下位一部ナナメのケズリ。	内外―にぶい橙色	3/5

ｉ．遺構外出土遺物

Ⅳ次調査地点では表土、遺構確認面上層の黒色土及び攪乱においても遺物を検出している。また、住居跡覆土からも、古墳時代前期の土師器、弥生中期の土器など住居跡よりも古い年代の資料を検出しており、これらを遺構外出土遺物として一括した。

遺構確認面の上層に発達した黒色土層には古墳時代中期以前の種々の遺物が含まれていた。遺物の多くは古墳時代中期の土師器で、細片が大部分であったが、中には大型の破片も含まれ、さらにわずかながら完形品も存在する。検出はできていないものの、黒色土中に住居跡その他何らかの遺構が存在した可能性は否定しきれない。また、調査範囲内には古墳時代前期、弥生時代中期の遺構を確認できないが、出土した該期の資料からは、すでに消滅した古い時期の遺構の存在が推測される。

(1) 土師器［図66～68、写真34］

図66にＳ字甕ほか古墳時代前期土師器の拓影を掲げた。１はやや小振りのハケ甕の口縁部～肩部の破片である。口縁部は強く外反し、くびれ部以下にはヨコハケが施されている。ハケは比較的条間が広く、条線が深く整然としている。内面にはヨコ、ナナメのナデが加えられている。破片下端では器厚３㎜前後、くびれ部から肩部にかけてかなり急激に器厚が減じるようである。にぶい褐色を呈する堅い焼きの土器である。

２～17には、いわゆるＳ字甕の口縁部～脚部片をまとめた。いずれも焼成良好で堅緻である。２～10は口縁部片である。３・４は同一個体の可能性がある。２は端部が短く、比較的屈曲の強いもの、３・４は外反度は弱いが、やはり端部が短いものである。２～４共通して、くびれ部から口縁部にかけての屈曲が著しく、胴部の器厚が２、３㎜と薄い。外面突出部下には、タテのハケ、肩部にはナナメのハケが施されている。２のくびれ部内面には、ヨコのケズリに近い調整痕をとどめる。２は灰白色、３・４は浅黄橙色、ともに細砂をかなり含む。

５～８は、２～４に比べ、総じて端部が長く、屈曲も弱い。また、５～７では、器厚も４、５㎜と厚い。いずれも口縁部の内外面はヨコナデ、７のみくびれ部直上にナデ消し切れないハケメをとどめ

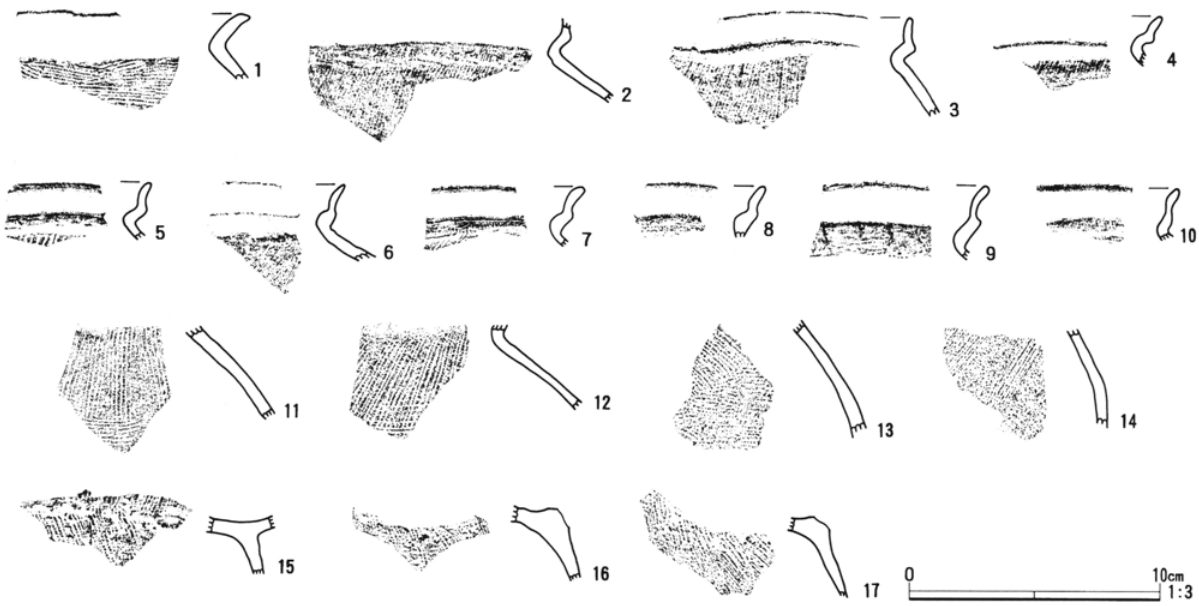


図66　四方田遺跡Ⅳ次調査　遺構外出土遺物(1)

る。5・6は、肩部にナナメのハケが施されている。5・6は浅黄橙色、7・8は灰黄褐色を呈する。

9・10は、端部が長く、屈曲の弱いものである。10の場合、外面の屈曲はとくに微弱である。内外面ともにヨコナデされている。9は灰白色、10は灰黄褐色を呈する。

11～14は胴部上位の破片であろう。11・12は肩部で、外面にはタテ、あるいはナナメのハケが加えられ、破片下端には、ヨコのハケメがみとめられる。11のハケメは、条間が広く条が整然とし過ぎており、あるいは櫛状の工具によるものかもしれない。内面には、ヨコ、ナナメのナデ、ともにくびれ部には、指頭による押捺痕をとどめる。13・14の外面には、ナナメのハケが加えられている。13では方向を違え、14ではハケメ間に下調整のケズリ痕がみとめられる。12は灰白色、13・14は灰黄褐色あるいは褐色を呈する。11は橙色、極めて堅い焼きの土器で、器厚が5㎜を越えることから、他器種になる可能性も捨て切れない。

15～17は、脚部片である。いずれも外面には、ハケが加えられており、17ではナナメのハケメが、タテナデによりほぼ等間隔にナデ消されている。16の胴部側の内面には、放射状のヘラ跡が見られる。15は橙色、16は浅黄橙色、17は灰黄褐色を呈する。

図67・68には古墳時代前・中期土師器の実測図を掲げた。土師器器台、ハケ調整を施す土師器坩など確認された住居跡の所属時期をやや遡る年代を示す資料が含まれる。また、土師器片口鉢のような希少な器種も含まれる。

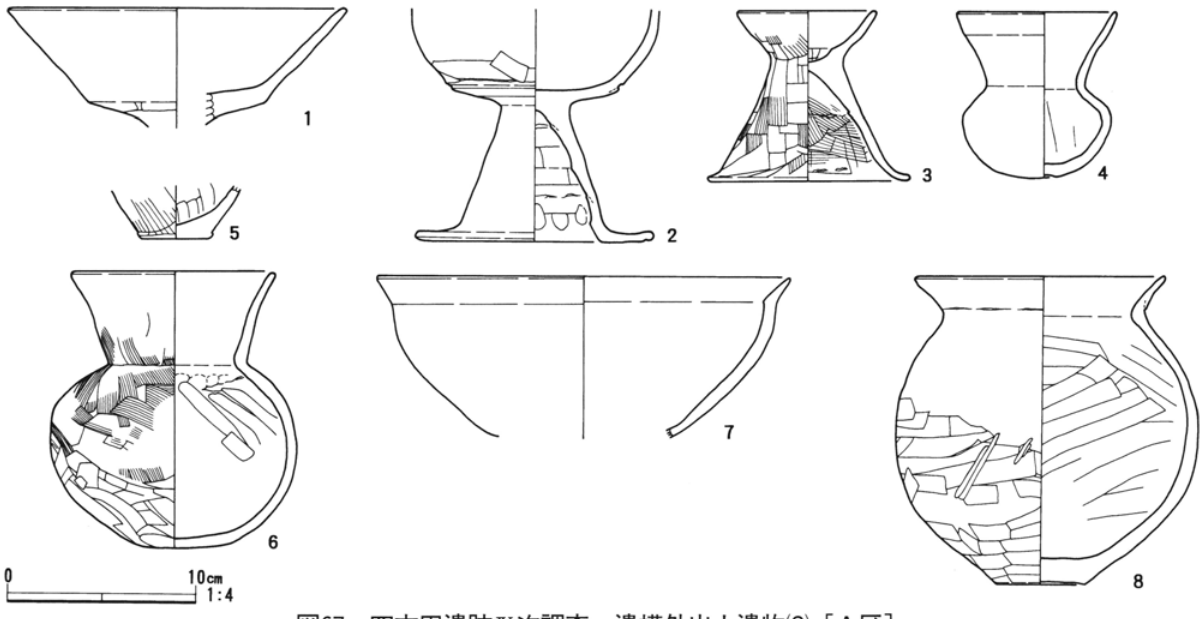


図67　四方田遺跡Ⅳ次調査　遺構外出土遺物(2)［A区］

A区遺構外出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 高坏	口径(17.7) 底径　— 器高　—	坏部下位に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。	外面—口縁部～坏部ヨコナデ、底部ヨコ、ナナメのナデ。内面—口縁部・坏部ヨコナデ。	内外—橙色	坏部1/2残存
2	土師器 台付鉢	口径　— 底径 13.0 器高　—	鉢体部は丸みを持って立ち上がる。稜直上が凹線状にくぼむ。脚部は膨らみを持ち、裾部広がる。	外面—体部中位ナナメのナデ、下位ヨコのケズリ、底部ケズリ及びナナメのナデ、柱状部タテナデ、裾部ヨコナデ。内面—体部ヨコナデ、柱状部指頭痕。裾部ヨコナデ。	内外—橙色	坏部2/3欠損

A区遺構外出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
3	土師器 器台	口径　7.3 底径 10.2 器高　9.0	器受部はわずかに彎曲して立ち上がり、内底面は半球状に凹む。脚部は膨らみを持って開く。裾部外・下面は面取りされている。	外面―器受部上位タテのナデ、下位タテのケズリ所々ハケ目。内面―器受部上・中位ナナメのナデ、下位の凹部時計回りのケズリ。	内外―にぶい赤褐色	脚部一部欠損
4	土師器 坩	口径　8.3 底径　1.5 器高　8.6	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、上半わずかに彎曲する。底部わずかに上げ底。	外面―口縁部ヨコ、ナナメのナデ、端部はヨコナデ、体部上位ヨコナデ、中位ヨコ、ナナメのナデ。 内面―ヨコナデ、ノッチ入る。	内外―明赤褐色	ほぼ完形
5	土師器 小型甕？	口径　― 底径　3.6 器高　―	平底の底部から胴部は直線的に立上がる。	外面―ナナメのナデ。粗い条線入る。内面―ヨコ、ナナメのナデ。	内―明赤褐色 外―暗赤褐色	底部及び体部の一部残存
6	土師器 坩	口径 10.6 底径　2.5 器高 14.7	体部は中位に膨らみを持つ。口縁部は外反気味に開く。底部は丸底に近く、底面と思われる楕円形の平坦面は片側に大きくずれる。	外面―口縁部上半ヨコナデ、下半～胴部上位ナナメのハケ目、中・下位ナナメのケズリ、部分的にハケ目。内面―ヨコ、ナナメのナデ。	内―暗赤褐色 外―明赤褐色	3/4
7	土師器 鉢	口径(21.9) 底径　― 器高　―	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は外傾する。	外面―口縁部ヨコナデ，体部上位ヨコ、タテナデ、中位剝落の為不明瞭。内面―口縁部ナデ、体部ヨコ、ナナメのナデ。	内―明赤褐色 外―にぶい赤褐色	1/4
8	土師器 甕	口径 13.2 底径　4.7 器高 16.4	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部ヨコのケズリ、ナデ。内面―口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、ナナメのケズリ、底部ナナメのナデ。	内外―明赤褐色	完形

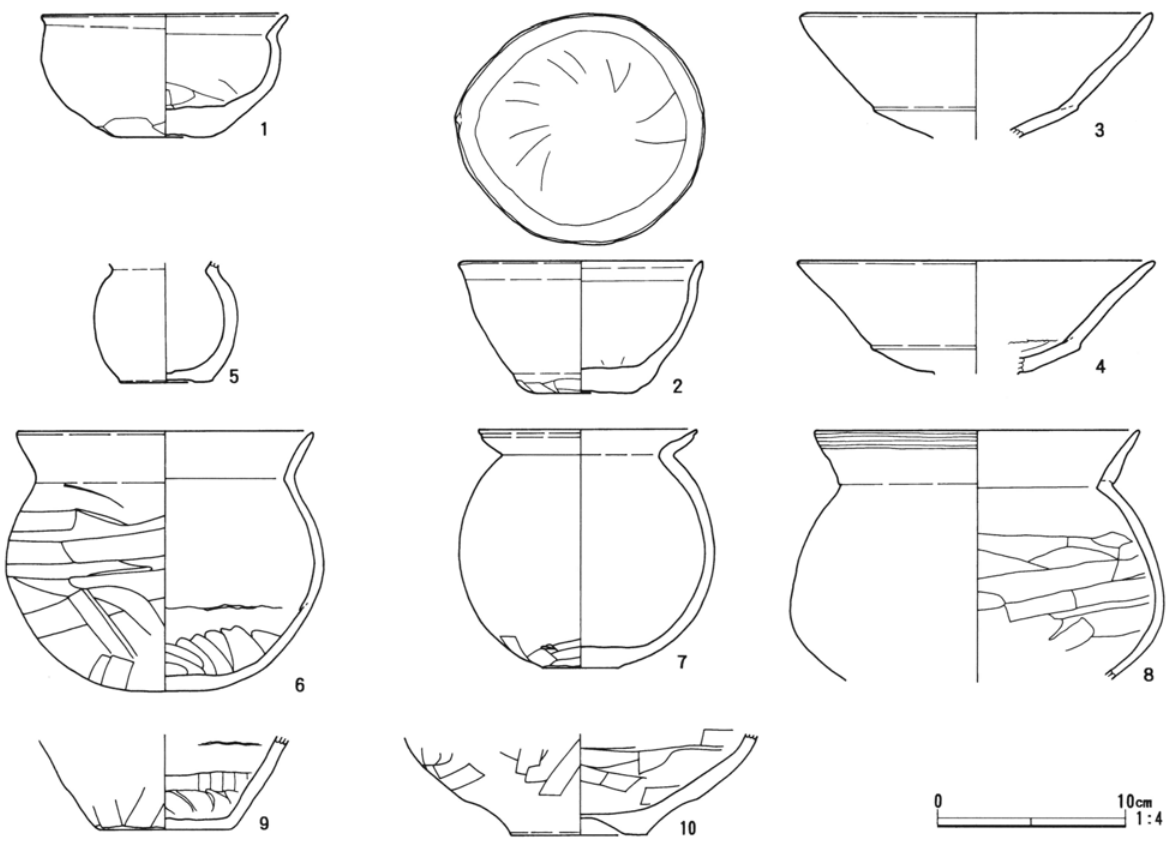


図68　四方田遺跡Ⅳ次調査　遺構外出土遺物(3)［B区］

B区遺構外出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 坏	口径 13.0 底径 5.0 器高 6.5	体部は膨らみを持ち、口縁部は短く外傾する。底部は上げ底。	外面―口縁部・体部ヨコナデ、底部ヨコのケズリ。内面―口縁部・体部ヨコナデ、底部ヨコのケズリ。	内外―明赤褐色	口縁部一部欠損
2	土師器 片口鉢	口径 13.0 底径 5.5 器高 7.0	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。上から見ると卵形に近く端部の一端を軽くつまみ片口としている。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ナナメ、タテのナデ、底部ケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部ヨコ、ナナメのナデ。	内外―明赤褐色	完形
3	土師器 高坏	口径 18.8 底径 — 器高 —	坏部下位に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。	外面―口縁部～坏部ヨコナデ、坏底部ヨコ、ナナメのナデ。内面―坏部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	坏部1/2残存
4	土師器 高坏	口径 19.0 底径 — 器高 —	坏部下位に稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面―口縁部～坏部ヨコナデ。内面―口縁部～杯部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	坏部1/3残存
5	土師器 小型壺？	口径 — 底径 5.0 器高 —	体部は膨らみを持ち、底部は上げ底。	外面―体部ヨコ、ナナメのナデ。内面―体部ヨコナデ。	内外―橙色	体部2/3残存
6	土師器 甕	口径(15.6) 底径 4.0 器高 13.9	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部ヨコのケズリ。内面―口縁部～胴部ヨコナデ、胴部中位局所的にケズリ。	内―明赤褐色 外―橙色	3/4
7	土師器 甕	口径(11.5) 底径 4.0 器高 12.6	胴部は丸く膨らみ、口縁部外傾する。端部は微妙に屈曲し、先細りとなる。	外面―口縁部・胴部上位～中位ヨコナナメのナデ、下位ケズリ、ナデ。内面―口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヨコ、ナナメのナデ。	内―にぶい赤褐色 外―明赤褐色	2/3
8	土師器 甕	口径(17.1) 底径 — 器高 —	胴部は下位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、胴部上位～中位ナナメ、ヨコのナデ、下位ナナメのナデ。内面―ヨコ、ナナメのケズリ。	内外―にぶい赤褐色	1/3
9	土師器 甕？	口径 — 底径 6.9 器高 —	胴部直線的に立ち上がる。	外面―胴部タテナデ。内面―胴部ヨコナデ、ヨコケズリ、底面ケズリ。	内外―橙色	底部残存
10	土師器 甕	口径 — 底径 7.3 器高 —	胴部は丸味を持って立ち上がる。底部は上げ底。	外面―胴部ケズリ、ナデ。内面―胴部～底部ヨコナデ。	内外―明赤褐色	1/2

⑵　弥生土器［図69、写真33］

今回の調査で出土した弥生土器は、いずれも遺構外出土の細片ではあるが、周辺地域では類例の少ない中期段階の資料であり、可能な限り図化することにした。46•47のように時期限定が困難な資料、20のように後出する可能性のある資料を除けば、総じて胎土・焼成が類似しており、弥生時代中期前半に比定できる。なお、図69: 1～3・5・6・8・12・14～16・19・20・22～25・27・29～31・33・35～39・41・44・45は、Ⅳ次調査A区出土、その他は、同B区出土である。

1～30には、壺の文様片をまとめた。総じて屈曲の少ない形態の壺になると思われるが、器形を明確に特定できないものの中には、後述する筒形土器や甕が多少含まれる可能性もある。以下文様別に記載する。

1～19は、沈線と縄文の施された口縁部片、頸胴片である。

1は、口縁部が直立気味に短く立ち上がる壺になろうか。口縁部の孤は比較的大きく、小型壺ではない。外面端部にはLRの単節縄文が施文され、以下間隔を開け3本の平行沈線が巡らされている。明赤褐色を呈し、石英粒などの小礫を含む硬質の土器である。

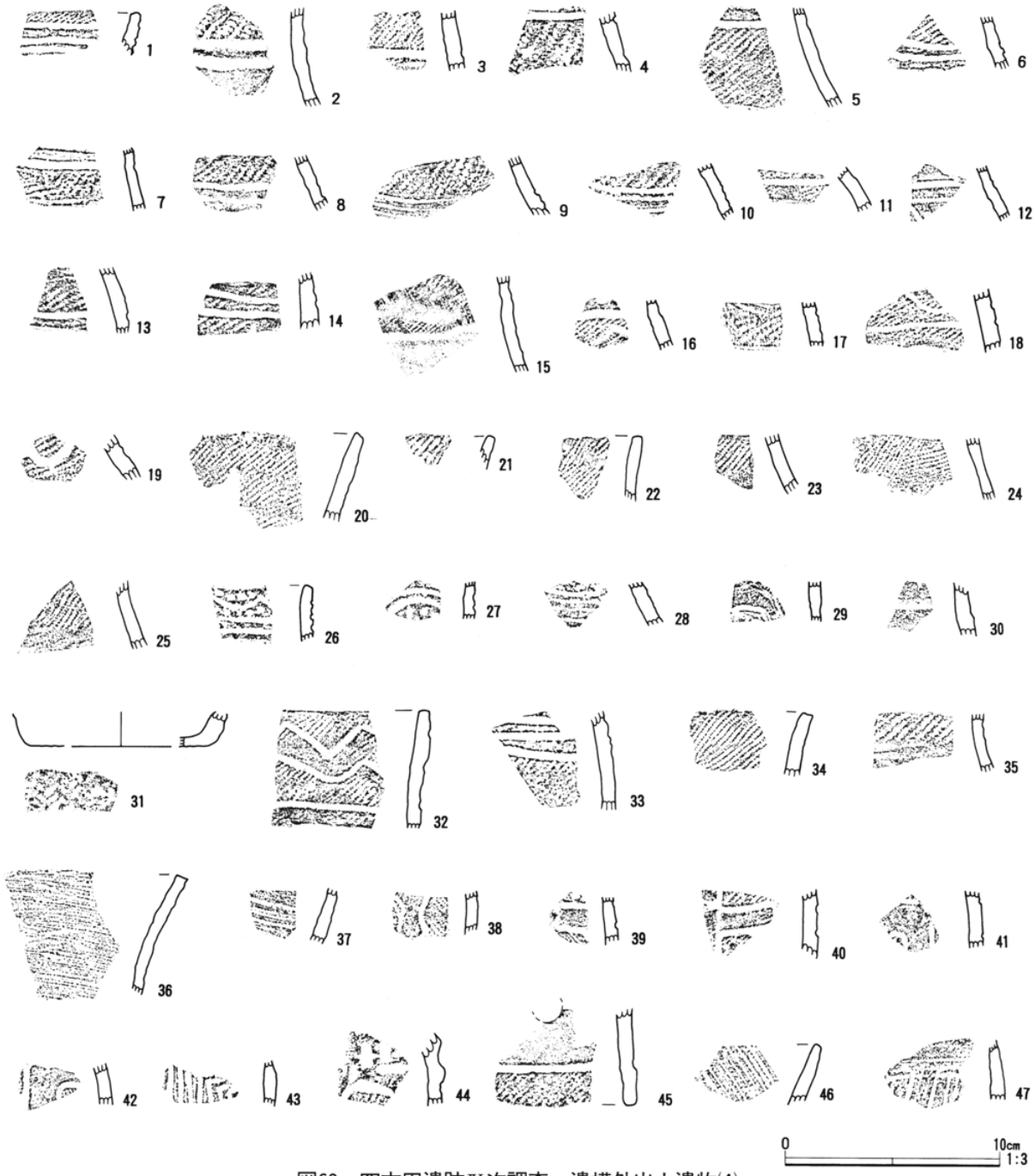


図69　四方田遺跡Ⅳ次調査　遺構外出土遺物(4)

2は沈線の施された頸部片である。頸部下半と思われ、上半には縄文と2本の沈線、下半は無文部となっている。縄文は極端に太さの異なる原体を撚った単節縄文で、沈線は幅6㎜前後と太く、浅い施文が特徴になる。破片右端には、斜位の凹みが見られるが、文様の一部であるかどうか確定できない。にぶい褐色を呈し、砂粒・小礫を多量に、とくに金色の雲母粉末をかなり含む。

3～5は、LRの単節縄文を地文とし沈線の施された頸部片である。沈線幅は3、4㎜で、5の下端にはかすかに孤を描く沈線が痕跡的にみとめられる。いずれもにぶい橙色を呈し、3・4の胎土には小礫が目立つ。

6～11は、平行沈線の施された頸胴部片である。6～8・11のように沈線間の間隔がやや広いもの、

9・10のように間隔が狭く数本同時に施文されている可能性のあるものがある。地文は、7がLの無節縄文、その他はLRの単節縄文である。6～9はにぶい橙色、10・11はにぶい黄橙色で、いずれも小礫を含む堅い焼きの土器である。

12～19には、直線文に加え、波状文などが加えられる頸胴部片をまとめた。13は内面の調整が比較的丁寧なので、丸みをもった鉢体部となる可能性もある。

12では破片左下に斜めの沈線が見られ、三角文などが描かれていたようである。14は平行沈線の片方が弱い孤を描き、16では鋸歯状文、17・18では波状文が加えられている。15には縄文を充塡した孤状の区画線が見られ、太頸壺の頸部と考えたが、孤線以下は無文部となっている。19の沈線は円文の一部であろうか。円文の内外に同じ縄文が地文として施されている。摩耗が著しく地文が判然としない12と無節縄文の16以外の地文は、LRの単節縄文である。12・18・19はにぶい褐色、他はにぶい橙色を呈し、いずれも小礫を含む堅い焼きの土器である。

20～25は縄文のみ施された口縁部片、頸胴部片である。いずれもLRの単節縄文が施文されており、23・25の破片下には無文部がみとめられる。22の端部上面には、押捺が加えられ、凹んでいる。20はにぶい橙色、他はにぶい褐色で、やはり小礫の目立つ胎土である。20のみ砂粒・小礫が密で、他と異なる。20は時期的に後出する可能性もある。

26～30には、地文を欠き沈線や刺突文のみ見られるものをまとめた。26・27には竹管などによる刺突文と沈線が施されている。26は口縁部が直立する小型壺になろうか。にぶい橙色、小礫を含む堅い焼きの土器である。器厚がかなり異なるが、26・27は胎土、刺突文など酷似している。28には4本以上の沈線、29にはやや角張った円弧のような文様が施されている。29は縄文土器の可能性もある。

31は底面に網代痕の見られる底部片である。網代の編み方は摩耗により判然としない。にぶい橙色を呈し、砂粒、大小の礫をかなり含む。

32～37は、甕の口縁部片、胴部片で、32・33は、縄文を地文とし沈線の施されたもの、34・35は縄文のみ、36・37には条痕が施されている。

32はくびれ部を有し、口縁部がゆるやかに開く甕の口縁部片である。端部上面には明瞭な平坦面が見られる。外面にはLRの単節縄文を施文後、鋸歯状に近い波状文と直線文を平行する2本の沈線で描き、沈線間の縄文を磨消している。縄文は撚りが弱く無節に見える箇所もある。にぶい褐色、片岩や石英の岩片、小礫を含む堅い焼きの土器である。33にはLRの単節縄文施文後、3本の沈線が加えられている。最下段の沈線は他と平行せず、あるいは何らかの文様をなすのかもしれない。にぶい褐色を呈し、外面は黒みを帯び、やはり硬質である。

34・35もくびれが微弱で口縁部がわずかに外反する器形の甕になろうか。LRの単節縄文のみ施されており、35では、くびれ部付近から無文部になるようである。にぶい橙色で、砂粒・小礫を含む。

36は口縁部が大きく開く甕あるいは深鉢である。端部上面に平坦面を有し、連続する押捺が加えられている。外面には斜位の条痕が施されている。条の断面はV字状で、深浅がある。内面には斜位のケズリが加えられ、砂粒移動の痕跡が見られる。にぶい橙色を呈し、片岩や石英の岩片を含む堅い焼きの土器である。37の外面には、横位の条痕が施されている。

38～43は、筒形土器と思われる体部片である。38～40には、縄文が施されており、磨消手法により無文部が作出されている。縦横の帯状文が組み合わさり複雑な文様が構成される類であろう。41・42

は浅黄橙色、他はにぶい橙色である。43には沈線のみで重四角文が描かれている。沈線は、幅３㎜前後、深く彫り込むような施文が特徴になる。明赤褐色を呈し、砂粒・小礫を含む。焼成良好で硬質の土器である。

44には、短沈線が加えられた縦長瘤状の貼付け文が付されている。貼付け文を中心に沈線が施され、沈線間の一部には単節縄文が痕跡的にみとめられる。にぶい橙色を呈し、小礫を含む。

45は脚部片である。台付浅鉢などの脚台になるのであろう。脚端径は推定で９㎝前後である。破片上端は厚みを増し、円孔の痕跡をとどめる。外面には沈線が巡らされ、脚端にかけて縄文が施文されている。縄文はＬの無節縄文と思われるが、局所的に節があるようにも見え、単節縄文の可能性もある。にぶい橙色を呈し、片岩や石英の岩片を含む。

46・47は、帰属時期が限定できない口縁部片、胴部片である。46には半截竹管などによる２本１単位の斜位の沈線が施され、47には交差するやや不規則な数本の平行沈線が施されている。46はにぶい橙色、47は褐灰色を呈し、砂粒・小礫をかなり含む。とくに47は、縄文時代前期後半あたりの土器の可能性も考えられる。

以上で記載を終えるが、全体としていわゆる「神保富士塚式」（石川　2003）に類似する資料であることは間違いない。ただし、違いも見られるようである。第１に、壺・甕ともに条痕の施された資料が極めて少ないこと、また「神保富士塚式」の場合、池上式を伴うが、今回報告する資料は、確実に池上式と認定できる資料に乏しいことが指摘できる。池上式の可能性があるのは、15や19の壺頸部片、池上遺跡で類例が出土している45の台付鉢などであろうが、「神保富士塚式」ほど共伴関係は明瞭ではない。第１・２の特徴とも関連して、壺の頸胴部の文様片の多くが２、３条の平行沈線と縄文の組み合わせからなること、つまり筒形土器以外に見られる文様がいたって簡素であること、また沈線間に無文部が目立つ資料がやや多いことも特徴である。以上の違いは、条痕文の稀少さから見て、「神保富士塚式」との時期的なずれ、あるいは時間幅の違いに起因する可能性があるが、今後資料の充実を俟って改めて検討する必要がある。

⑶　石製品・石器［図70、写真33］

２点の石製品は、遺構外出土であるが、本来住居跡と関連する資料であろう。１の剣形石製模造品はⅣ次調査地点Ａ区出土で、質の良くない滑石製である。折損したのか、本来の加工痕なのか判然としない部分も多く、研磨も粗略である。２の石製紡錘車は、Ⅳ次調査Ａ区出土である。比較的硬質の蛇紋岩を用い、表裏面入念な研磨がなされ仕上げられている。

３～５の石器は、いずれも遺構外出土である。縄文土器と確実に認定できる土器が出土していないため、ひとまず弥生土器に伴う資料として提示する。

３はⅣ次調査Ｂ区出土である。、基部側の折損した打製石斧であろうか。片面に原礫面を残し、一端に刃部を作出し、側縁をつぶしている。４はⅣ次調査Ａ区出土である。礫器としたが、あるいは別の名称が適当なのかもしれない。図の下縁、短辺を刃部と見ることもできないではないが、鋸歯状の側縁が主に用いられたものと考えた。短辺の加工は粗略で、側縁の剥離は、明確に鋸歯状の刃部を作り出すべくなされているかに見える。５もⅣ次調査Ａ区出土である。透明度の高い黒曜石を用い、細かく丁寧な剥離により断面凸レンズ状の器体を作り上げている。

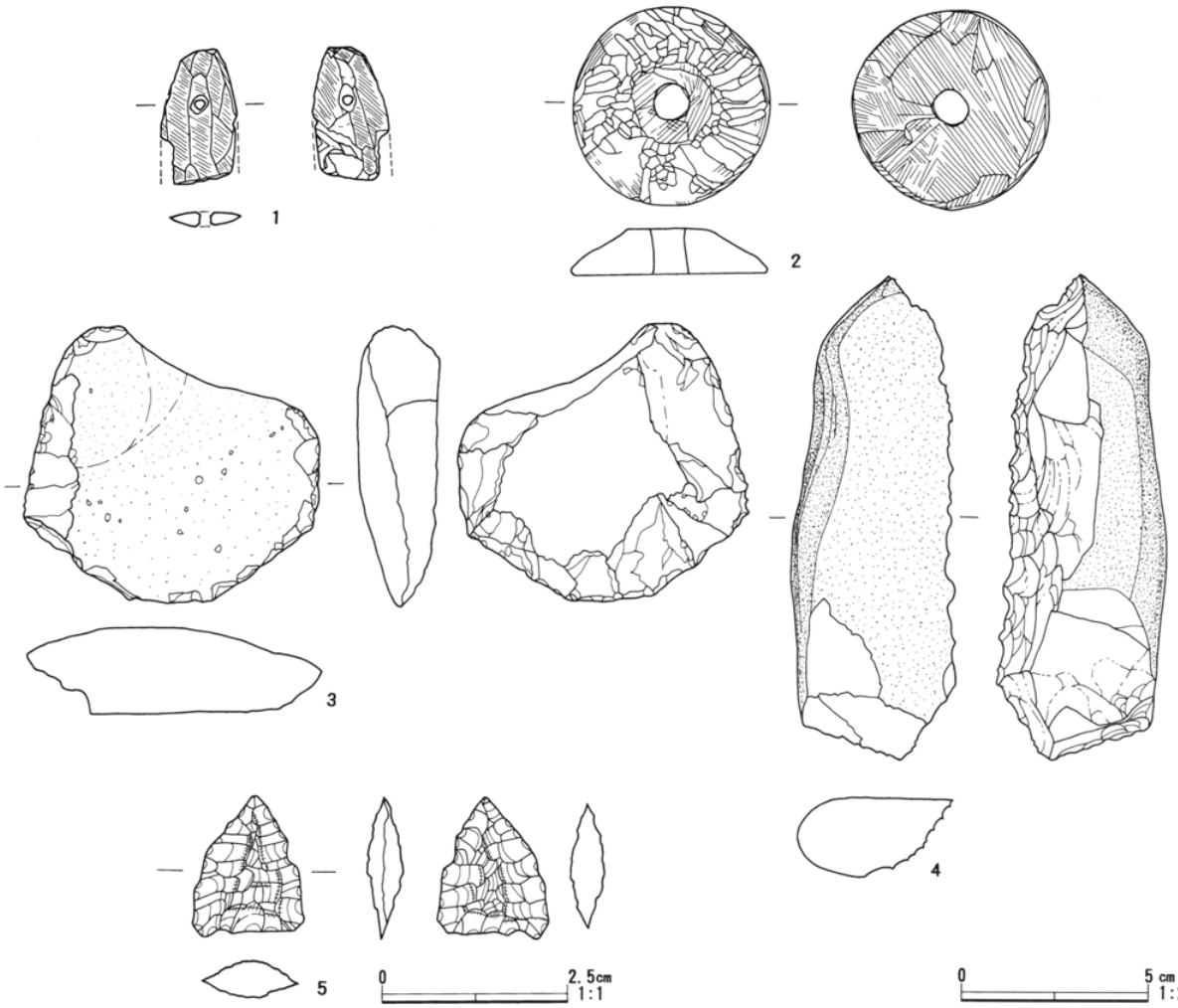


図70　四方田遺跡Ⅳ次調査　遺構外出土遺物(5)

遺構外出土遺物観察表

No.	種類	器種	法　量（cm・g）・色　調・石　材					備　考
1	石製品	剣形模造品	長さ：3.7	幅：1.9	厚さ：0.4	重さ：灰色	砂岩製	先端、基部および側縁の一部欠損。
2	石製品	紡錘車	残存長：5.3	残存幅：1.2	口径：0.9	重さ：灰色	蛇文岩製	
3	石器	打製石斧	残存長：7.2	残存幅：6.5	厚さ：2.1	重さ：黄灰色	流紋岩製	真中から折損した撥形の石斧か。
4	石器	礫器	残存長：13	残存幅：5.5	厚さ：2.1	重さ：黄灰色	滑石製	両面に原礫面、一端に両刃、一側縁に鋸歯状刃部。
5	石器	石鏃	長さ：1.8	幅：1.3	厚さ：0.5	重さ：暗紫灰色	黒曜石製	

III　久下東遺跡II次調査

久下東遺跡は古墳から奈良・平安時代にかけての集落遺跡である。集落の形成は古墳前期にはじまり、9世紀後半まで継続している。今回報告の久下東遺跡II次調査地点は先行するI次調査地点で検出の住居跡群とともに同一の集落をなすものである。また、道路を隔てて南側に展開する久下前遺跡では、これまでの3次にわたる調査により、計13軒の住居跡を検出しているが、同遺跡は地形のうえからも久下東遺跡に連続すると考えてよく、この二遺跡は本来同一の集落跡と見なすべきものである。久下東・久下前遺跡の各調査地点で検出している遺構の総計は、住居跡31軒、溝5条に及び、さらに周辺ではほかにも土師器片の採集される地点があり、集落跡は遺跡の立地する東西に長い微高地に沿って、さらに広く展開しているものと予測される。

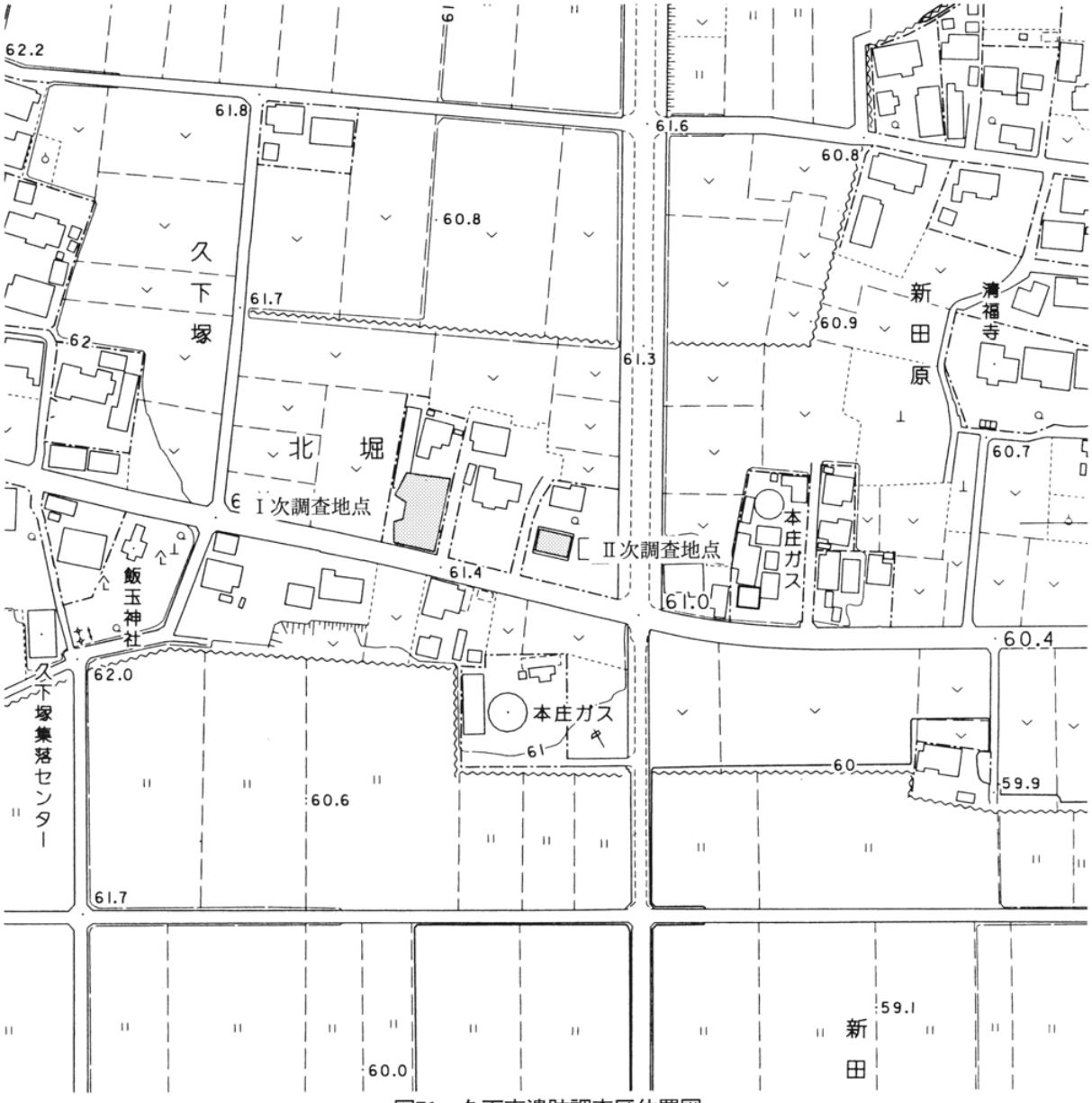


図71　久下東遺跡調査区位置図

1　調査に至る経過

平成５年５月13日、本庄市大字北堀字久下塚1,308番の１の土地408㎡において個人専用住宅建設の開発計画があり、この土地にかかる『埋蔵文化財所在および取扱いについて』の照会が本庄市教育委員会あて提出された。本庄市教育委員会において埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに埋蔵文化財の有無を確認したところ、同地は久下東遺跡（53-064）の範囲に含まれることが明らかとなった。同地はまた、昭和57年度に個人専用住宅の建設に伴い、本庄市教育委員会が調査を行った久下東遺跡Ⅰ次調査区の東方に近接し、遺構の存在する可能性が高いと判断された。

本庄市教育委員会では以上の状況をふまえ、平成５年５月17日付け本教社発第48号にて事業主体者あて『埋蔵文化財の所在について』の回答を送付し、

１．照会のあった土地については久下東遺跡（53-064）の範囲内に所在することから現状保存が望ましいこと

２．やむを得ず現状変更を実施する場合は、文化財保護法第57条の２の規定により、文化庁長官あて『埋蔵文化財発掘届』を提出し、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること

３．本回答後は関係機関との協議を徹底すること

の旨を伝達した。

その後、本庄市教育委員会では、事業主体者との間で、当該埋蔵文化財の取り扱いについて協議をを行い、住宅建設部分にかかる約187㎡について、遺跡の範囲確認を目的する試掘調査を実施することとなった。試掘調査は平成５年６月10日から６月11日までの期間で行われた。その結果、現地表から約0.4mの深さで奈良・平安時代の住居跡と時期不詳の土壙・ピットなどの遺構が全体に分布していることが明らかになり、遺物も土師器・須恵器片を中心に各所で検出された。

この試掘調査の結果を受け、本庄市教育委員会では当該埋蔵文化財の取り扱いについて、引き続き事業主体者と協議を行ったが、他に適地がなく、住宅建設部分について、やむをえず記録保存を目的とした全面発掘調査を行うこととした。

発掘調査のための手続きについては平成５年６月15日付けで事業主体者から文化財保護法第57条の２第１項の規定による埋蔵文化財発掘の届出が提出され、本庄市教育委員会ではこれを受けて、平成５年６月18日付け本教社発第113号にて同届出を埼玉県教育委員会あて進達するとともに、文化財保護法第98条第１項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を埼玉県教育委員会を経由して文化庁長官あて提出した。これに対し、平成５年７月12日付け教文第３-177号にて埼玉県教育委員会から『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知があり、本庄市教育委員会ではこれを受けて、平成５年７月21日付け本教社発第145号にて事業主体者あて伝達した。

現地での発掘調査は、本庄市教育委員会が調査主体となり、平成５年６月24日から平成５年８月11日までの期間で実施した。

2　調査の方法と経過

a．調査の方法

今回調査の対象としたのは開発申請地のうち住宅建設にかかる約187㎡である。当該部分には事前の試掘調査によって住居跡、土壙、ピットが検出されており、現地表から遺構確認面までは約40㎝前後を測ることが知られていた。また、遺構確認面の上層には遺物包含層が存在し、さらに、耕作によって、表土中にも若干の遺物の混入が認められた。このため、当初から人力によって遺物を検出しつつ、表土除去、遺構確認の作業を行った。記録については国土座標系により遺構平面図・遺物分布図１/20、遺物出土状況１/10で行ったほか、必要な写真の撮影を実施した。

b．調査の経過

調査は平成５年６月24日から平成５年８月11日までの期間で実施した。以下、日付をおって調査の経過を記すこととする。なおこの間、土・日曜日、祭日は休日とし、雨天の場合も作業を中止した。

６月24日(木)　調査区の設定、調査区周りの囲柵作業、機材収納用テントの設営などを実施。

６月25日(金)　人力により調査区の表土除去作業とともに遺構確認作業を実施。表土中から土師器の小片多数と須恵器片若干を検出。

６月28日(月)　前週に続き表土の除去、遺構確認作業を継続。表土中から土師器・須恵器片を検出。住居跡、土壙を確認。

６月29日(火)　雨天のため作業中止。

６月30日(水)～７月２日(金)　表土の除去、遺構確認作業を継続。７月２日(金)夕方までに終了。湧水があり低い部分に水が溜まりはじめる。

７月５日(月)　雨天のため作業中止。

７月６日(火)　前日の降雨により調査区が全面冠水する。水中ポンプを導入し終日排水作業。

７月７日(水)　朝の段階で再び全面冠水。排水作業完了後、再度、遺構確認作業を実施。住居跡４、土壙２、井戸跡２を検出。

また、かつて桑畑として利用されていたためか、桑の根の抜痕と思われるピット状の攪乱が全面的に検出される。

基準点基本杭打ち、３ｍピッチでの細部グリッド杭打ち作業を実施。

７月８日(木)～７月９日(金)　SI-01・02の調査。湧水が著しく、遺物を出土位置にとどめておくことが不可能な状態となる。

７月12日(月)　雨天のため作業中止。

７月13日(火)　降雨と湧水のため全面冠水。排水作業終了後、SI-01・02の調査を継続。SI-01の調査を終了。土層ベルト、遺物土柱は流水のためことごとく崩落する。

７月14日(水)　SI-02の調査を継続・終了。SI-03およびSK-01の調査を開始。

湧水が激しいため、調査区中央と壁際に水抜溝を掘削。

７月15日(木)～７月20日(火)　湧水の激しさは変わらず、終日排水作業と平行しながらの調査が続く。

SI-03および周辺の攪乱群の調査を継続。７月20日(火)夕方までにSI-03調査を終了。

7月21日(水)　SI-04の調査を開始。

7月22日(木)　SI-04の調査を継続。SW-01・02の調査を開始。

7月23日(金)　SI-04の調査を終了。SW-01・02の調査を継続。

7月26日(月)　SW-01・02の調査を継続。

7月27日(火)　SW-01・02は湧水のため深さ1.0m前後までの覆土を調査できたに過ぎない。遺物は皆無であった。

7月28日(水)　調査区の全面清掃。

7月29日(木)　全景写真、個別遺構写真の撮影。撮影終了後、調査区全面に平面実測用の水糸張りを実施。

7月30日(金)　遺構平面実測および土層断面実測を開始。一部発掘機材・出土遺物の搬出作業を実施。

8月2日(月)　遺構平面実測を継続。土層注記を実施。

8月3日(火)　雨天のため実測作業中止。発掘機材の搬出作業を実施。

8月4日(水)　降雨と湧水のためまたも全面冠水。排水作業終了後、遺構平面実測を継続。夕方までに終了。

8月5日(木)　遺構平面実測をもとに調査区全面のレベリング作業を実施。

8月6日(金)～8月9日(月)　雨天のため作業中止。

8月10日(火)　出土遺物搬出、発電機、水中ポンプの清掃、機材収納用テントの解体撤収作業を実施。

8月11日(水)　調査区周りの囲柵の撤去、基準杭の抜去を行いすべての作業を終了。

3　調査の成果

II次調査で検出した住居跡4軒、土坑1基、井戸跡2基である。対象範囲が狭く、全体の形状の判明する住居跡は少ない。I次調査では古墳時代の住居跡が多くを占めたが、II次調査で検出した住居跡はすべて7世紀以降に該当する。

なお、II次調査では調査期間が梅雨時と重複し、周囲の水田にも水が湛えたられている時期であったことから、恒常的な激しい湧水に見舞われ、常時、排水を行いながらの作業となり、遺物・遺構の確認、土層の観察は困難をきわめた。これとともに、同地は近年まで桑の栽培が行われていたことから、桑の根の抜痕、抜痕した桑の根をまとめて投棄した攪乱、あるいは桑の根そのものが随所にあって、遺構の残存状態は劣悪であった。

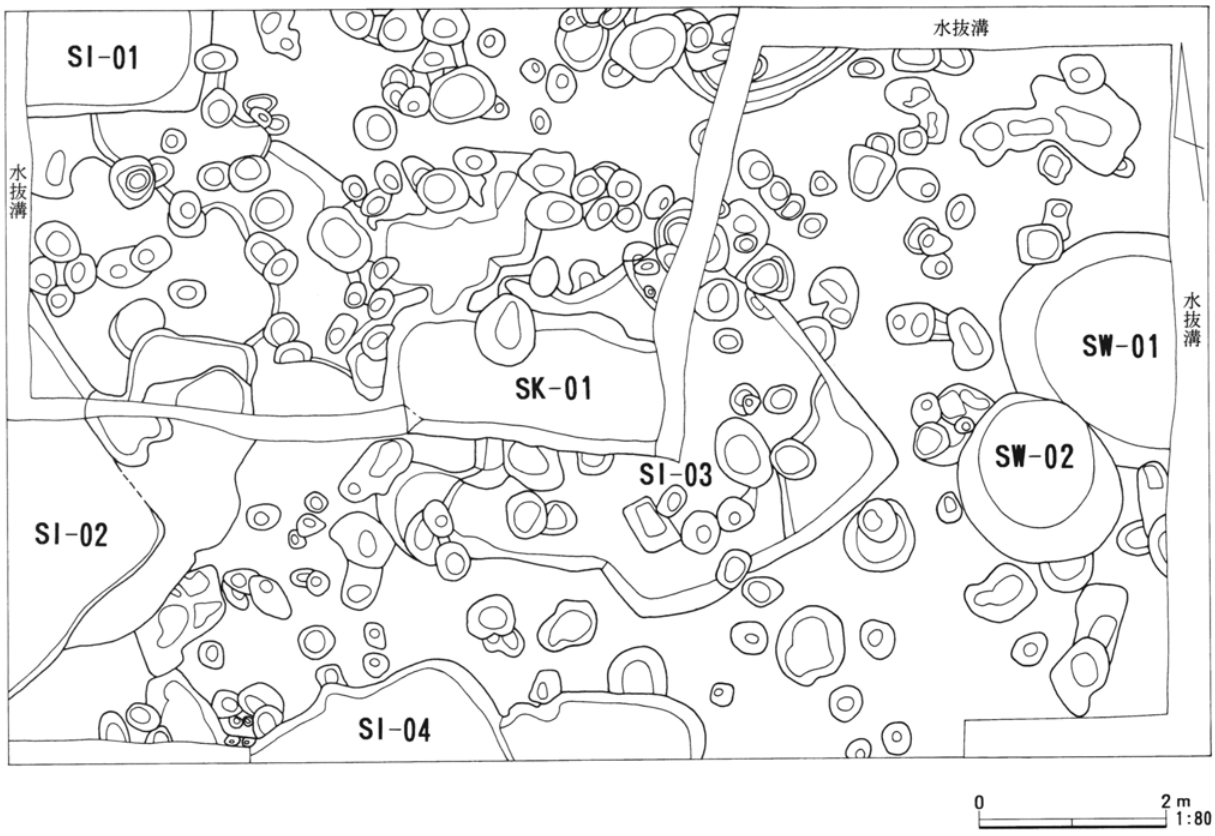


図72　久下東遺跡II次調査区全測図

a．SI-01

遺構［図73、写真36］

調査区の北西隅に位置する。住居跡南東隅付近の一部を検出したにとどまった。平面形は隅丸の方形を呈する。規模、主軸方位、カマド・貯蔵穴の有無などは不明である。

覆土は4層に分けられ、他に比べ最下層の5層がとくに厚いが、4層ともほぼ水平に堆積している。下層に堆積するロームブロックを含む暗褐色土［4・5層］と、上層に堆積するロームブロックを含む黒色土［2・3層］に大別される。

床面は平坦で、貼床をもたず、ローム面をそのまま床面とし、壁溝も存在しない。

カマド・貯蔵穴は検出されず、存在する場合は調査区外にあると考えられる。

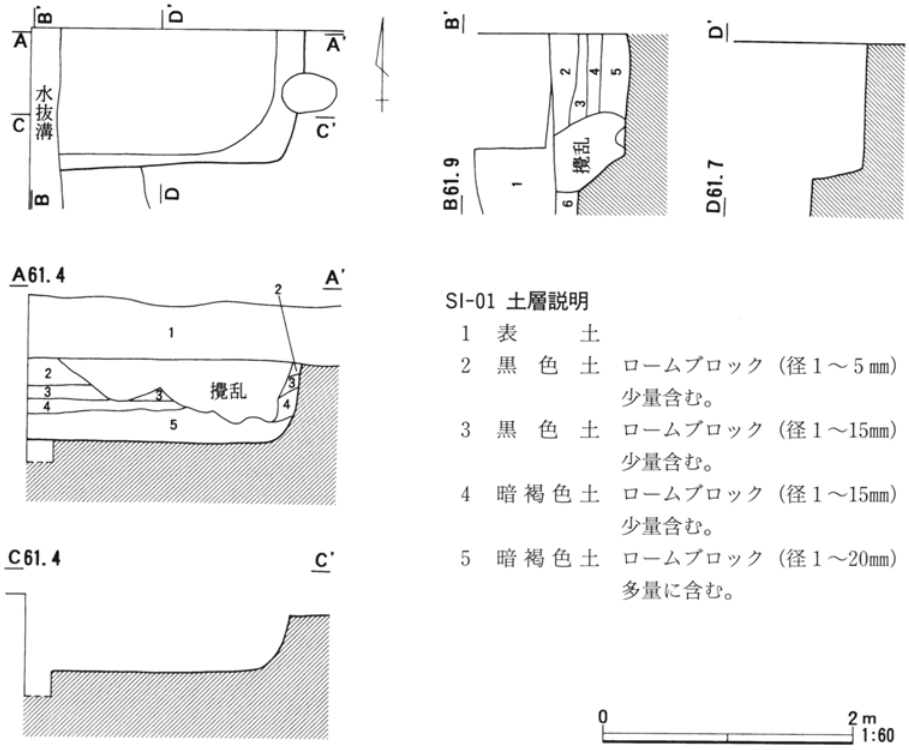


図73　久下東遺跡Ⅱ次調査　SI-01

ピットは確認できない。南東隅側の主柱穴が検出される可能性が考えられたが、精査によっても認められなかった。

遺物［図74、写真38］

床面直上の遺物はなく、覆土から土師器坏・甕が出土した。いずれも残存率が低く埋没の過程で周囲から混入したものと考えられる。

SI-01出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器坏	口径(11.0) 底径　— 器高　—	体部は緩やかに丸みを持ち、口縁部は微妙に屈曲し立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、幅1㎜余りの条線入る。体部ヨコナデ。	内—明褐色 外—橙色	1/6
2	土師器坏	口径(12.4) 底径　— 器高　—	下位に弱い稜を持ち、体部は丸みを持って立ち上がる。	外面—口縁部～体部上位ヨコナデ中位ヨコケズリ、下位ケズリ。内面—ヨコナデ。	内外—橙色	1/5
3	土師器坏	口径(14.8) 底径　— 器高　—	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はやや内彎する。	外面—口縁部～体部上位ヨコナデ体部下位ケズリ。内面—ヨコナデ。	内—橙色 外—明褐色	1/6
4	土師器坏	口径(17.2) 底径　— 器高　—	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部わずかに内傾する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ケズリ指押え痕。内面—口縁部・体部ヨコナデ。	内—橙色 外—明褐色	内面に炭化物付着。 1/4 1/6
5	土師器坏	口径(13.0) 底径　— 器高　—	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は内彎する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部上位粘土が引きずられて動いている。下位ケズリ。内面—ヨコナデ。	内外—橙色	
6	土師器甕	口径(21.8) 底径　— 器高　—	口縁部外反気味に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、輪積痕、頸部にナデ、ケズリの境に微段。体部ヨコのケズリ。内面—口縁部ヨコナデ体部ヨコ、ナナメのナデ。	内外—にぶい橙色	口縁部1/3残存

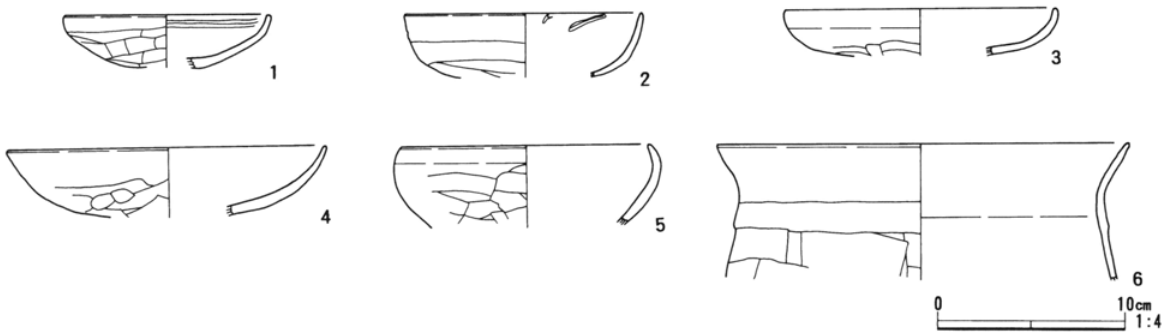


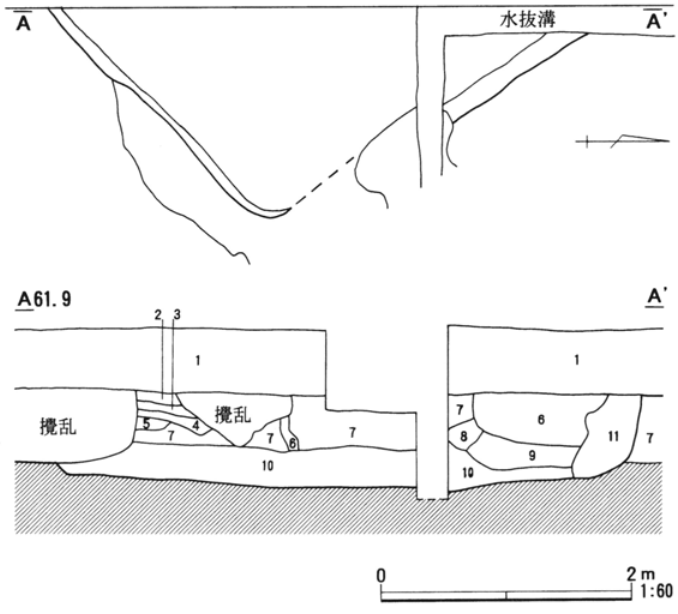
図74　久下東遺跡Ⅱ次調査　SI-01 出土遺物

b．SI-02

遺構［図75、写真36］

調査区の西壁際に位置する。住居跡東隅付近の一部を検出したにとどまった。平面形は比較的角の明瞭な方形を呈する。規模、主軸方位、カマド・貯蔵穴の有無などは不明である。

覆土はやや複雑な堆積を見せている。最下層の10層はロームブロックを多量に含む暗褐色土で、覆土としてはやや不自然な堆積層であり、これを貼床と見て10層上面を床面とすることも不可能ではないが、10層中には残存率の高い土師器坏等が含まれていることから断定は難しい。10層よりも上の各層も、桑の根などを含む最近の攪乱とは明確に区別されるものの、通常の住居跡の覆土としては自然な堆積状況でなく、後代の掘り込みによるものと思われる。10層下のローム面は中央が緩やかに窪ん



SI-02 土層説明

1　表　　土
2　黒　色　土　ロームブロック（径1～5㎜）少量含み、炭化物ブロック（径1～2㎜）、焼土ブロック（径1～3㎜）を多量に含む。
3　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）を少量に含む。
4　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）を多量に含む。
5　黒　色　土　ロームブロック（径1～5㎜）を多量に含み、炭化物ブロック（径1～5㎜）を少量含む。
6　灰褐色土
7　暗褐色土　ロームブロック（径1～15㎜）を多量に含む。
8　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）を少量含み、白色粘土ブロック（径1～5㎜）を少量含む。
9　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）を少量含み、白色粘土ブロック（径1～15㎜）を少量含む。
10　暗褐色土　ロームブロック（径1～20㎜）を多量に含む。
11　暗黒色土　炭化物ブロック（径1～5㎜）、焼土ブロック（径1～5㎜）を少量含む。

図75　久下東遺跡Ⅱ次調査　SI-02

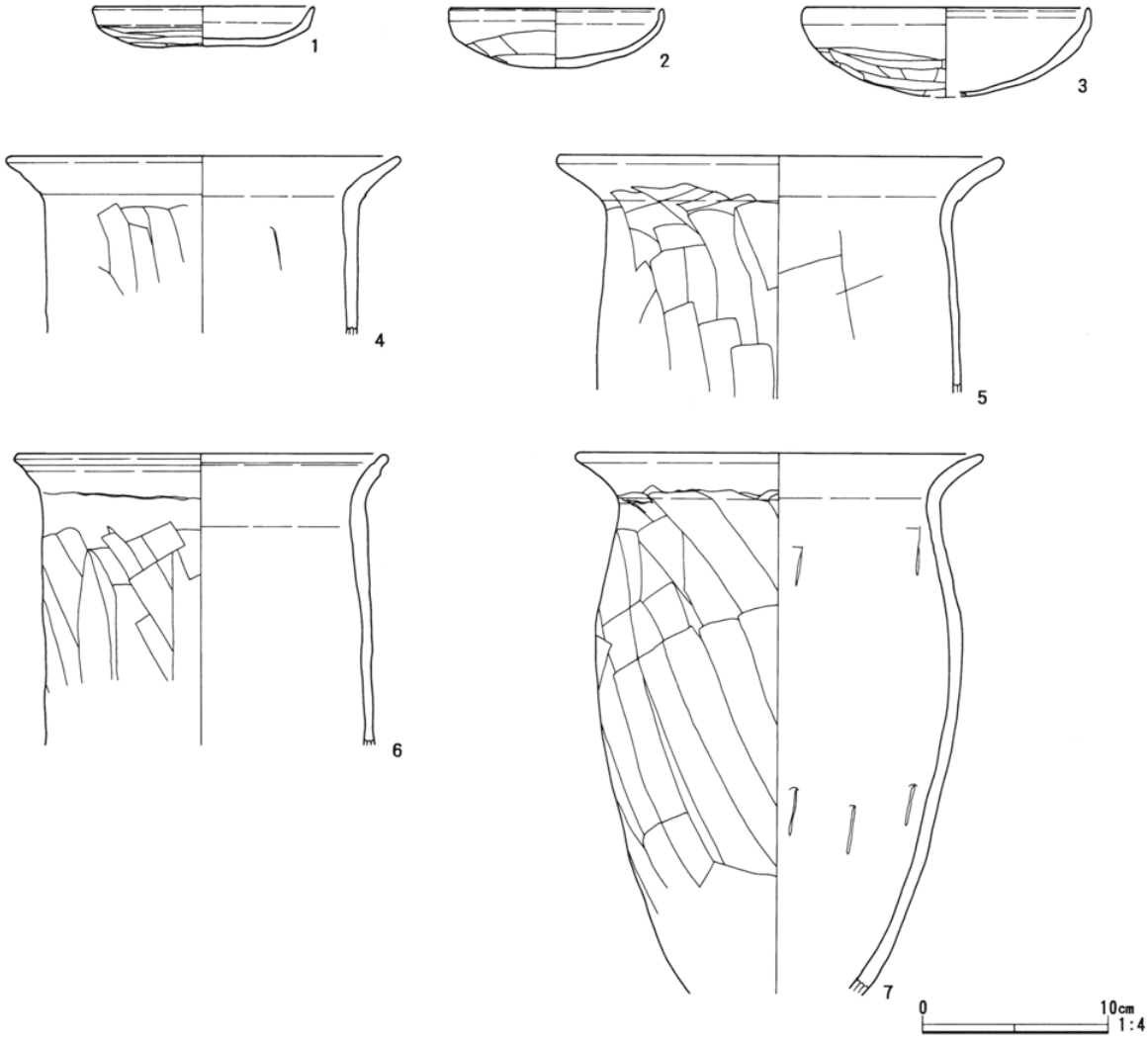


図76　久下東遺跡Ⅱ次調査　SI-02 出土遺物

SI-02出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 坏	口径 12.0 底径 (6.8) 器高 2.1	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は直線的に開く。	外面―口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面―ヨコナデ。	内外―橙色	1/2
2	土師器 坏	口径 11.4 底径 2.4 器高 3.2	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部内彎する。	外面―口縁部ヨコナデ、細線入る。体部上位ヨコケズリ。中位～底部ケズリ。内面―ヨコナデ。	内外―橙色	完形
3	土師器 坏	口径 15.3 底径 ― 器高 4.8	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部内彎する。	外面―口縁部ヨコナデ、体部上位指押さえ、浅いヨコナデ、中位～底部ケズリ。内面―ヨコナデ。	内外―橙色	1/2
4	土師器 甕	口径(20.8) 底径 ― 器高 ―	膨らみの少ない胴部。口縁部は外反する。	外面―口縁部ヨコナデ、体部上位タテのケズリ（磨耗，剝落の為不明瞭）。内面―口縁部ヨコナデ、屈曲部ナナメ、ヨコのナデ、体部ナナメを主とするナデ。	内外―橙色	口縁部1/2 残存
5	土師器 甕	口径(23.6) 底径 ― 器高 ―	胴部はわずかに丸みを持ち、口縁部は外反する。	外面―口縁部ヨコナデ、体部上位タテのケズリ。内面―口縁部ヨコナデ、体部ナナメのナデ。	内―橙色 外―明褐色	口縁部1/2 残存

SI-02出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
6	土師器 甕	口径 19.8 底径　— 器高　—	膨らみの少ない胴部。口縁部は外反する。	外面—口縁部ヨコナデ、横線状の凹みあり、輪積痕露出。体部タテ、ナナメのケズリ。内面—ヨコを主とするナデ。	内外—橙色	2/3
7	土師器 甕	口径(21.8) 底径　— 器高　—	胴部はやや膨らみ、口縁部は外反反する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部タテ、ナナメのケズリ。ケズリ痕にハケ様の擦痕あり。内面—ヨコナデ。体部下半接合部にごく一部ケズリ入る。	内外—橙色 外—明褐色	1/2

でいる。壁溝も存在しない。

カマド・貯蔵穴は検出されず、存在する場合は調査区外にあると考えられる。

ピットは確認できない。東隅側の主柱穴が検出される可能性が考えられたが、精査によっても認められなかった。

遺物［図76、写真38］

遺物は10層上面から10層中にかけて、土師器坏［1～3］、土師器甕［4～7］を検出している。土師器坏［2］などの完形品を含むが、坏、甕ともに遺物の示す年代には幅がある。

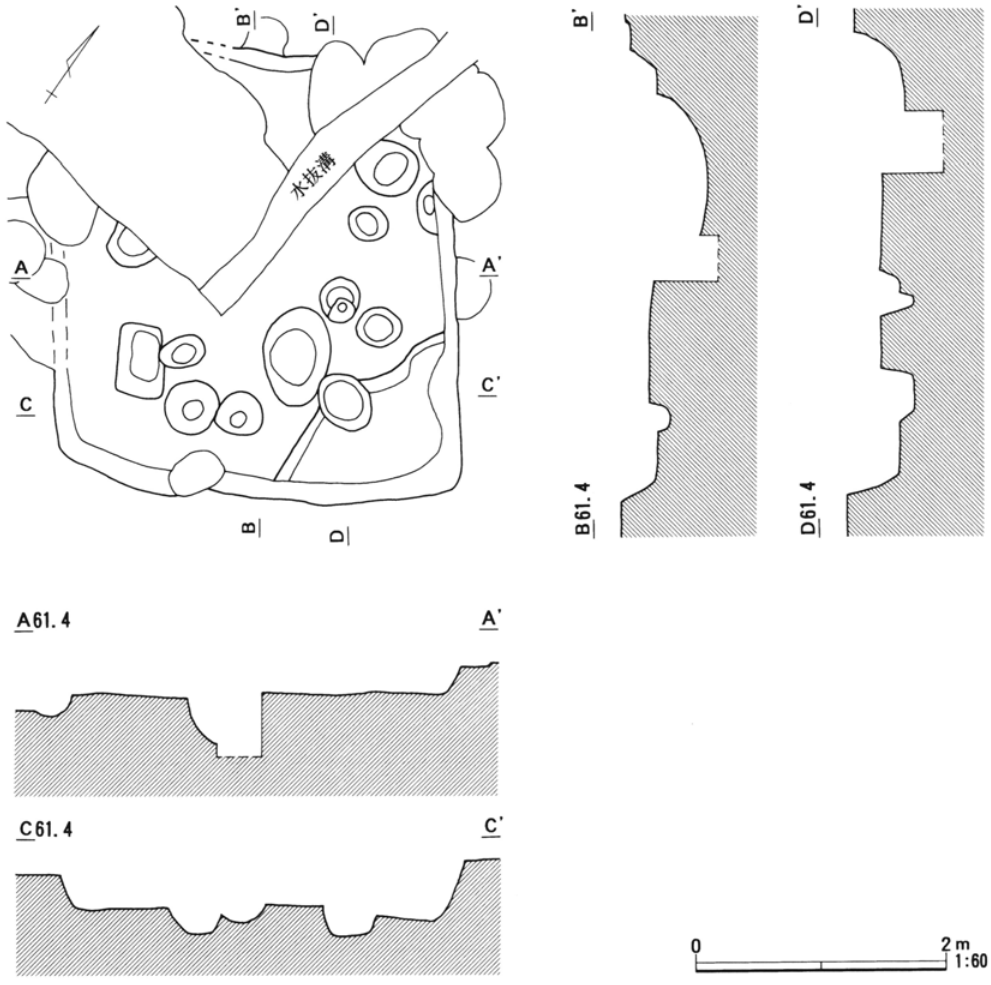


図77　久下東遺跡Ⅱ次調査　SI-03

c．SI-03

遺構［図77、写真37］

調査区の中央に位置する。住居跡の全体を検出したが、北隅および西隅を土坑と攪乱の重複により失っている。平面形は歪な隅丸長方形を呈し、規模は3.6×3.2mを測る。長軸の方位はN—35°—Wを示す。

覆土は単層で、細かなロームブロックを含む黒褐色土が堆積している。床面は平坦で、貼床をもたず、ローム面をそのまま床面とし、壁溝も存在しない。床面には大小のピットが散在しているが、主柱穴に該当するものは見当たらない。

遺物［図78］

遺物は覆土中から、微細な土師器片を多数出土している。図示した土師器坏［1］を含め、すべてが混入品と考えられる。

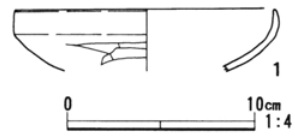


図78　久下東遺跡Ⅱ次調査
SI-03 出土遺物

SI-03出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器坏	口径(13.7) 底径　— 器高　—	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、下位ケズリ。内面—ヨコナデ。	内外—にぶい橙色	1／6

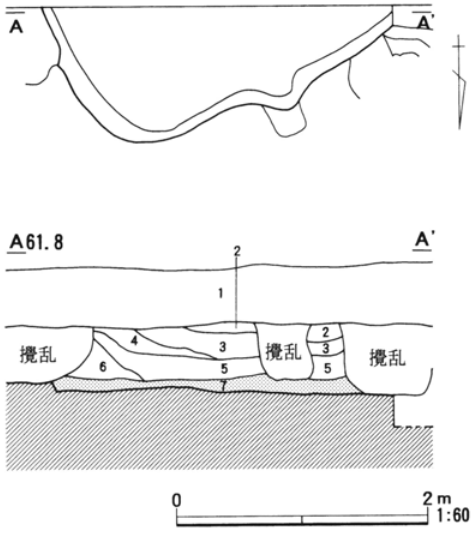
d．SI-04

遺構［図79、写真37］

調査区の南壁際に位置する。住居跡南東隅付近の一部を検出したにとどまった。平面形は隅丸の方形を呈する。規模、主軸方位、カマド・貯蔵穴の有無などは不明である。

覆土は5層に分けられ、壁際にはロームロックを多量に含む褐色土が堆積している。床面中央はロームと炭化物ブロックを含む黒褐色土で被覆され、さらに上層にはローム、炭化物、焼土などのブロックを含む黒褐色土が堆積している。

床は多量のロームブロックを含む暗褐色土を全体に敷き込んで貼床を形成している。床面の硬化の



SI-04 土層説明

1　表　　土
2　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）を少量に含む。
3　黒褐色土　ロームブロック（径1～15㎜）を少量に含む。
4　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）、炭化物ブロック（径1～15㎜）、焼土ブロック（径1～5㎜）を少量含む。
5　黒褐色土　ロームブロック（径1～5㎜）を多量に含み、炭化物ブロック（径1～5㎜）を少量含む。
6　褐　色　土　ロームブロック（径1～5㎜）を多量に含む。
7　暗褐色土　ロームブロック（径1～15㎜）を多量に含む。貼床層。

図79　久下東遺跡Ⅱ次調査　SI-04

度合いは湧水のため確認できなかった。壁溝は存在しない。

カマド・貯蔵穴は検出されず、存在する場合は調査区外にあると考えられる。

掘り方の底面には緩やかな起伏があるが、土坑・ピット状の落ち込みは存在しない。

遺物［図80］

遺物は覆土中から微細な土師器片を多数出土している。図示した土師器坏［1・2］も小片でこれらを含め、すべてが混入品と考えられる。

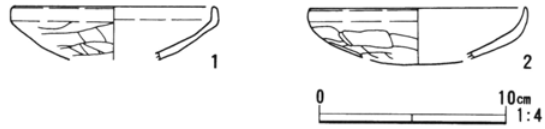


図80　久下東遺跡II次調査　SI-04 出土遺物

SI-04出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 坏	口径(10.2) 底径　— 器高　—	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部はやや内傾して立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ケズリ。内面—ヨコナデ。	内外—橙色	1/5
2	土師器 坏	口径(11.4) 底径　— 器高　—	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部はやや内彎する。	外面—口縁部ヨコナデ（砂粒少々移動）、体部ケズリ。内面—ヨコナデ。	内—橙色 外—明褐色	1/4

e．SK-01［図81、写真37］

調査区中央に位置しSI-03と重複する。覆土はSI-01と同様の細かなロームロックを多量に含む黒褐色土で、攪乱とは明確に区別されることから土坑として扱った。SI-01との切り合い関係は明確ではない。平面形は不整な隅丸長方形で、規模は長径3.0m、短径1.2m、確認面からの深さ0.6mを測る。

遺物は覆土中から土師器坏・甕の小片を出土した。

f．SW-01［図82、写真37］

調査区の東壁際に位置し、東側1/4程度が調査区外にある。湧水のため、確認面から1.0m程度ま

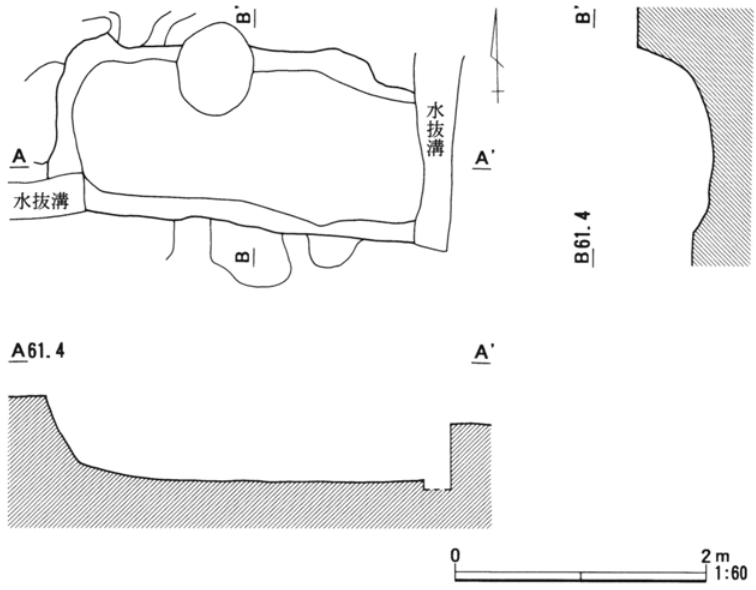


図81　久下東遺跡II次調査　SK-01

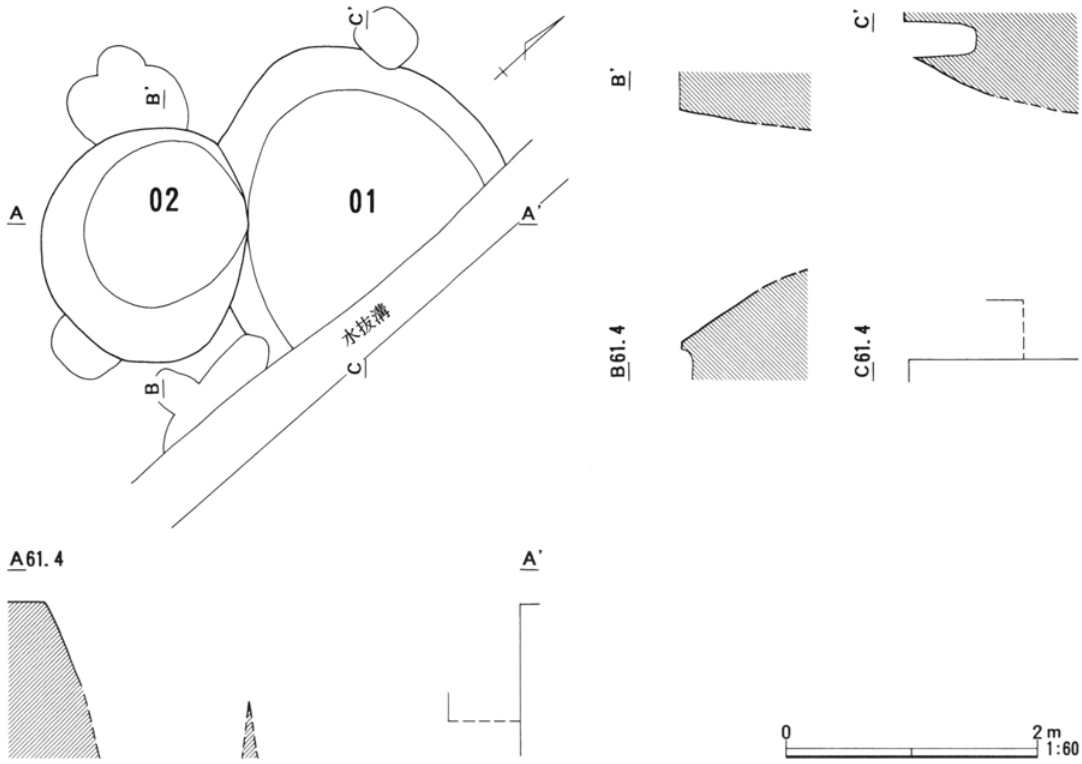


図82　久下東遺跡II次調査　SW-01・02

での調査にとどまった。覆土は上層に礫・ロームブロックを含む黒褐色土が堆積していた。確認面での平面形は北西―東南方向に長い楕円で、規模は長径が推定3.2m、短径2.5mを測る。

遺物は覆土中から土師器坏・甕の小片を少量出土したが、すべて混入品であり、本井戸跡の時期を示す資料は検出できていない。

g．SW-02［図82、写真37］

調査区の東壁近くに位置し、SW-01と重複する。湧水のため、確認面から1.0m程度までの調査にとどまった。覆土は上層にSW-01と同様の礫・ロームブロックを含む黒褐色土が堆積していた。確認面での平面形は北西―東南方向に長い楕円で、規模は長径3.2m、短径2.5mを測る。掘り方は南側を中心に西側から東側にかけての壁が傾斜をもつことから、この部分の崩落によって平面形が楕円を呈するものと推測される。

遺物は覆土中から土師器甕の小片を少量出土した。すべて混入品であり、本井戸跡の時期を示す資料は検出できていない。

h．遺構外出土遺物［図83、写真38］

表土と攪乱から出土した遺物を遺構外出土遺物として一括した。表土、攪乱からは多量の土師器片が出土しているが、ほとんどが表面の摩耗した小片であり、器種を特定できる資料は少ない。図示した7点も残存率の低いものが多い。年代も古墳時代から奈良・平安時代までの幅があるが、これまで久下東・久下前遺跡で検出している集落の年代から外れるものは含まれない。

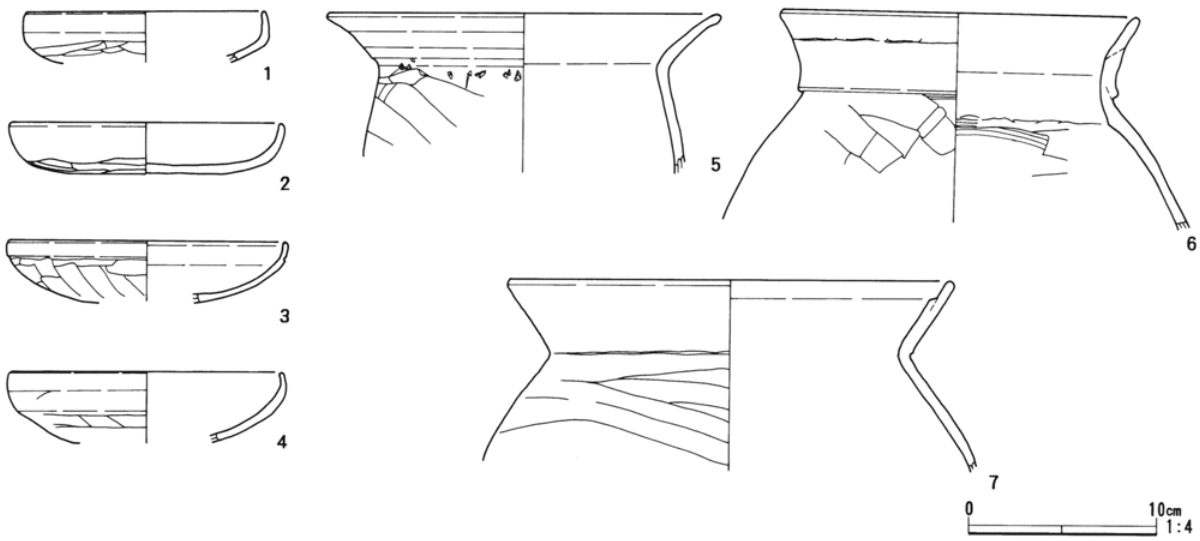


図83　久下東遺跡Ⅱ次調査　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 坏	口径(12.7) 底径　— 器高　—	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は直線的に立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、体部交叉するケズリ。内面—ヨコナデ。	内外—明褐色	1/8
2	土師器 坏	口径(14.3) 底径　8.2 口径(2.7)	浅い体部から、口縁部は内彎気味に立ち上がる。	外面—口縁部・体部ヨコナデにより粘土が動いた細かな亀裂あり。底面ケズリ。内面—ヨコナデ。	内外—橙色	1/2
3	土師器 坏	口径(14.6) 底径　— 器高　—	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は微妙に彎曲しながら立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、体部との境に凹線状のくぼみ。内面—ヨコを主とするナデ。	内—にぶい橙色 内—橙色	1/3
4	土師器 坏	口径(14.5) 底径　— 器高　—	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部内彎する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部上位ヨコナデ、微妙に砂粒動く。中位以下ケズリ。内面—ヨコナデ。	内外—橙色	1/8
5	土師器 甕	口径 21.0 底径　— 器高　—	口縁部わずかに外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、屈曲部ヘラ先の刺突が点在、体部ケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部ヨコ、ナナメのナデ。	内—橙色 外—にぶい橙色	口縁部1/2残存
6	土師器 甕	口径(18.7) 底径　— 器高　—	口縁部外反気味に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、輪積痕、体部上位ヨコ、ナナメのケズリ、部分的にハケ様の擦痕残る。中位ナナメを主とするナデ。内面—口縁部ヨコナデ体部ナナメのナデ、ハケ部分的に入る。	内外—明褐色	口縁部1/3残存
7	土師器 甕	口径(23.6) 底径　— 器高　—	口縁部直線的に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ケズリ(磨耗の為不明瞭)。内面—ヨコナデ。	内—明褐色 外—橙色	口縁部1/2残存

Ⅳ　ま と め

1．住居跡出土土器の諸特徴

以下では、四方田遺跡のII～Ⅳ次調査出土遺物の内、主に古墳時代中期の土器について、簡単なまとめを行うことにしたい。まず、比較的出土量の多い住居跡を選び、出土土器の特徴について記し、それらを比較・検討する。検討に当たっては、児玉地域の該期土器に関するこれまでの諸研究（恋河内1995・1996、中村1989・1999、立石他1982・1983など）を参考にした。

SI-05出土土器（図25：１～８）　図化できた土器は８点と少ないが、明瞭な特徴を備えている。ひとつは台付甕の残存であり、いまひとつの特徴は高坏の形態、調整手法などに見られる特徴である。

台付甕６は、胴部中位以下が長く、短い台部の付く台付甕で、胴部上位以下には部分的に条線の走る粗いケズリが加えられている。ケズリは使用部位がささくれた板のようなものでなされたらしく、条線の鮮明な部分ではハケ様に見える。６の台付甕が末期に近い特徴を備えていることは確かであろう。口縁部が短く直立し輪積痕をとどめる甕７も古い段階に限られる可能性がある。

長脚の高坏３は、比較的浅い坏部が大きく直線的に開き、接合部がくびれ、柱状部がわずかに膨らむ形態である。全体の形状、坏部の比較的密なミガキ、柱状部の細かな細線の入る面取り様のナデなども古い段階の特徴と見られる。また、共伴するか否か多少問題が残るが、小型高坏かと思われる脚部に透孔のある高坏接合部片２が出土している。脚部に円形の透孔を有する例は、他にはSI-３の高坏３・５、SI-９の器台５のみで、古い段階に限られると見てよい。いずれにせよSI-05出土土器が、今回報告例の内、古墳時代中期土器に関して最も古い様相を示すことは間違いない。

SI-06出土土器（図32：１～26、図33：27～33）　SI-06はSI-05を切って構築された住居跡であるが、出土土器の様相は大きく異なる。まず坏類が多く、小型の坩が１点と僅少であることが指摘できる。22はカマドの支脚に転用された高坏であり、高坏も相対的に乏しいとすることができる。

坏類は、屈曲なく全体に丸みをもつ椀状のもの、口縁部が内傾ないしは直立するもの、口縁部が外傾するものの３種からなり、口縁部が内傾、直立するものをはじめとして丸底化が進行していることが特徴のひとつである。口縁部が短く屈曲する坏は、法量、胎土も近似しており、屈折部直下の内面に鋭利な工具による弧状、切傷状の調整痕、整形痕が共通して見られる。口縁部が内彎する丸底の中型壺も新しい傾向を示す。高坏は坏部が深めで口径と底径の差が少なく、脚部が短いことが特徴的である。甕はなで肩の長胴気味の器形が目立ち、甑33の器形にも次代への傾斜がみとめられる。

SI-09出土土器（図39：１～12）　土器の数は多くないが、時期的な特徴をもつと思われるため例示しておきたい。器種構成の特徴としては、坩・高坏が量的に高い比率を占めることに尽きる。この点で、後述するSI-15出土土器などと共通するが、高坏の形態などに違いが見られる。高坏６～８は、例えばSI-15の高坏２～６に比べ坏部が浅く、開きが大きい。脚部では接合部が細く長脚であり、この点ではSI-05の高坏の形態に近い。坏１・器台５・高坏11は、時期的に異なると見ることもできる。

SI-14出土土器（図52：１～17、図53：18～22）　ほとんどの器種が出そろっており、器種構成の一端をうかがい知ることができる。坏類と高坏が数の上で拮抗しており、坩が１点にとどまることが一見して判る特徴である。器種別の特徴としては、坏類が椀状の１を除いて、口縁部が短く外折する形

態ばかりであること、やはり１を除いていずれも小さな平底ないしは凹み底となること、高坏には低脚の傾向が見られることなどがあげられる。また口径に比し器高の低い甕15の底部がいわゆる輪台状を呈すること、甑21はSI-02の甑７やSI-06の甑33に連なる形態的特徴をもつことが注意される。

SI-15出土土器（図55：１～14、図56：15～33）　器種構成の特徴は、坏類が見られず、高坏と坩がほぼ同量出土していることに尽きる。高坏には有段高坏が３点含まれ、坩の多くは口縁部が比較的長く、暗文様のミガキの施された23が含まれる。台付鉢と呼称される１は、内外面にミガキが多用される点は高坏と共通するが、器形的には口縁部が外折する坏に類似しており、位置付けがむずかしい。

２．住居跡出土土器の推移

以上気付いた点を列記したが、出土土器の器種構成のみから見ても、遺構間にかなりの時期差が見込まれることは明らかである。遺構外出土土器を含めれば遺跡全体としての時間幅は大きいが、住居跡出土土器に限るなら、古墳時代中期、末期的な台付ハケ甕の残存する段階からSI-11、模倣坏の定着、盛行する段階までの期間におさまるとしてよい。主要な時期に関しては、器種構成の推移のみからだけでもおおよその土器様相の推移の見通しを立てることができる。

まず坏類がほとんど見られず、坩、高坏が量的に卓越し、また両者が数の上で近い段階と坏類が定着するとともに坩、高坏がともに少数となる２つの段階に大きく分けることができる。前者には、上に取り上げた住居跡出土土器群の内、SI-05・09・15出土土器が該当し、後者としてはSI-06・14出土土器を充てることができる。前者はさらに台付ハケ甕の残存と高坏が古式の形態を保つSI-05の段階と高坏の低脚化が進んだSI-15の段階に分けられ、SI-09出土土器は両者の中間に位置付けられる。

SI-06・14の段階は、坏類が定着する段階と見てよいが、SI-06・14出土の坏類のみに限っても明瞭な違いがみとめられる。SI-14出土の坏１～６は、SI-06の坏１～15に比し、全体的に法量が小さくバラツキも大きい。またSI-06出土の坏類には、次期への傾斜が著しい、口縁部が内傾もしくは直立するものが含まれ、その種の形態の坏類を中心に丸底化が進んでいることなどの違いが指摘できる。SI-06出土土器の場合、高坏21のように低脚化とともに坏部の口径／底径が小さい例も含まれ、また短頸丸底の坩（中型壺）18～20が見られ、甑33も次期のそれと近似するなど、SI-14に比し明らかに新しい特徴を備えた土器が見られる。SI-11の模倣坏２は、SI-06出土の坏類に後出するものであろう。

以上より今回報告する四方田遺跡の住居跡出土土器は、SI-05→SI-09→SI-15→SI-14→SI-06の５段階の変遷、推移の過程を踏んだものと見ることができる。他の住居跡出土土器に関しては、SI-05出土土器の段階には、SI-01・07出土土器が、SI-09出土土器の段階には、SI-03・13出土土器が、SI-15出土土器の段階には、SI-04・17出土土器が、SI-14出土土器の段階には、SI-18出土土器が、SI-06出土土器の段階には、SI-02・16出土土器がおおむね併行する。SI-10出土土器は、SI-06出土土器の直後のさらに丸底化が進んだ段階、そして最終的にSI-11出土土器に代表される模倣坏が定着、盛行する段階を迎えるものと考えられる。今回検出した住居跡は、以上の土器様相から見て、古墳時代中期初頭に近い段階から後期にかけ継続的に営まれた集落の一角であるとしてよいであろう。

器台の位置付けやSI-07の高坏１のような異系統土器の問題をはじめとし、器種、器形ごとの形態変化、何よりも住居跡出土土器群全体の位置付けの問題など未解決の問題が多々残るが、積み残した課題については、周辺諸遺跡出土土器との比較を進める中で、改めて考え直したいと考える。

【引用・参考文献】

坂野和信　1988「和泉式期土器の様相―竈導入期の土器群―」『本庄市立歴史民俗資料館紀要』第２号　本庄市立歴史民俗資料館　本庄.

恋河内昭彦　1993『川越田Ⅱ』児玉町文化財調査報告書第５集　児玉町教育委員会　児玉.

恋河内昭彦　1995『飯玉東Ⅱ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋』児玉町文化財調査報告書第17集　児玉町教育委員会　児玉.

恋河内昭彦　1996『辻堂遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第19集　児玉町教育委員会　児玉.

恋河内昭彦　2003『大久保遺跡』児玉町遺跡調査会報告書第14集　児玉町遺跡調査会　児玉.

小久保　徹・柿沼幹夫ほか　1978『東谷・前山２号墳・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集、埼玉県教育委員会　浦和.

岩瀬　譲　1998『地神／塔頭』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第193集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団　大里.

岩田明広　1998『今井条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団　大里.

中村倉司　1989「関東地方における竈・大形甑・須恵器出現時期の地域差」『研究紀要』第６号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　大里.

中村倉司　1999「埼玉県における５世紀代の土器―和泉式土器の行方―」『東国土器研究』第５号　東国土器研究会　藤沢.

増田一裕　1987『東富田遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第10集　本庄市教育委員会　本庄.

増田一裕　1989『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第14集　本庄市教育委員会　本庄.

増田逸朗・小久保　徹・柿沼幹夫ほか　1979『下田・諏訪』埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第21集　埼玉県教育委員会　浦和.

松本　完　2002『久下前遺跡第３地点発掘調査報告書―市道8501線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』本庄市埋蔵文化財調査報告第25集　本庄市教育委員会　本庄.

松本　完　2004『九反田（Ⅲ次調査）・観音塚（Ⅲ次調査）―東西通り線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』本庄市埋蔵文化財調査報告第28集　本庄市教育委員会　本庄.

鈴木徳雄　1983「古代北武蔵における土師器製作手法の画期」『土曜考古』第７号　土曜考古学研究会　桶川.

鈴木徳雄　1984「いわゆる北武蔵系土師器坏の動態―古代北武蔵における土器生産と交易―」『土曜考古』第９号　土曜考古学研究会　桶川.

立石盛詞ほか　1982『後張　本文編・図版編Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　大里.

立石盛詞ほか　1983『後張　本文編・図版編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　大里.

利根川章彦　1999『西富田・四方田条里』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第224集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団　大里.

写　　真

四方田遺跡Ⅱ次調査
調査前全景［南から］

四方田遺跡Ⅱ次調査
調査区全景［南から］

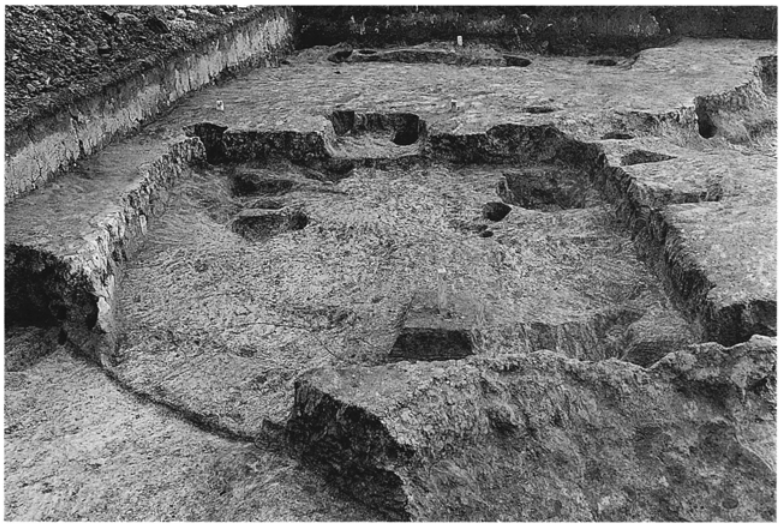
四方田遺跡Ⅱ次調査
調査区全景［北から］

写真　2

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-01 床面検出状況［南から］

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-02 遺物検出状況［西から］

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-02 床面検出状況［西から］



四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-02 掘り方検出状況［西から］

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-02 カマド遺物検出状況

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-02 カマド検出状況

写真　4

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-02 貯蔵穴遺物検出状況

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-03 遺物検出状況［南西から］

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-03 床面検出状況［南西から］

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-04･05 遺物検出状況［西から］

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-04･05 掘り方検出状況［南西から］

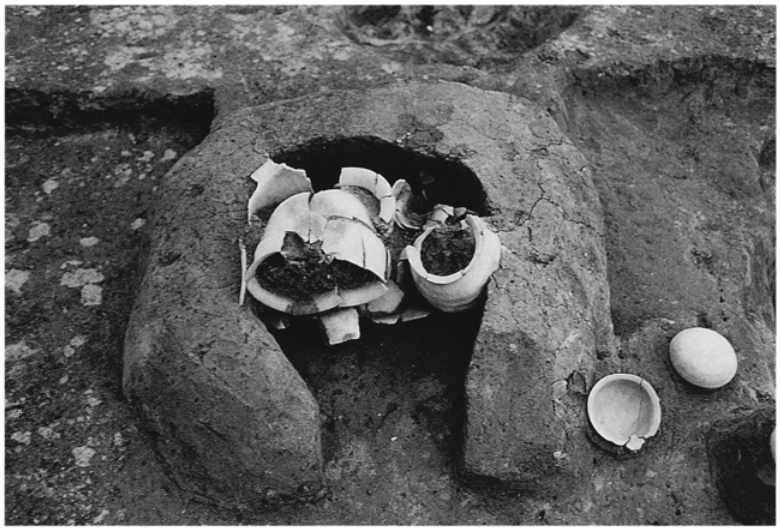
四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-04･05 掘り方検出状況［南東から］

写真　6

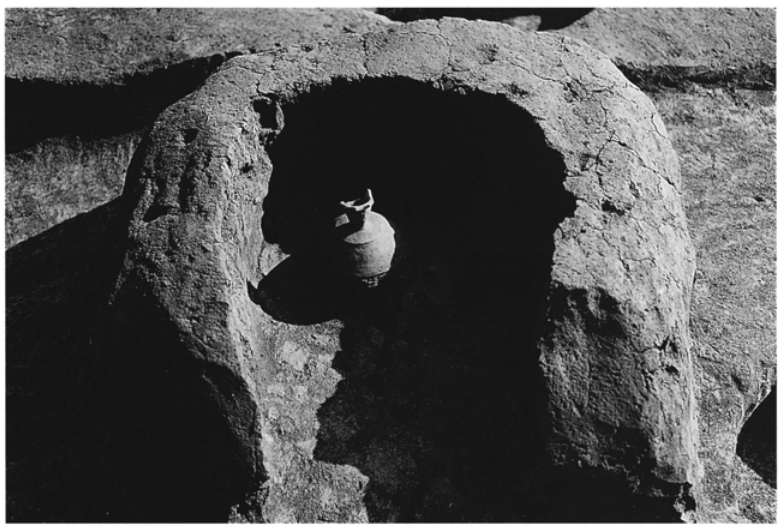
四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-05 貯蔵穴遺物検出状況

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-06 遺物検出状況［南から］

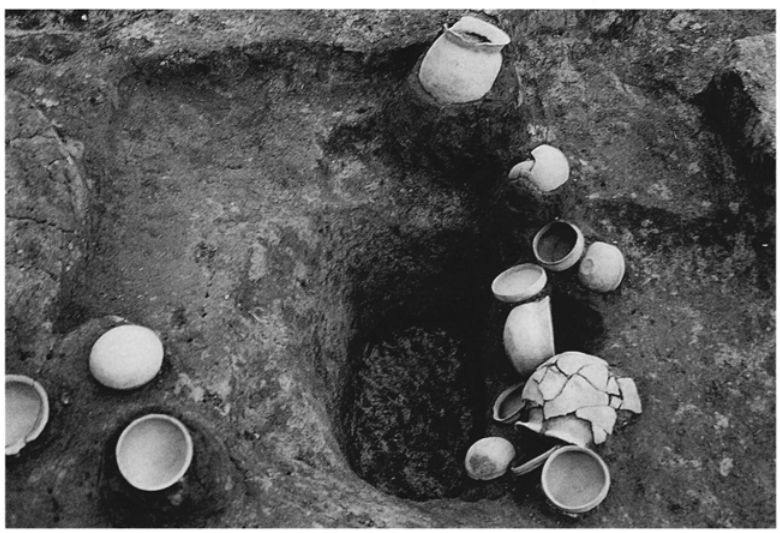
四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-06 掘り方検出状況［南から］



四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-06 カマド遺物検出状況



四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-06 カマド検出状況



四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-06 貯蔵穴遺物検出状況

写真　8

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-07･08･09 遺物検出状況［東から］

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-07･08･09 床面検出状況［東から］

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-07･08･09 掘り方検出状況［東から］

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-07･08･09 掘り方検出状況［東から］

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-09 貯蔵穴遺物検出状況

四方田遺跡Ⅱ次調査
S1-09 貯蔵穴検出状況

写真　10

四方田遺跡Ⅳ次調査
調査前全景［南から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
Ｂ区全景［東から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
Ｂ区全景［西から］

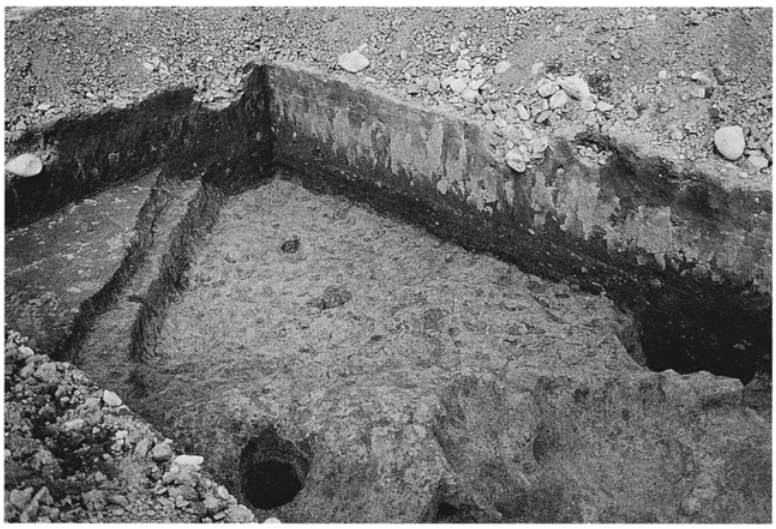
四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-11 遺物検出状況［西から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-11 遺物検出状況［北から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-11 床面検出状況［北から］

写真　12

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-11 掘り方検出状況［北から］



四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-12･13 掘り方検出状況［南東から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-12･13 掘り方検出状況［南から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
Ａ区全景［北から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
Ａ区全景［南から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
Ａ区全景［南西から］

写真　14

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-14 床面検出状況［西から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-14 床面検出状況［南西から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-14 床面検出状況［南東から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-14 掘り方検出状況［西から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-14 掘り方検出状況［南から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-14 掘り方検出状況［南東から］

写真　16

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-14 カマド遺物検出状況

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-14 カマド遺物検出状況

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-14 カマド遺物検出状況

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-15 床面検出状況［北西から］

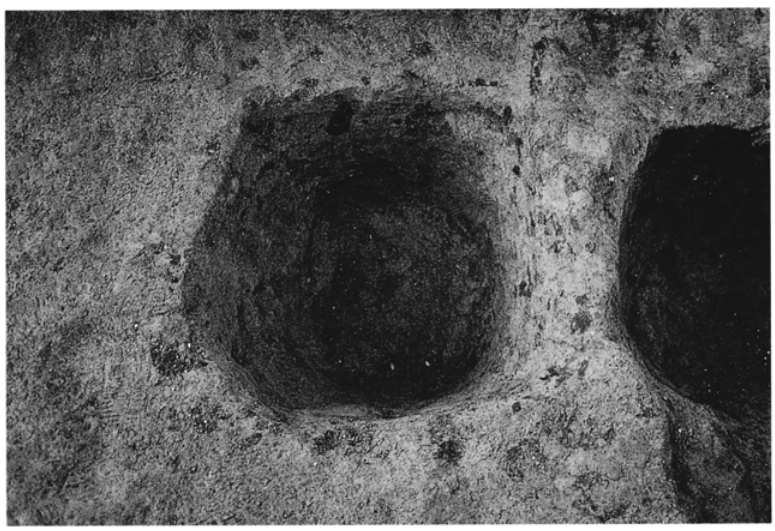
四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-15 掘り方検出状況［北から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-15 掘り方検出状況［南西から］

写真　18

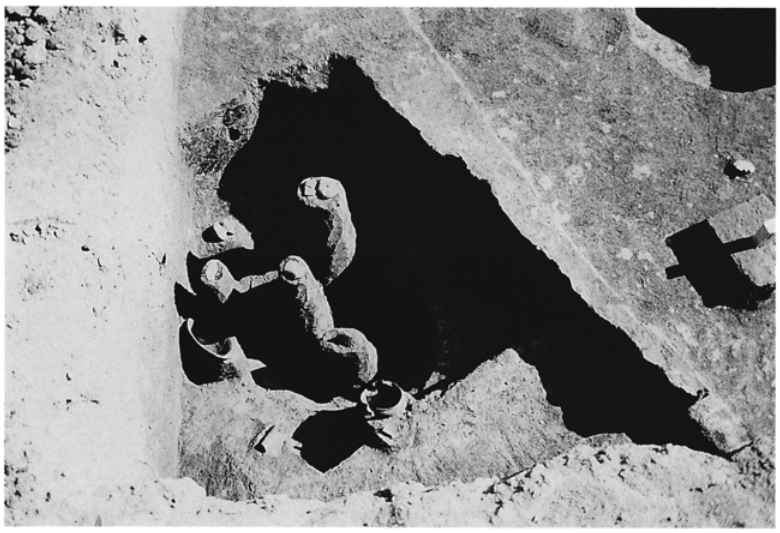
四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-15 貯蔵穴検出状況

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-15 貯蔵穴遺物検出状況



四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-15 貯蔵穴検出状況

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-16 遺物検出状況［東から］



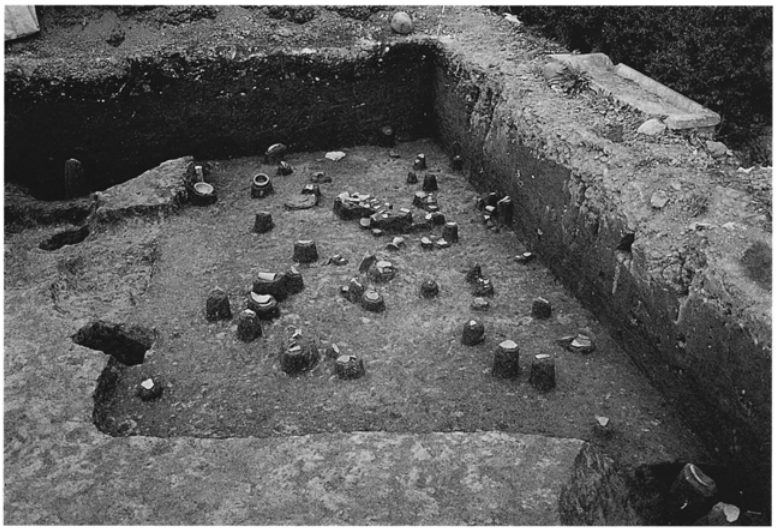
四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-16 遺物検出状況［西から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-16 掘り方検出状況［西から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-17 床面検出状況［南東から］

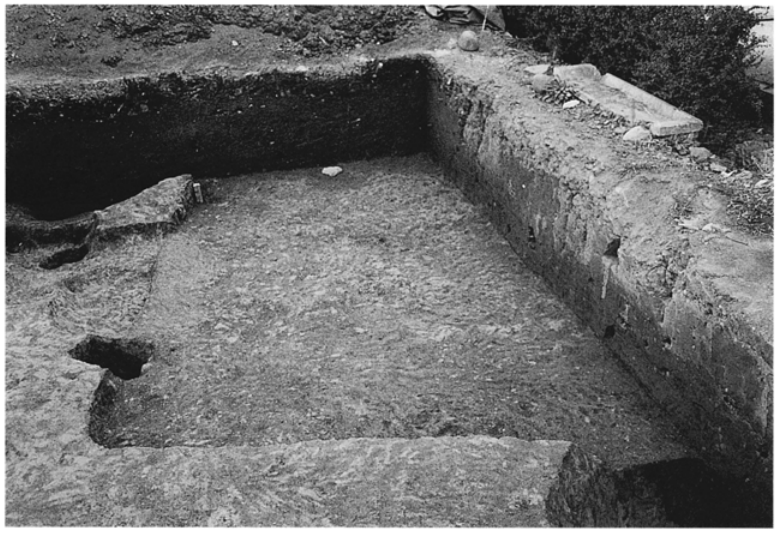
四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-17 掘り方検出状況［南東から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-17 カマド遺物検出状況



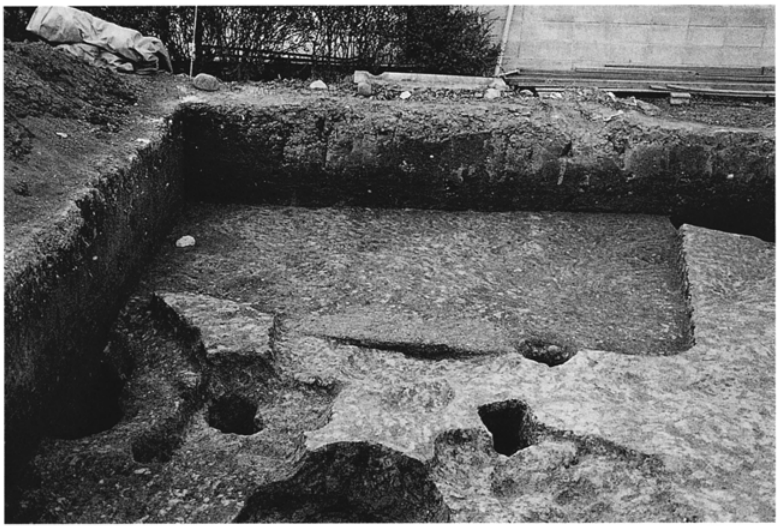
四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-18 遺物検出状況［北から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-18 遺物検出状況［東から］



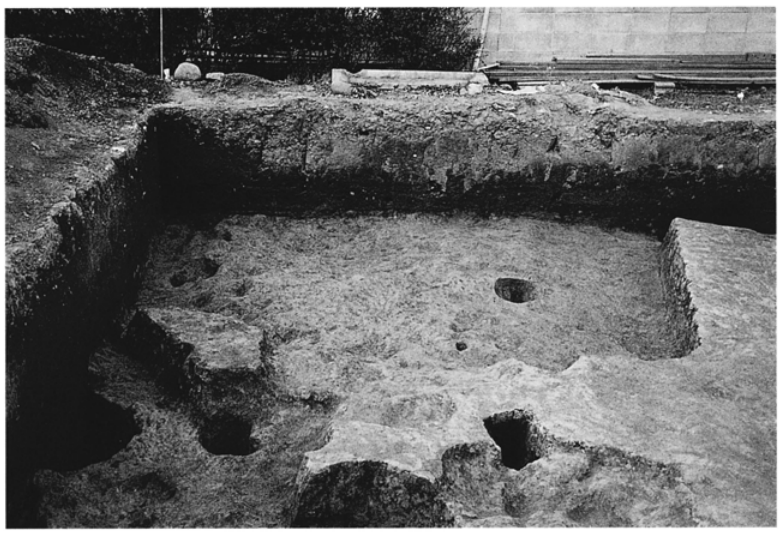
四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-18 床面検出状況［北から］

写真　22



四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-18 床面検出状況［東から］

四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-18 掘り方検出状況［北から］

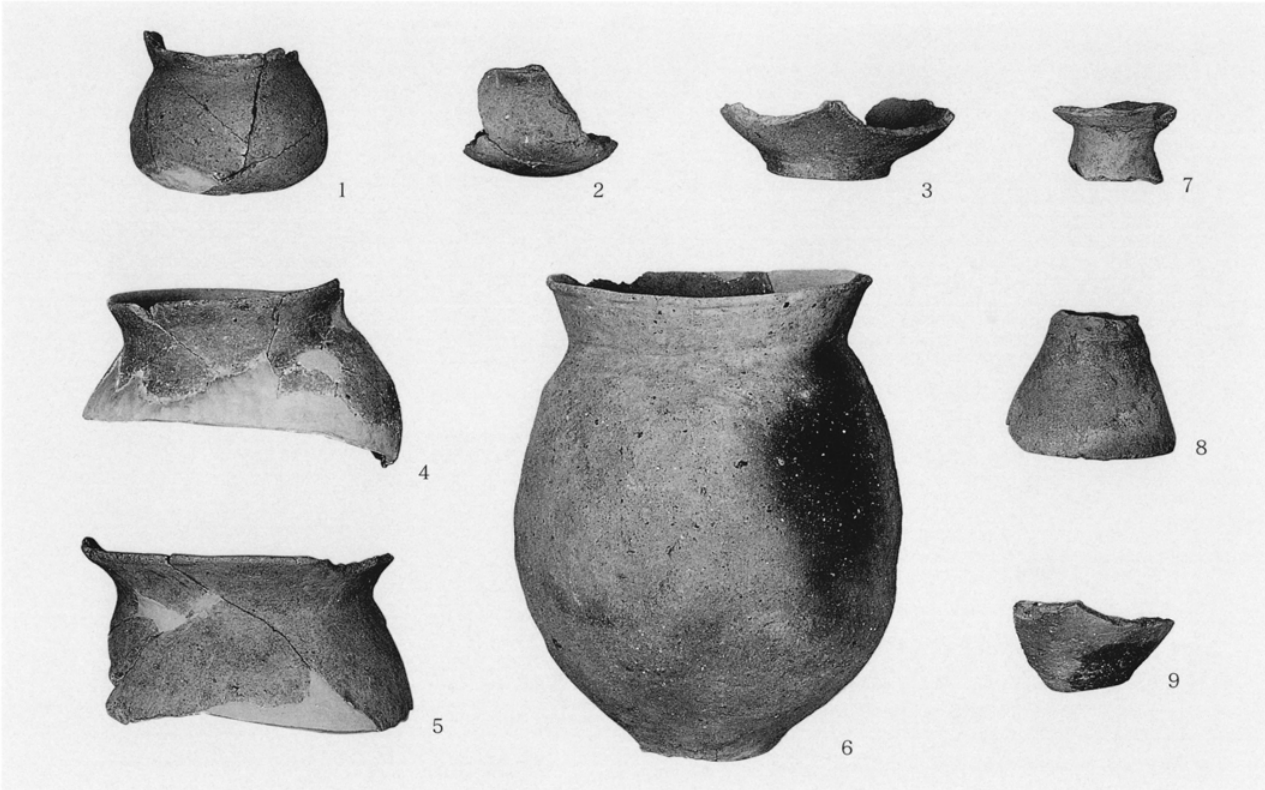


四方田遺跡Ⅳ次調査
S1-18 掘り方検出状況［東から］

四方田遺跡Ⅱ次調査　S1-01　出土遺物

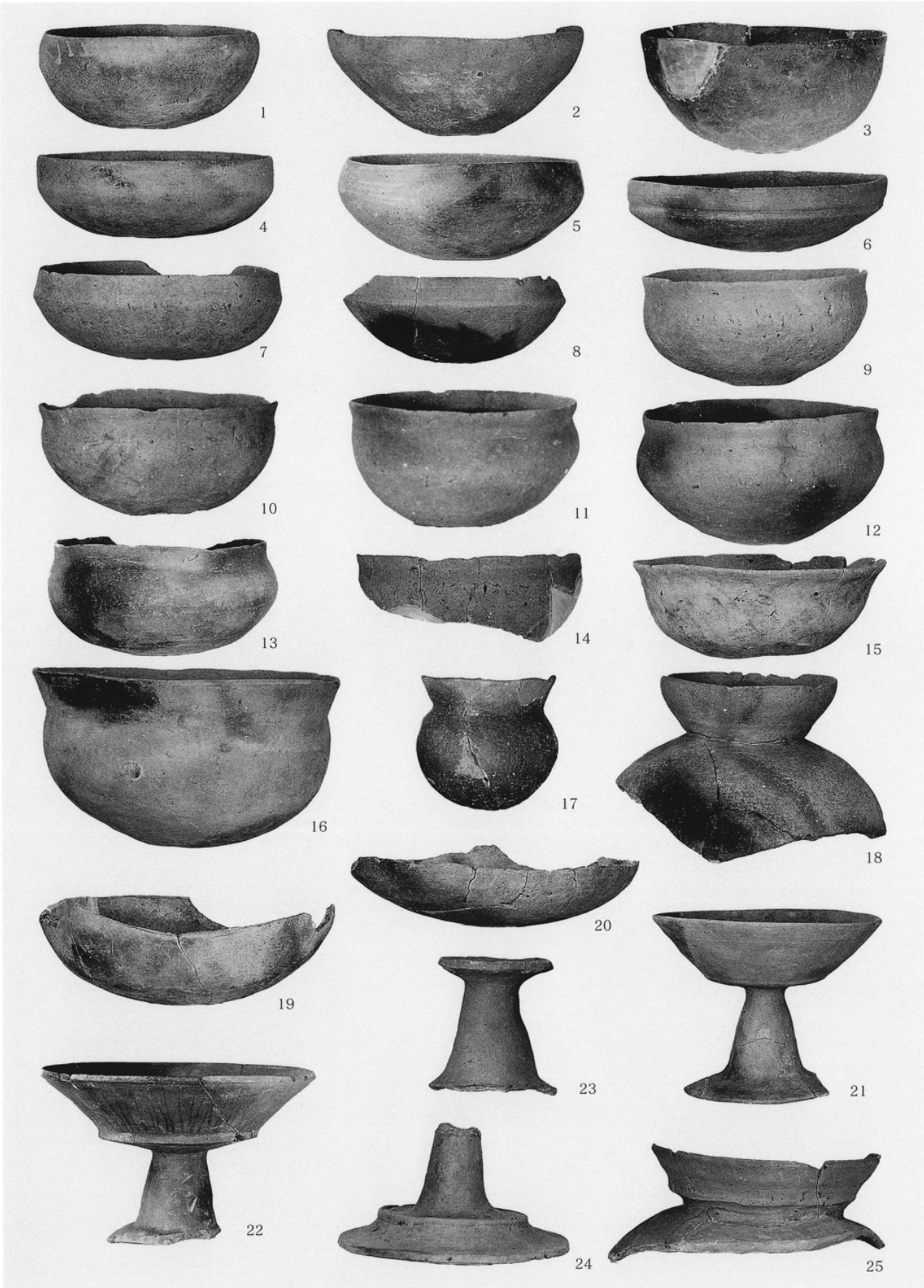
四方田遺跡Ⅱ次調査　S1-02　出土遺物

四方田遺跡Ⅱ次調査　S1-03　出土遺物

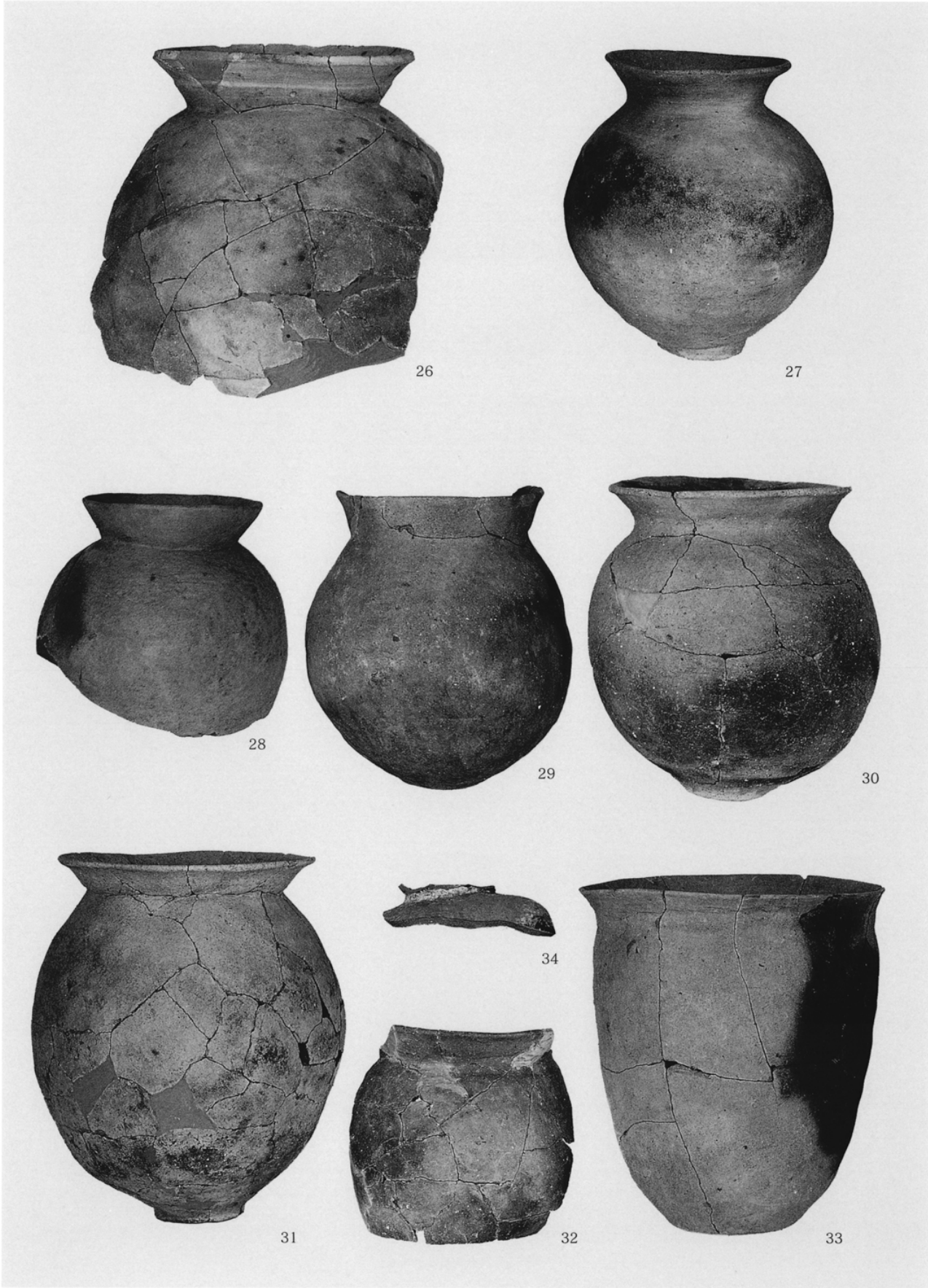


四方田遺跡Ⅱ次調査　S1-04　出土遺物

四方田遺跡Ⅱ次調査　S1-05　出土遺物



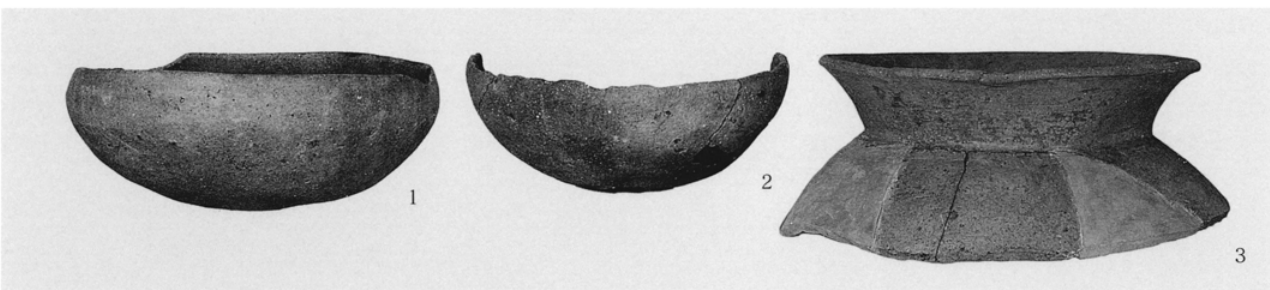
四方田遺跡Ⅱ次調査　S1-06　出土遺物（1）



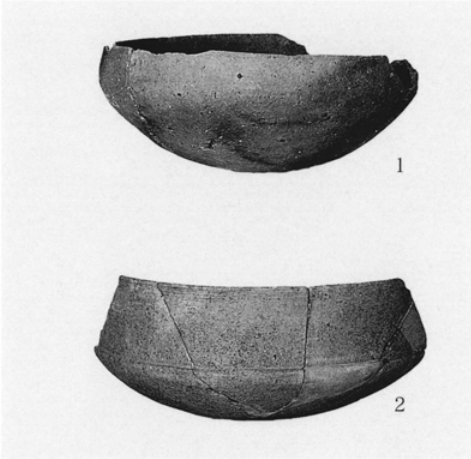
四方田遺跡Ⅱ次調査　S1-06　出土遺物（2）

四方田遺跡Ⅱ次調査　S1-07　出土遺物

四方田遺跡Ⅱ次調査　S1-09　出土遺物



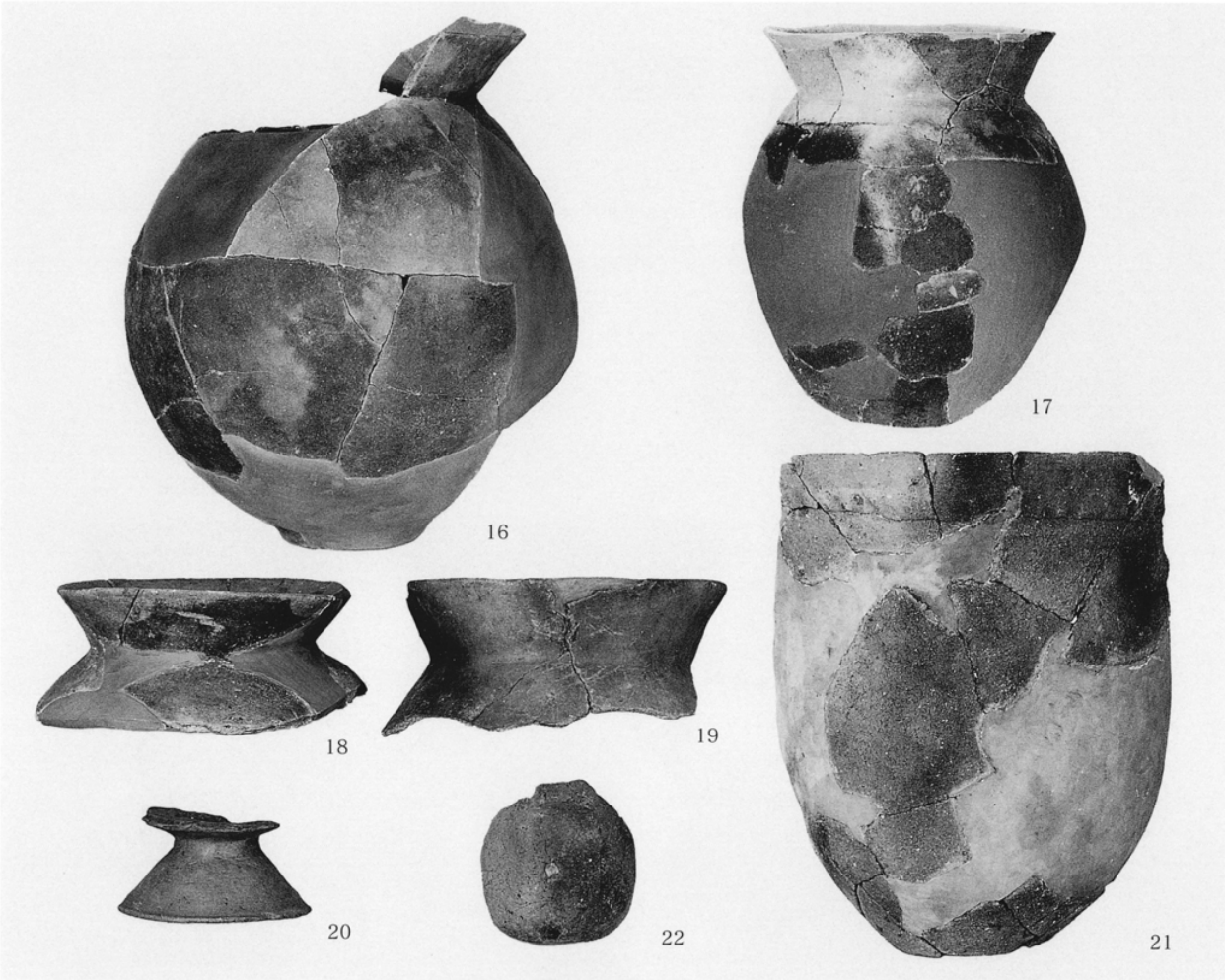
四方田遺跡Ⅱ次調査　S1-10　出土遺物



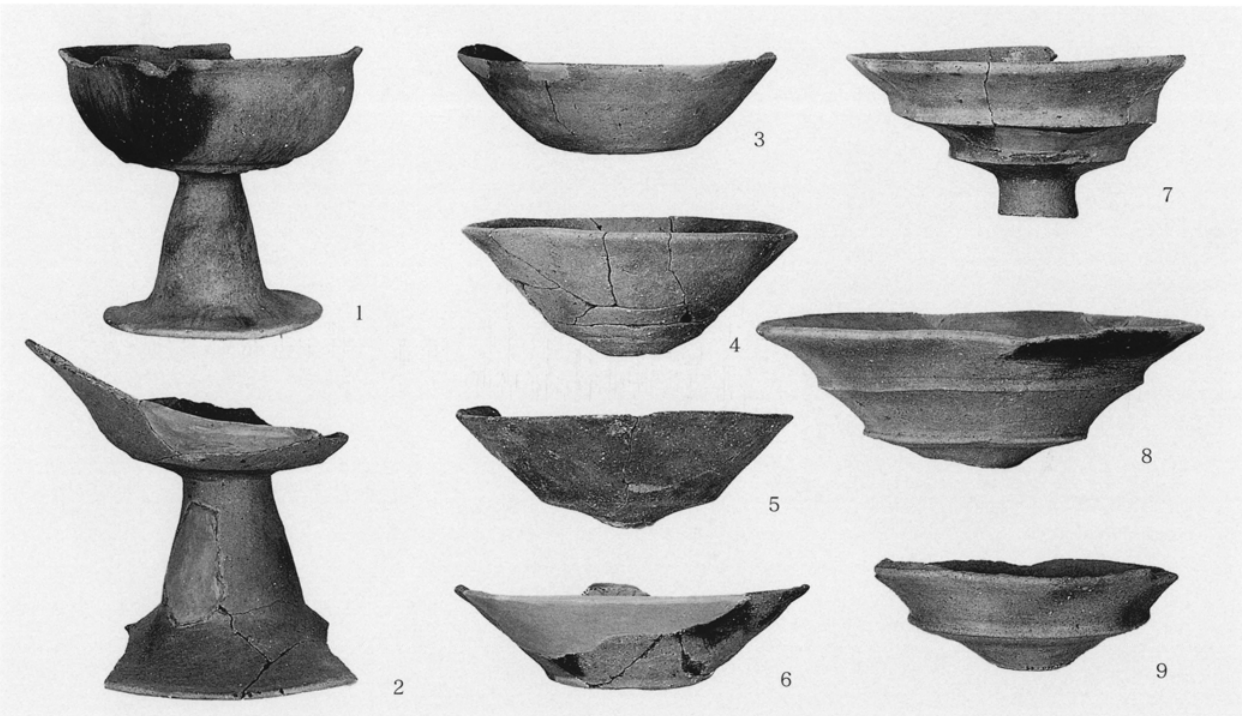
四方田遺跡Ⅳ次調査　S1-11　出土遺物（1）

四方田遺跡Ⅳ次調査　S1-13　出土遺物

四方田遺跡Ⅳ次調査　S1-14　出土遺物（1）

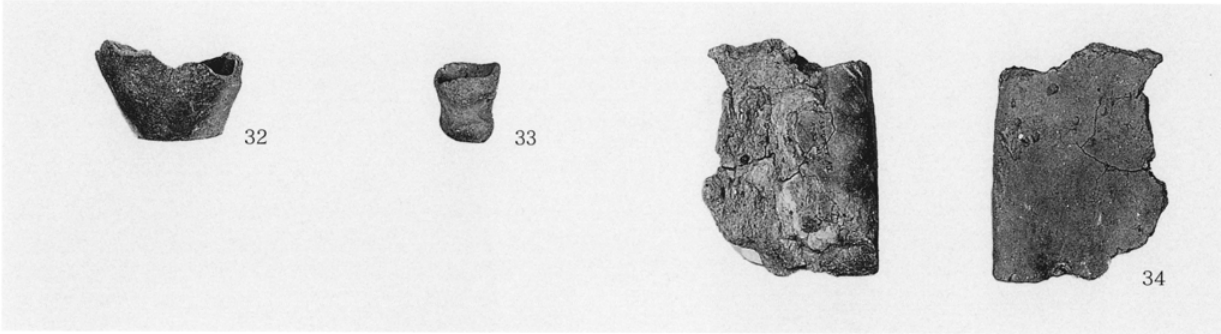


四方田遺跡Ⅳ次調査　S1-14　出土遺物（2）

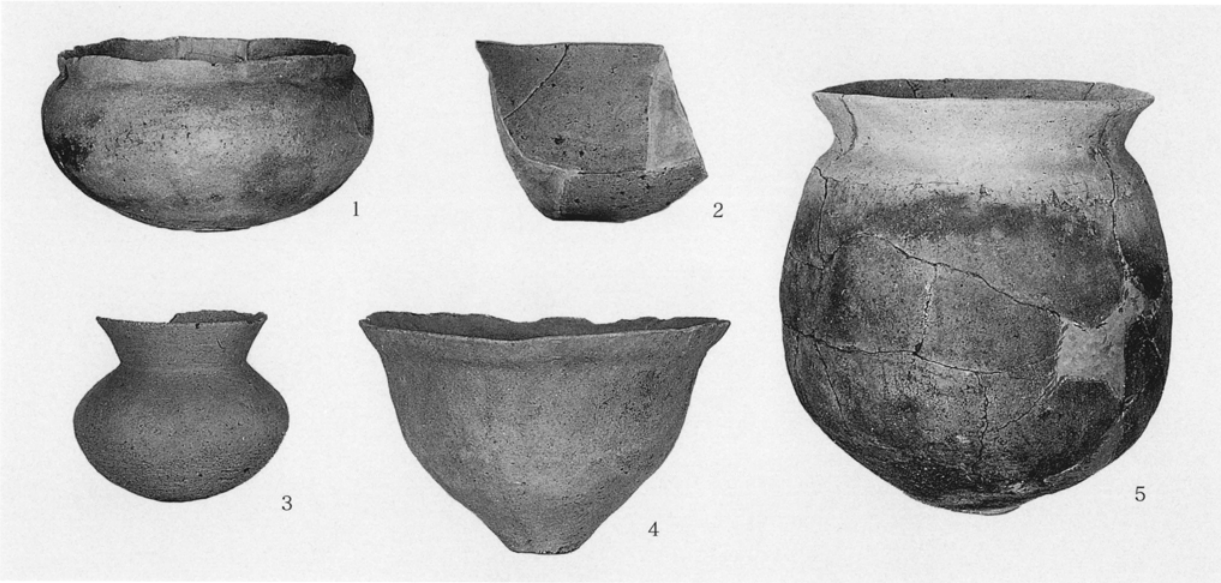


四方田遺跡Ⅳ次調査　S1-15　出土遺物（1）

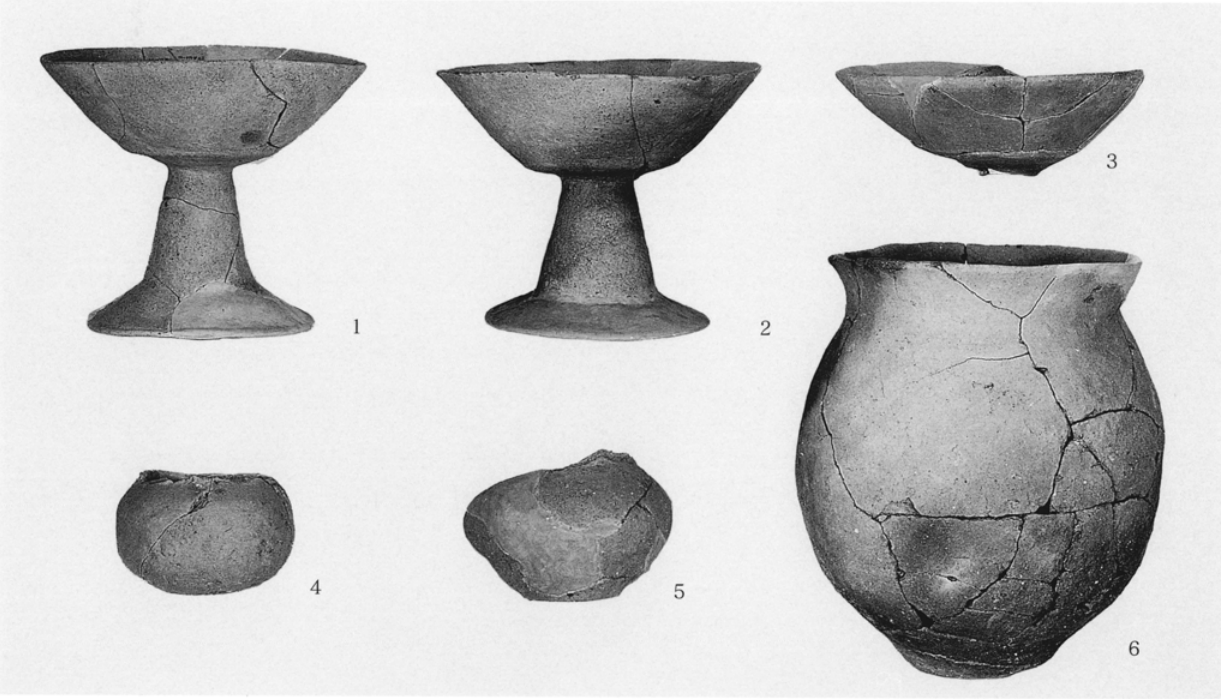
四方田遺跡Ⅳ次調査　S1-15　出土遺物（2）



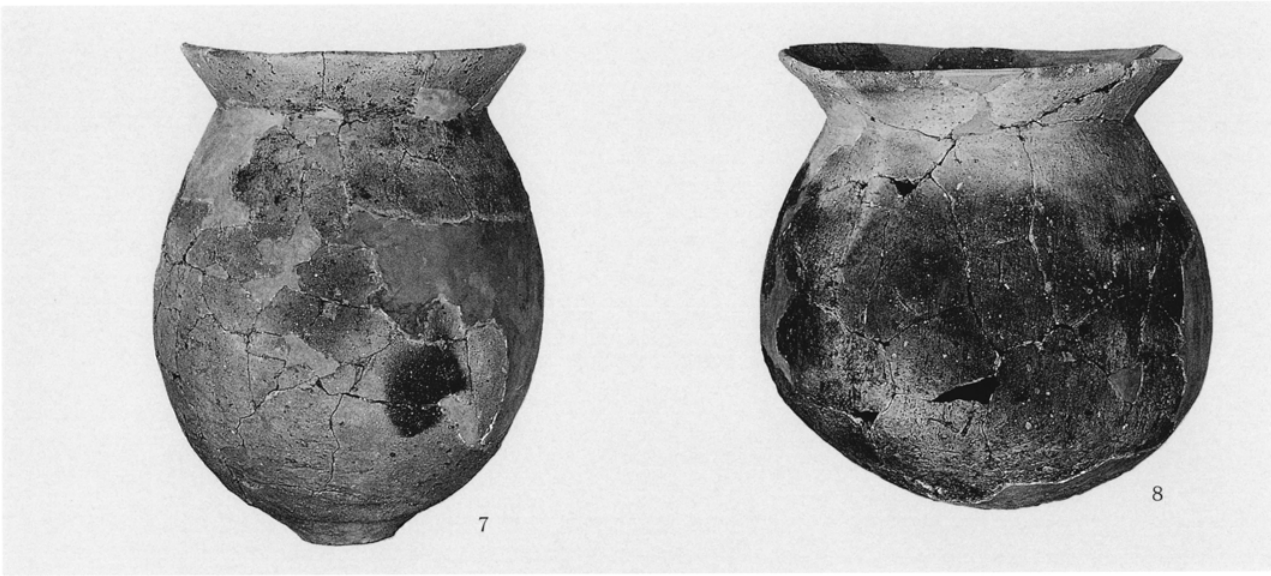
四方田遺跡Ⅳ次調査　S1-15　出土遺物（3）



四方田遺跡Ⅳ次調査　S1-16　出土遺物



四方田遺跡Ⅳ次調査　S1-17　出土遺物（1）



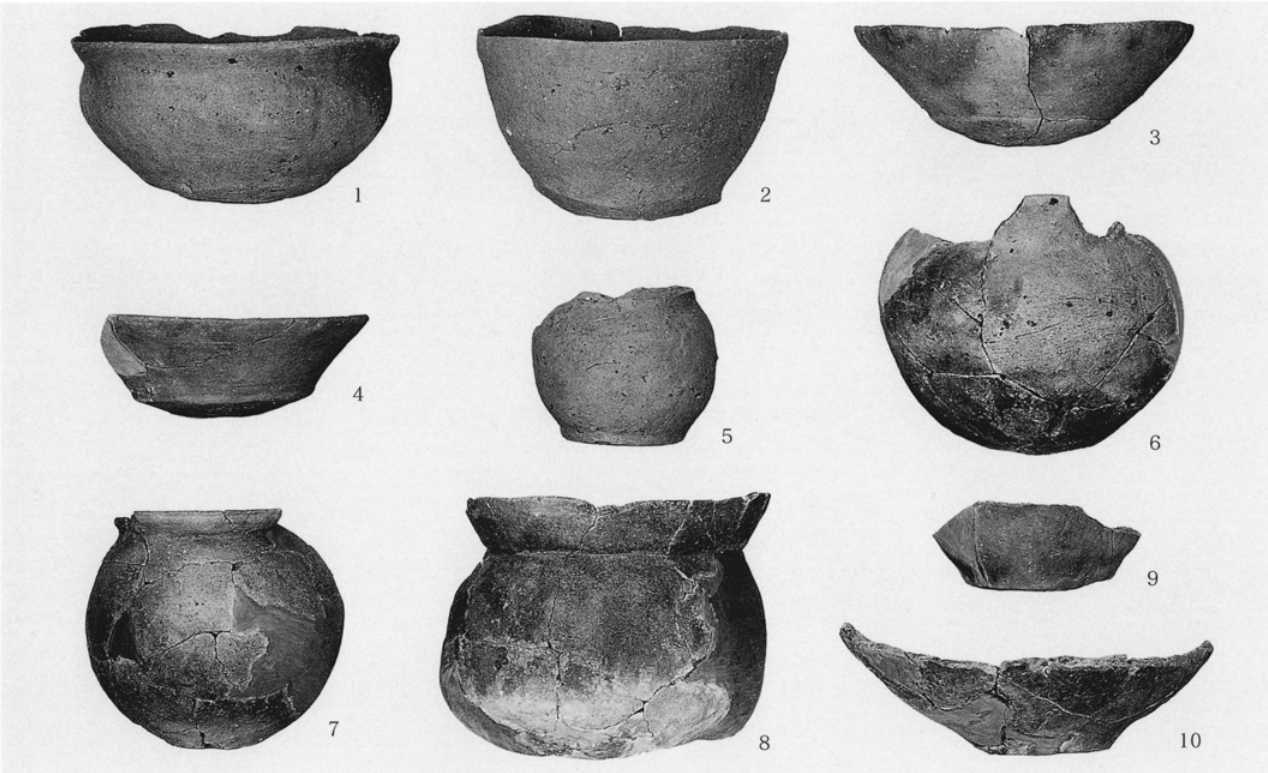
四方田遺跡Ⅳ次調査　S1-17　出土遺物（2）

四方田遺跡Ⅳ次調査　S1-18　出土遺物

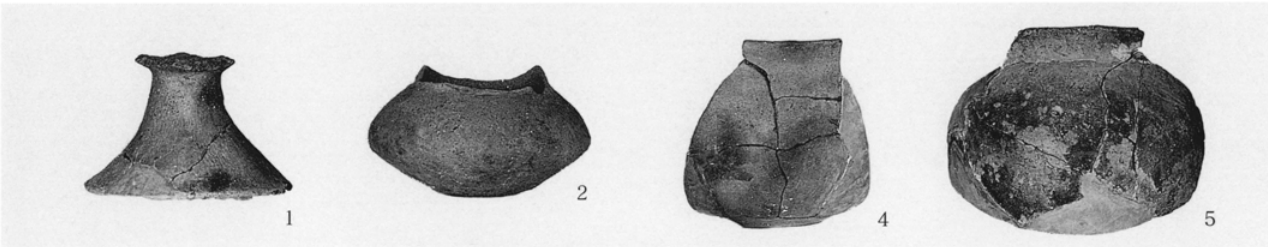
四方田遺跡Ⅳ次調査　遺構外出土遺物（弥生土器）

四方田遺跡Ⅳ次調査　遺構外出土遺物（石製品・石器）

四方田遺跡Ⅳ次調査　遺構外出土遺物［A区］



四方田遺跡Ⅳ次調査　遺構外出土遺物［B区］



四方田遺跡Ⅲ次調査　出土遺物

久下東遺跡Ⅱ次調査
調査前全景［北西から］

久下東遺跡Ⅱ次調査
久下東調査区全景［西から］

久下東遺跡Ⅱ次調査
久下東調査区全景［東から］

久下東遺跡Ⅱ次調査
S1-01 掘り方検出状況［南から］

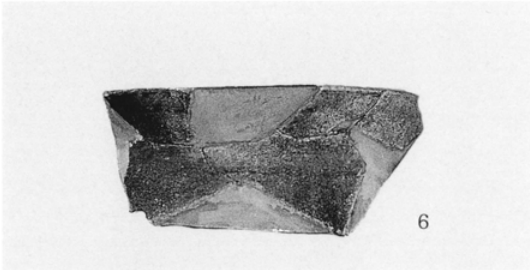
久下東遺跡Ⅱ次調査
S1-01 掘り方検出状況［東から］

久下東遺跡Ⅱ次調査
S1-02 遺物検出状況［南東から］

久下東遺跡Ⅱ次調査
S1-03･SK-01 検出状況［北東から］

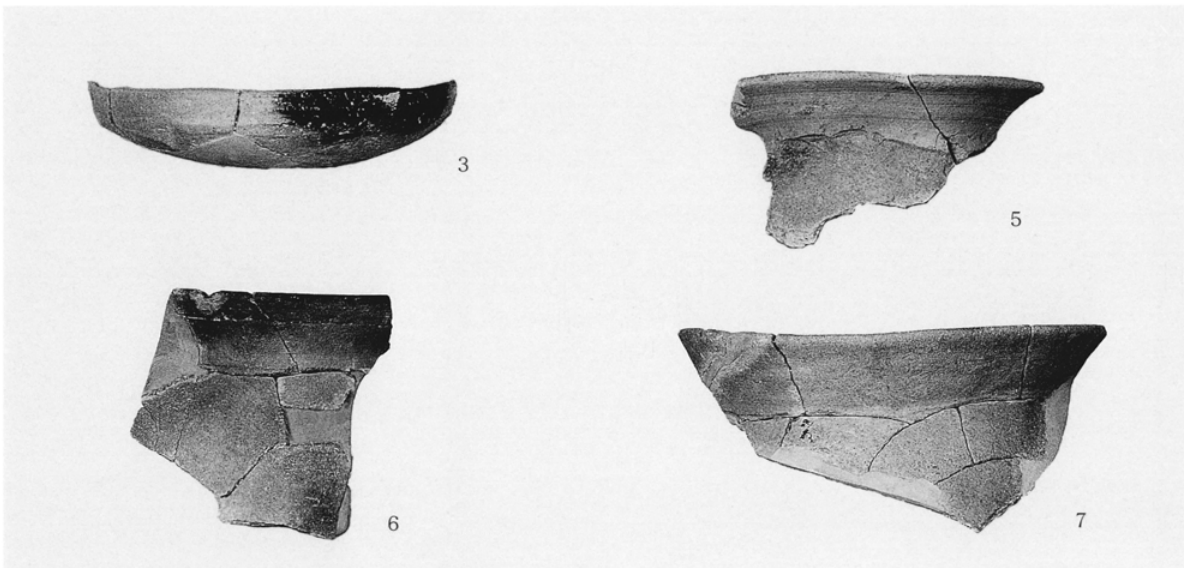
久下東遺跡Ⅱ次調査
S1-04 検出状況［北東から］

久下東遺跡Ⅱ次調査
SW-01･02 検出状況［南から］



久下東遺跡Ⅱ次調査　S1-01　出土遺物

久下東遺跡Ⅱ次調査　S1-02　出土遺物



久下東遺跡Ⅱ次調査　遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しほうでん（に・さん・よじちょうさ）　くげひがし（にじちょうさ）
書名	四方田（II・III・IV次調査）・久下東（II次調査）
副書名	市内遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第31集
編著者名	太田博之
編集機関	本庄市教育委員会
所在地	〒367-8501　埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号　本庄市教育委員会　　電話 0495-25-1186
発行年月日	西暦2005（平成17）年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
四方田遺跡	埼玉県本庄市大字四方田字屋敷前258ほか	112119	077	36°13′00″	139°10′10″	II次19921116～19930120	90m²	個人住宅建設
						III次19930121～19930122	244m²	個人住宅建設
						IV次19941012～19941222	118m²	個人住宅建設
久下東遺跡	埼玉県本庄市大字北堀1,308-1	112119	064	36°13′02″	139°11′10″	II次19930624～19930811	183m²	個人住宅建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
四方田遺跡	集落	古墳時代中期	住居跡	土師器、弥生土器、石器、石製紡錘車、石製模造品	
久下東遺跡	集落	奈良・平安時代	住居跡、井戸	土師器	

本庄市埋蔵文化財調査報告　第31集
市内遺跡発掘調査報告書
四方田（II・III・IV 次調査）・久下東（II 次調査）

平成17年３月25日　印刷
平成17年３月31日　発行

発行／本庄市教育委員会
〒367-8501 埼玉県本庄市本庄３丁目５番３号
電話　0495-25-1186

印刷／朝日印刷工業株式会社